
ツッコミはある日突然に

ついしょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツツコミはある日突然に

【Nコード】

N8077V

【作者名】

ついしょ

【あらすじ】

オタクとリア充のハイブリッドを目指す東雲空輝、ある日の登校中、天使のように可愛い女の子（ボクっ娘） 天野原悠に襲撃され、悠は謝罪と言うことで空輝の彼女になると言う。だがそれだけのことで付き合ったりはしないだろう、しかも彼女は以前から空輝のことを知っていたような口調。 いったいどのような意図で彼女になったのか。そして明かされる真実。 ツツコミ（？）から始まる超平和日常ラブコメディー！

2章 長いようで短かった春休みも終わり、空輝の高校にも新入生がやってきた！ 進級早々空輝にまた一人妹ができた！？
(あらすじは本文書きながら更新中です……)

くプロローグく（前書き）

はじめましてついしよです、読んでくれるととても嬉しいです！
おそらく後半の方が面白いです、出来れば前半でつまんねーよとな
らず後半も読んで欲しいです（苦笑） 後半読んでつまんねーよの
場合は本当にごめんなさいでしたあ！ 出来れば感想とかくれる
と飛び上がって喜びます！！

「プロローグ」

今日の日本は高度にPC技術が発展し、それにより生み出されるアニメやゲーム、またマンガなどが文化として外国にも認められるようになってきている。

日本国内において、その文化にいち早く適応し愛する、またさらなる発展を願う者達のことを『オタク』と言い、そのオタクに対立し、アニメやマンガ、つまるところの二次元ではなく、三次元、つまり現実の生活で充実している者（特に交際相手がいるかどうか）が重要なのだが、のことを『リア充』と呼ぶ。

リア充は文化を愛するオタクをバカにするとはいかないまでも、冷やかな目で見るが多かった。

そうした事を背景に両者の溝はどんどん深まっていた。

そこで、アニメが好きだが彼女もいる。という奴はどうなるのだろうか？ という疑問に辿り着く。これはあくまで個人的な意見だが、そのハイブリッドこそオタクが目指す理想の形だと思う。

僕達オタクもこのままではいけないということは頭の中では分かっているつもりなのだ。

なぜならオタクの中には趣味に没頭するあまり働かない者や、パソコンだけあればいいといってほとんど家を出ない者まででてきてしまったからだ。

それではリア充たちにバカにされても文句は言えまい。

これではいけない。いいはずがない！ オタクの評判を上げるため、いや。僕の残りの少ない高校生活を最高のものとするために！（こっちが本音）

オタクである僕、東雲空輝しのぐくひはそのハイブリッドを目指す！ ハイブリッドになってやる！

第1話 He was attacked by her

『ピピピピピピ！』アラームがけたたましく鳴り響く。

そんなアラームにチョップを入れると静かになった、そもそも僕はそんなに寝起きがいい方ではない、むしろ悪い方だ。だがまあ僕の寝起きが悪いことをこれ以上話したって面白くはないだろう。あれ？僕は、誰に話しているのだろう。

次はケータイが僕を起こしにかかってくる、どんだけ起きてほしいんだよ、とか思ったが時間は自分で設定してるんだよな。従順すぎる機械も考えものだ。仕方ないから起きてやることにする。

なんだろう、今日はいつもと少し違う気が……したい。毎日同じような生活はいい加減嫌になってくる、変革がほしいんだよ！

窓を開けると雲ひとつない青空が広がっていた。と言っても隣の家と家の距離が近いため、そこまで大空を見られたというわけではない。

空が晴れていると心も晴れ晴れしてくる、地球儀を解き明かしたくなる。

さて、冗談はさておきさっさと着替えを済ませ一階に降り、身支度を済ませ朝食のパンをラップに巻き靴につめて家を出る。

早起きはしたものの朝食を家で食べていると、乗りたい時間の電車に乗れなくなってしまう。

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい」

母がそう返す。

僕の登校は結構時間がかかる、一時間ぐらい。

そんな暇な時間にはまあ音楽聴いたりゲームしたり、『なんで二次元のボクっ娘は可愛いのに三次元のボクっ娘は可愛くないんだろ』なんて事を考えていたり、彼女を連れだした高校生なんて日に

は『リア充爆発しろ！ でもここでされると困るから誰も迷惑の
からないうちでお願いします！』とか思っている。

朝の満員電車は何度乗っても慣れない。

スペース的に無理があると思われるがこれに乗らないと遅刻して
しまうのだから、駅に着くたびにぎゅうぎゅう押される。

みんな必死だ、圧死するんじゃないかとさえ思う。

そうこうするうちに乗換だ。電車に足をかけ、振り向きながら乗
る。

するとその時駆け込み乗車してきた女の子が僕の腹に明らかわざ
とだろつ、タツクルをかましてきやがった、アメフト部にも入っ
ているのかな？

「ぐはっ！」

どこの少年漫画のバトルシーンだよ、とか思ったが今はそれど
ころではない。

「ちよっ！ おまえ何すんだよ！」

文句を言う女の子は、

「おおつと失礼、申し訳ない、お詫びにボクが貴方の『彼女が欲し
い』という願いを叶えてあげる」

ちよつとまで、いくらなんでもいきなり過ぎないか？

「はっ？ そもそも僕がいつ彼女が欲しいって思った？ そうさい
つも思っているよ！」

リア充爆発しろ！ っつのも所詮嫉妬心から出る言葉さ！」

「おおっ、ずいぶんと自虐的なのだな貴方は」

ふと気付く、この子めっちゃ可愛い！ 肩にギリギリ届かないく
らいのストレートのさらつとした黒い髪をこめかみのあたりでヘア
ピンで留めている。くりくりとした大きな目に長いまつげ、天使の
ような白い肌、とても整った顔立ちをしている。身長は僕より少し
小さいから百六十センチくらいかな。

二次元にしか興味ありませんよ、的な僕にでも可愛いと思わせるく
らい可愛い！ このたとえで伝わるだろう（自己解決）

「どつやつて叶えてくれるのその願い」

手すりにぶつけた後頭部をさすりながら、僕は少しも信じるわけもなく尋ねると、彼女は答えた。

「そりゃあもちろんボクが彼女になるんだよ」

あっけにとられた。一呼吸置き、周りの迷惑も考えず叫んでしまった。

「はっ!？」

他のお客さんが一斉にこちらを向くがそんなことは気にしない。突っ込みどころはたくさんある。例えば、この子ボクっ娘なの? とか。

だがそんなこと今はどうでもよくなってしまうている。彼女になるだと? 僕はこの子のこと何も知らないんだぞ? おそらくこの子も僕のことを何も知らないのだろう。

少し考え僕は口を開く、

「なんで君が彼女に?」

「不服か? 自分で言うのもなんだけど、ボク結構可愛いと思うんだけどなあ」

自分で言うほど自信があるのか? いや、まあめっちゃ可愛いんだけど。でも自分で言うのか。いや、まあめっちゃ可愛いん

「不服ではない、むしろ嬉しいくらいだ。だがしかしだな、君は僕のことを何も知らないだろう? なんて彼女に?」

僕はそう尋ねた、すると

「はっはっは、そうか無理もない、やっぱりばれてなかったか、さすがだなボク!」

何を自己解決しているんだ?

「理由を答えるよ!」

「そうだな、いいだろう答えましょう」

一息置いて彼女は答えた。

「ごめんなさい! 軽くストーカー行為を行っていました!」

どうやら僕は知られてしまっているようだ。本日二度目、あたり

かまわず叫んだ

「なんだとーう！」

周りの反応はお察しの通りだが、二度目ということもありちょっと厳しめ。そんな熱いまなざしで僕を見ないでください。

そもそも僕は、自分で分かるくらいかっこいいというわけではない、ルックスは中の下だと思っただけ……

「なんで僕を？」

「だって」

なんで照れてんだおい？ 可愛いじゃねえか。

「……かっこいいんだもん」

ズギヤーン！ 心臓を打ち抜かれた。

「こちらからお願いします！ 付き合っして下さい！」

若いってのはいいわねえ、と聞こえたがノープロブレム

「え、困るよ……」

こ、断られた！？

「そんな人目も憚らず……」

照れながら彼女は言った。なるほど断られたわけじゃないみたいだ、ほっと一安心。

「もちろんおーけーだ！ じゃあこれから宜しくね、二年一組 東

雲空輝君ののめくうき」

名前が割れていた

『空輝』と書いて『くうき』と読む、まあ読めないことはないだろう、しかし存在が空気がみたくて悲しい、友人は空輝の空をとって『そら』と呼ぶ、まああだ名みたいなものだ。

「ど、どこで僕の名前を？」

「え？ だって同じ学校だもん、ボクは二年二組の天野原悠あまのはりゆう」

あんまり驚いていたもので気付かなかった、この子うちの学校の制服だった。あれ、でもこんなに可愛い子だったら話題になるはず？ 天野原さんは心を読んだかのように言った

「今日転校してきたの、あ、でも違うよ？ 東雲君を追いかけて来

たとかじゃなくて家庭の事情でね」

「どうやらこれは本当らしい。隣にいる僕の彼女(?)をチラ見する、ほんと可愛いな。ふと思いつく。」

「ところで今日転校してきたのになんで僕のクラスと名前を？」

彼女はちよつと驚いたようだ。まるで予想外の質問が投げかけられた時のような。

「えっ、うん、えっと……そう！ 学校に知り合いがいたの！ そうそう、知り合いがいたの！」

「どうやら大切なことらしいので二回言っただけだ。」

「まあ、そういうことだからこれからは悠って呼んでね東雲君、東雲君ってのもおかしいか、空君でいい？」

「うん、それでいいよ……悠さん」

さすがに恥ずかしいこれが今まで彼女いない歴〃年齢のチキンっぷりだろう。これはもう仕方がない、下の名前を呼び捨てにできるのはせいぜい妹くらいだろう。

お母さんだつて『お母さん』って呼ぶのが恥ずかしいので『母』って呼んでいるくらいだ。

「悠さんかあ、うーんなんか初々しくていい感じだね」

弾むように言う悠さん。

「ほら、駅着いたよ！」

照れ隠して少し言葉が強くなってしまふ、これも仕方ない、彼女いない歴〃年齢な僕はチキンなのだ。空も飛べない鶏だ。

とりあえず電車を降りる、時間は比較的早いがこの時間でも他の生徒はいる、みんなケータイをいじったり音楽を聴いたり人それぞれだ。

駅からは歩いて十分くらいのところにある学校だ、よく考えたら女の子と一緒に登校なんて小学校以来だ、これは初めてじゃあない、どうだすごいだろ？

だがしかしやつぱり隣に可愛い子がいるとドキドキする、あまりにも急に彼女(？)が出来たのであまり実感がわかない。すると悠さんはとんでもないことを言い出した

「手え繫いで、手え繫ごつか手え繫ごうよ！ いえ、手を繫いでく
だしい」

噛んだようだ、意外とシャイなんだな、くだしやいだけに。あれでもこんなことを言い出すんだからシャイではないのか？ そんなことはどうでもいい。

三度目になるようだが彼女いない歴〃年齢の僕は今まで女の子と手をつないだことなんてない、決してない、断じてない、からつきしない、もちろんない、ネバーだ。その僕に手を繫げたと？ 可愛い事言ってくれるじゃないか。しかしそんな度胸はあるはずがなく「え、だってほら他の生徒もいるし、さすがに今はちょっと」

悠さんは残念そうだ。

「もお仕方ないなーじゃあ今度の日曜日デートしよっか、二人だけならいいでしょ？」

「ブフツ！」

吹いてしまった

「日曜？ 日曜か、うーん日曜ねー」

あれこれ考えていると彼女はポケットから手帳のようなものを引っ張り出し何かを確認しているかと思うと

「空君の日曜日の予定は今のところボクとのデートだけだよ、あとは早起き出来るかどうかっただけだね、少しいやらしい話をするとお金もこの前、祖母様にもらっているよね、だから問題ないかと」
知られていた、なんでそんなことまで知っているんだこの子、そして勝手にデートが予定に組み込まれていた。

「今ボクがいやらしい話って言って少し期待した？ ふふダメだよおまだそれは早いかな」

なんて事言いやがるこの女、ととととと失礼、なんてこと言い出すんだ悠さんは

「考えてないよ！ ていうかさ！ なんて金銭事情まで知ってんのさ！？」

細かいことは気にしない、といった表情でさらっと流された

「どこ行こっか？」

なるほど、僕も少し慣れてきたぞこの子に、とりあえずアニメで仕入れた情報を思い出す。

「初めてのデートは遊園地って決まってるって誰かが言ってたような。僕はどこでもいいよ、悠さん決めていいよ」

「じゃあまあ初めてだし、そうだね遊園地でいっか」

こういうわけで初めてのデートは遊園地になった。

ちなみに今日は金曜日。だがただの金曜日ではない、僕に彼女ができたという奇跡が起きた金曜日だ。

今は学年末テストが終わって授業はほとんどない、もうすぐ春休みというわけだ。授業はほとんどが自習で、なんでこの時期に転校してくるんだろうと思ったが、彼女曰く『家庭の事情』らしい、そこに踏み入るほどまだ僕は親しくない、これからなるのだ（自分で言っただけ）理由はおいおい聞いていくことにする。

学校に着くと彼女を職員室まで連れて行き、僕は自分のクラスへと行った。席に着くと同時にチャイムが鳴った、相当ギリギリだったようだ。まああんな話をしていたら仕方ないか、駅に着いたときに人が多かったのは遅かったからなのだろう、時計見てなかったなあ。担任がやってきて朝のホームルームを始める。伝達事項を伝えると担任はさっさと出て行った。担任によると今日は午前授業で一時間目以外は自習らしい。

担任が出ていくのを見計らって後ろの席の友人、真野が話しかけてきた。真野とは中学も一緒でとても親しくしている。

「おい空、昨日のアニメみたか？ あれは衝撃的だったな！」
そうだった。僕は昨日そのせいで夜更かしをしたから起きるのが辛かったんだった。

「ああ、見たよ、まさか主人公に彼女が出来るなんてな、急展開だ」
「俺も可愛い彼女が欲しいなー！ どっかに落ちてないかな」
何言ってるんだこいつ落ちてるって捨て猫かよ。

「でもまあいきなり彼女ができるなんてアニメやラノベの中だけだけどな！」

「そうだなー」

一応同意してみたが、そういえば僕には今朝彼女が出来たのだ！
天使みたいに可愛いのだ！ 夢みたいだな！ すごくしている間に先生が来た、一時間目は世界史だ。

授業は何一つ頭に入らない、僕は天井を見つめ悠さんのことばかり考えていた。

二、三時間目の自習は友人と話して終わった、自習なんてそんなもんだらう。帰りの準備をしていると真野に声を掛けられた

「お前日曜日暇だろ？ カラオケとかボーリングとかいかね？」

ふふふ残念だが僕は暇じゃないのだ人生初のデートが、だがこれは言わない、言ったらおそらく歩けない体にされる。俗に言うフルボッコってやつだ。

「悪い、日曜日は用があつて」

「なんだー？ 彼女でもできたのか？」

「なんだと、ばれてる！？ むせてしまった。」

「ぼふっ！」

「まあお前に彼女が出来たら俺のは嫁ができるわな」

少し驚いたがどうやら冗談らしい、冗談じゃなかったらビックリだ
「なんだお前、俺に彼女が出来ないだど？ なめんなよ、俺にだつてめつちや可愛い彼女がそのうち！」

真野は笑って「へっ、じゃあまた誘うわ」どうやら諦めてくれたようだ。

担任が来ると真野はそそくさと席に着いた。

帰りのホームルームが終わる。すると真野が、

「じゃあまた明日」

「おうまた」

真野は帰宅部のエースなのだ、誇りを持っているらしい。

かく言う僕も帰宅部なので結構早く帰る。

教室を出ると隣のクラスが何やら騒がしい。なんだなんだ？ 聞こえてきたのは、どこから来たの？ や好きな男性のタイプは？ とか、彼氏いるの？ とかだ、そういえば隣は二組だったな、おそらく悠さんが質問攻めにされているだろう。こういうとき彼氏である僕はどうすればいいんだろう（何恥ずかしいこと言ってるんだ僕は）クラスに馴染むのも大切だろう、僕がどうこうする事じゃないなどと思い、お腹が空いたので食堂へ向かう

「腹減ったなー、今日は何にしようかな」

なんて独り言を言っていると

「よう東雲え」

その声に振り向くと、友人の吉野が弁当を三つ抱えていた。

「なんだ、吉野お前そんなに食べるのか？ 元気だなあ」

吉野はにやりと笑い

「はっはっはこんな弁当三つよりも女の子の方が食べたい！ くそっ、おいしそうな女の子はたくさんいるのに、俺に食べることを許可してくれる女の子は何故いない！？ なんでだ空！」

下ネタである。

「下ネタかよ、そんなこと聞かれたって僕にはどうしようもないだろうに……」

僕は苦笑する。

ちなみにこいつ、いくら食べても太らない体質らしい、まあ僕もだけど太らない代わりに上にも伸びないんだよなあ僕の場合。

「ああ、昼飯に悩んでいるなら今日はラーメンがお勧めだぞ、どうやらわかめが変わったらしい」

わかめ一つで変わるのか？

「なるほどじゃあ今日はラーメンにするよ、ありがとう」

確かめてみる事にする。吉野は何やら急いでいるようで「じゃあまたな」と走って行った

「ああ、じゃあな」

吉野と別れるとラーメンを頼んだ。『ラーメン四百円』なるほどまあ量にしてはちょうどいい値段か、出てきたラーメンをテーブルに運ぶ。いいにおいだな。

「さてと、頂きます」

食べようとする何者かの手が僕の視界を遮ると同時に甘い、いいにおいがラーメンのにおいを吹き飛ばしていった。なんだこの柔らかい手、すげえ綺麗とか思っている。「だーれだ？」とかわいい声がる。なるほどそういうわけか、まったく可愛いなあ。

「天野原さんでしょ？」

視界が広がる。

「せーかーいっ でも『天野原さん』ってのはやだなあ」

ああ、つい名字で言っちゃったか。

「学校なんだし名字の方が……」

そうは言ったが既に周りの視線が痛い、視線だけで死ぬる。

「ラーメン食べてるんだ、じゃあボクもラーメン食べようかな！」

そういうと彼女はとててて、とカウンターへ走って行った。帰りを待っていると思っただ、何この展開？ 一日前の自分が見ていたリア充爆発しろとか言い出すだろうな、ああ、周りの目が痛い、困った。彼女が来たのはめっちゃうれしいのに、なんだろうこの気持ち、どこかうしろめたいと思う。悲しいなあ。

悠さんが戻ってきて、席に着くと彼女が口を開いた。

「いやあ、転校生は大変でねっ質問攻めにあっちゃって」

なんだろうな、女の子がラーメンとか食べる時に髪をあげるけどなんというかこう、すごい魅力的だよな……。

「ねえ、聞いてる？」

おつと見惚れていたようだ。

「うん聞いてた、そういえば隣のクラスだったね、騒がしかった、さっき通ったよ」

「空君は受けなのかな、攻めなのかなって話をしてたんだよ？」

「そんな話はしていないっ！」

「あはは、何でもない何でもない」

語尾に音符でも付くかのような言い方だ。

ラーメンを食べ終わる。

「さて、このあと何か用ある？　どっか行きたい所あれば案内するけど」

「うん、じゃあまずは学校を案内してもらおうかな」

「了解」

僕たちは食堂を後にした。

まずは一階から案内するかな。

「ここが保健室」

「ほー、ここであんなことやこんなことをするんだね、ほー」

何やら間違った分かり方をしたようだ。

「いや、しないから、したいから、でも出来ないから」

彼女はにやつと笑った

「へえ、できないんだ？　でも保健室だよ？　傷口消毒したり、頭

痛い時に寝たりできないんだ」

なん、だと……？

「ごめんなさい、できます……」

「あはは、勝ったあ」

彼女は楽しげだ。

さて、次は

「理科室ね」

「ふむふむ、ここであんな実験やこんな実験を……」

「どんな実験を!？」

「いやあ、水素と酸素合わせたり、酸化銅を還元させたり」

「そんな実験は理系でもしないんじゃないかな？」

「そうなんだへえ、でここは？」

案内なんてどうでもいいんじゃないかなって思えてくる。そんなこんなで三階にきた。

「ああ、ここからプールに行けるんだ」

さて、どんなのが来るんだ？

「プール、ね、ああプールか、分かった次いこ次」

おや？ テンション下がった？ その後、一通り学校の案内をした。

「さて、帰ろうか」

「そうだね、帰ろっか」

僕たちは靴を履き替え学校を後にする。

まだ昼の十二時ちよい、太陽は高い。昼食を済ませているし、帰ってから特にすることは無い。

下校中、僕はふと思いついた

「悠さん、メアドとか電話番号とか交換しようよ」

「おっとそうだね、忘れていたぞ、えと、はい赤外線」

ケータイを向かい合わせる。登録完了

「ボクはいつも思うのさ、赤外線って便利だなー、色々透けるしって」

また突拍子もないことを言い出したぞ。

「おいおいおい、女の子がそういうこと言っているの？ いや、僕としては全然気にしないというかまあ好きだけど」

「ん？ 透けるってもちろんこれだけ簡単だと個人情報も透け透けで便利だなーって」

ちよつと無理がないかそれ？ とは思うものの

「嘘だ！ そんなのウソだあ！」

僕は泣き喚いた

「はっはっはー何を考えていたのかな？ まだまだだなあ東雲君」
どこの探偵だこの野郎そのうちワトソン君とか呼ばれそう。

そんなやり取りをしているうちに駅に着く。

電車に乗ると席が空いていた、そこに腰を下ろすと欠伸をしながら
悠さんが言った

「ふわあ、ちよつと眠いなあ」

「降りるのどうせ終点だし寝てれば？ 起こしてあげるよ」

終点と言ってもまだそこから乗り換えが残っているんだけどね。

「うん、じゃあよろしく……」

寝たようだ、はや！ ネコ型ロボットに面倒をみられている小学
五年生並みだ。

そついう僕も実は結構眠い、もちろん昨日の夜更かしのせいだ。
起こすと言って自分が寝るわけにもいかないので起きている。

ふと隣を見るとすうすうと可愛い寝息を立てている悠さん、寝て
いる顔も可愛い。

いまだに実感がわかない、僕なんかにも彼女ができるんだなあと、
しかもこんなに可愛い彼女が。

夢オチでしたなんてことはないだろうな、ここまでやってきて夢オ
チなんてことはないだろうな！ フラグを立てているわけじゃない
ぞ！

夢オチであるわけもなくふと眼を覚ますと、もうすぐ終点の駅だ。
どうやら僕も寝てしまっていたらしい。悠さんを起こす。

「着いたよー、起きて」

「んんん、ふああ……着いたの？ 早いなあもう七時間は寝ていた
い気分……」

「どんだけ寝る気だよ、がつつり寝てんじゃん」

眠たそうに目をこする悠さん、七時間とか家で寝るよ。

電車乗り換える、電車に乗ると悠さんが言った

「この後何か用ある？」

暇人の僕に予定なんてあるわけがない、そもそもこんなに可愛い子にどこかに誘われたら予定があっても行きますね。

「もちろんないけど？」

「じゃあさ、どこか行かない？ 家帰ってからでいいんだけど」

「うん、いいけどどこに行くのさ」

えーと、といった表情で考えているようだ

「んー、ボクの家近くにゲームセンターがあるんだ、そこに行かない？」

「いいけど家どこ？」

そういえば知らなかった、ほとんど同じ帰り道っぽいし、そんなに遠くないと思うけど。

「秘密さー、そのうちわかるから」

「うむう、わかったよ」

「あれ？ ところで、駅どこまで同じなの？」

「ぜんぶ」

おつと意外なことに全部と来ましたか

「へえ、意外と家近かったりしてね」

「うん？ やっぱり知らないんだ」

にやつと笑う、意味ありげだ。そうか悠さんは既に僕の家を知っているわけだ。

電車で揺られ自宅の最寄り駅に着いた。

「じゃあ僕ここだけど、同じなんだよね……」

「へっへへ、そうだよー、どこまでも君と行くよー！」
なんかかっこいいな悠さん。

「じゃあ行くっか」

「うん」

駅から家までは大体十分くらいだ、走れば五分、僕は結構足が速

かったりする。

「家、近いの？」

僕はいい加減、気になったので尋ねると

「大丈夫、大丈夫」

何が大丈夫なんでしょうねえ天野原さん？

とりあえず家に着いたので

「知ってるんだよね？ 僕の家ここだから」

「うん知ってる、じゃあまたあとでね」と隣の家に入っていきこうとする悠さん。

「お隣さん！？」

「えへへー、先週引越してきた天野原と申します。よろしくお願
いします」

なるほど、この前誰か引越してきたなあとは思ったがまさか悠
さんだったとは。

「家の近くのゲーセンってあそこだよね？」

そう言いながら僕は少し遠くの大きなボーリングピンが乗っかっ
ているようなビルを指差した。

「うんそうだよ、じゃあ二時にここでいい？」

「了解わかった、じゃあまたあとで」

第2話 ぬいぐるみ殲滅作戦 〈mission in possible〉

題名はわざとです

「ただいまー」

家に帰ったが誰もいない、そうか今日は母も仕事の日のようだ。時間を確認する、ただいまの時間午後一時十分、待ち合わせまで時間がある。

女の子とゲーセンに行くのなんて久しぶりだ。初めてではない、一年のときは結構クラスの女の子と一緒に遊んだりしたのだ。意外にも。

二年のクラス替えて僕は知っている友人が真野だけになって女の子とのかかわりがほとんどなくなったのだ。

だから二年になって女の子と遊ぶのは初めてだ。とりあえずシャワーを浴びてみた。清潔は大切だもんね。

私服を選ぼうと思うのだが、あまり外に出ないので私服は少ない、普段は学校から帰ると風呂に入るまで制服でいることが多い、そのあとはパジャマだ。だから私服を着る機会が少ないのである。

修学旅行とかどうしようと思う。今度買いに行こうと決意した。とりあえずたんすから引っ張り出した一番イケているであろう私服に身を包む。所詮僕のセンスだ、たいしてイケてはいないのだろう。

悲しいねまったく。

『カツン』と窓から音がした。

何だろうと思いいカーテンを開くと同時に窓を開けるとおでこに何か当たった。

「いて」

床にはよく消えるあの消しゴムが転がった。

誰だこんな便利なものを投げてくる奴はと思いい外を見ると。

「あ、空君ごめん」

なんと悠さんだった。

悠さんの家と僕の家の間隔は約一メートル。結構近い気がするけどいいのかなこれ？

「どうやら部屋から消しゴムを投げてきたらしい。」

「ごめんごめん当てるつもりはなかったんだけど」

「うん、大丈夫」

「て言うか、部屋まで近いとはね」

「うん、それで準備できた？」

「ああうん、もういいよ、悠さんもいいの？」

「うん、じゃあちよつと早いけどもう行こうか」

「こういうわけで出かけることになった。」

ゲームセンターに着く、そして悠さんは開口一番こう言った。

「いつえーい！ さあて、ぬいぐるみを取りまくるとしますかあ！」

「なんだこれ、まるで取り放題みたいな言い方だな、もちろんこのゲームセンターにぬいぐるみ鷲掴みみたいなゲームはない。」

「取りまくるってどうやって？」

「わかってないなワトソン君、そりゃあUFOキャッチャーに決まってるじゃあないですか」

「ワトソン君って言われた、二度目だが、どこの探偵だよ。」

「UFOキャッチャー得意なの？」

「得意だね、得意です、得意過ぎてもうあれだね、百円でぬいぐるみ三個は取れるレベル」

「百円で三個って、どうやればそんなに取れんだよ。」

「それはすごいな、僕は苦手」

「ほう、欲しいのがあったら言ってくれたまえ空君、この天才キャッチャー悠が取ってあげるから」

「天才キャッチャーっておい、野球でもしてらっしゃるのかな。」

「そして台に着く。」

「まずこれだなあ」

ほうこのくらいは僕も知っている。後ろを持ち上げて前に落とすタイプだ。

百円を入れる自称天才キャッチャー。まるで人が変わったようにまじめな顔になる。

「悠さん、ど」

「ちよつと黙ってて！」

怒られた、かなりマジで怒られた。相当本気らしいので僕は黙っていることにする。

クレーンを中央に持つてくる。悠さんは横が見える位置に移動する。

狙いは小さめのカピパラのぬいぐるみらしい。カピパラは蛇に睨まれたかのように動かない、ぬいぐるみなので動いてもらっても困るのだけど。

そしてクレーンを下ろす。

アームが開き並べられたぬいぐるみとぬいぐるみの間に突き刺さる。

アームがはさんだのはそのカピパラの左右二個分のぬいぐるみだった、つまり五個のぬいぐるみだ。

アームが閉まるとぬいぐるみたちは窮屈そうにへこむがアームはそのぬいぐるみたちのせいであまり閉まらない。

そのまま持ち上げると中央のカピパラが上に上がりぬいぐるみたちがアームの輪の中で四角を作る。

表現が難しいのだ、今日の前で起きていることを言い表すには無理がある、一言で言うならば神業だ。神にしか成し得ぬ業だ。

そのままアームは取りだし口へと運びぼてぼてとぬいぐるみを落とす。一仕事終えたアームは元の居場所へと帰って行った。

アームさんお疲れさまでした。

「ふうまあ、こんなもんか、満足満足」

天野原さんは本当に満足そうだ。

「……すごいね、言葉にならないよ」

「えっへん、まあね、五個一気に取ったのは久しぶりかな運が良かったみたい」

この人がいるとUFOキャッチャー内の罪なきぬいぐるみたちが絶滅するな、とか思いつつも、その技量には感服する。

そのあと悠さんは乱獲を続け、UFOキャッチャーの中身は何か物足りない光景になっていた。

手提げ袋をくれた店員さんも心なしか青ざめていた。

「はいこれ同じの取れたから空君にあげるよ、一緒に鞆につけよう。おそろいおそろい」

手渡されたのはあのカピパラだった。

「うん、ありがとう」

普通こういうことは男である僕がすることじゃあないのかなと思いつつも、無下にもできないのもらうことにした。

時計を見ると既に五時を回っていた、三時間近くUFOキャッチャーをやっていたようだ。

悠さん曰く「x軸とy軸とz軸を考えて(中略)するとうまく取れるよ」とかなんとか。要するに僕にはできないらしい。

「最後にさ、プリクラ撮ろうよ、記念写真」

「む、恥ずかしいなあ」

そうは言いつつもまんざらではない僕。

撮り終わり、僕は天才キャッチャー悠さんが狩った(取った)ぬいぐるみたちが入った袋を両手に持つ。もちろん悠さんも両手に持っている。

それだけたくさん狩った(取った)のだ。

悠さんは心なしか疲れている様子だった。

家に帰ったのは六時ちょっと前。家の前で袋を渡し、悠さんと別れる。

「じゃあまた明日ね悠さん」

「うん、後でね」

ん、後でね？

まあ何かの間違えであろうと思いつル。スルーする。

「ただいまー」

すると母が帰っていた。

「あらおかえり、どこ行ってたの？」

どうやらいつも僕が家にいると思っっている母が家にいなかった僕を不思議に思っただらしい。まあ無理もない、いつも僕は責任もって自宅を警備しているからな！

「ちよつとゲーセンに」

「そう」

あんまり興味はないようだ、それはそれで助かります。

しかし妹が黙っちやいなかった。

「お兄ちゃん、そのカピパラどうしたの？」

「まさか自分で取ったってわけじゃないよね」 だって兄ちゃんそ
ういうの苦手だもん」

何にやついてやがる美佳。

こいつは俺の実の妹で名前は東雲美佳という実の妹だ。義理ではない、なんの萌え要素も感じさせない中学三年生だ。何故だか中学では結構モテるらしい、神様ってのは理不尽だね。確かに妹ってことを抜きにすれば可愛いのもかもしれない。

「ん、ちよつと友達が取っていらなからってくれたんだよ」

美佳はまだにやついている。

「へえ、兄ちゃん友達いたんだ、へえ、友達がねえ」

なんてこと言いやがる、僕にも友達くらい……いた気がする。いや、いるし。普通にいます。

「うるさいぞ美佳、お前、冷蔵庫上から二番目左奥に隠してるプリンを食べられたくなければ黙ってる」

「何故それを、プリンを人質に取るとはするいな兄さん。仕方ない、今日は引き下がってやる」

僕に対しての呼び方がころころ変わるのはいつものことだが。何様だこいつ、とは思うものの、まあ追及されるとボロが出そうなので助かる。

「夕飯の時間になったら呼んでよ」
そういつて僕は自分の部屋に戻った。

部屋に戻ってはみたものの、することがない。

ふと足元をみると消しゴムが転がっている、昼に悠さんが投げ入れたものだ。

とりあえず拾った、どうやら新品らしい、ビニールがまだ付いている。

「明日返すか」
消しゴムを机の上に置くと、ビニールに包まれたマンガに目がい

く。
昨日買ってまだ読んでなかったのを思い出したので読むことにした。

数ページ読んだところで美佳が僕を呼びに来た。

「兄さん、ごっはんだよお！」

ノックもなしにドアを開けてきやがった。

「ナニやってんの？」

うふふ、といった表情で手を口の前に置いていたりする。

「何？ 何ってなんだ？ 発音の問題だ。僕は今マンガを読んでいた、何か質問があるか？」

美佳は少し残念な様子で

「べっつに、ご飯できたから下りて来てって母さんが」

「ああ、今いく」

まったく、妹が健全に育っているかが心配な今日この頃だ。どうやら今日はカレーのようだ。席に着くと三人同時に手を合わせ

「いただきます」

父さんは仕事で帰りが遅かったり帰ってこなかったりする。

特に何も起ることなく夕飯を済ます、大体何かが起こるって方がおかしいのだ。

僕の人生に非日常を期待してはいけない。

いや、いけなかったのだが、今日から非日常の連続なので、なれない非日常とどう付き合っていくかが今後の悩みだ。付き合っていくと言ったら悠さんともか、なんて思ってしまう僕はバカだ。

食器を片し部屋に戻ろうとすると家のチャイムが鳴った。

『ピンポン』

母は皿を洗っているので僕に言う。

「あら、誰かしら？ 空ちよつと出てくれない？」

断る理由もないので承る。

「はい」

ドアを開けるとそこには三十歳くらいの女の人と……悠さんがいた。

玄関では悪いので、中に通ず。

「お邪魔します」

二人をリビングへ、途中悠さんにウィンクされ、ドキッとしたのは秘密だ。

どうやら引越しのあいさつに来たようだ。

悠さんのお母さんが始める

「遅くなって申し訳ありません、先週隣に引っ越してきた天野原と申します。よろしくお願いします」

そこで悠さんがごそごそと鞆から紙に包まれた四角い箱を取りだした。

「ボクは娘の悠です、あのこれ、つまらないものですが」

よくあるあれですね。はじめて現実リアルで見た。

「どうも御丁寧に」と母は受け取った。

それからしばらく母と悠さんのお母さんは話しているようだ。楽しく話しているようだ。

それを見た悠さんは僕の隣で

「空君、どうする？ 母さんたち長くなりそうだけど」

それを美佳は聞き逃さなかった。

「あつれつれ〜、どうして悠さんとは仲がよさそうなのかなあ〜、初めて会ったんだよねえ〜？」

僕。ピンチマジピンチ超ピンチ！ いや、べつに隠してるわけじゃないけど。

さらにたたみかけてくる。

「悠さんこんな可愛いのに、兄ちゃんの名前知ってるんだろ〜う、ヘタレでチキンなお兄ちゃんにこんな可愛い子に声かけられるはずないし」

まあな！ どうせヘタレでチキンでアニオタで変態紳士とか気取っちゃってますよ！

「兄さん二個増えてる」

？ 僕は口に出してないぞ？

僕が言い淀んでいると悠さんが言いだした。

「はい注目！」

僕を含む四人の視線が一斉に悠さんに集まる。

そして僕の腕をつかみこう言い放った。

「ボク達、付き合ってます！ 男女交際中です、今度の日曜デートしに行きます！」

悠さんのお母さんを除く三人が吹き出した、これも僕を含む。

「そんな……兄ちゃんに彼女が、しかもこんな可愛い……」

美佳はなぜか青ざめている。世界の終りだ、みたいな表情だ。

母はと言つと。

「へ、へえそうなんだ、うちのバカな子をよろしくね悠ちゃん」

「はい！ おまかせください！」

悠さんのお母さんはにこにこしている、既に知っていたのだろうか。

「家族公認だね空君」

なんて言いながらウィンクする悠さん、ああかわいい。

それからしばらくして悠さん達が帰って行った後のことだ。美佳が部屋に来た。

珍しくドアをロックする、珍しくというか初めてなんじゃないかな？

「ん？ 入っていいぞ？」

読んでいたマンガを机に置いてドアの方を向く。

ドアを開けた美佳が最初に取った行動は僕に枕を投げる、だった。投げられた枕は一直線に僕の顔面へと飛んできて、そして突き刺さった。

「ボフッ！」

僕は椅子ごと倒れた。

「何しやがる美佳……」

「よかつたじゃない兄さん、可愛い彼女ができて！」

ぶいっと部屋を出て行った。

え？ なになにに、やきもちですか？ まさかね。

十時を回ったところで寝ることにする。アニメの録画予約はぬかりない。電気を消してベッドに入った。

これからは毎日が楽しみだ、こんなに幸せだとそのうち何か悪いことが起きるのではないかと心配になる。

そここうするうちに僕は寝たようだ。

次に僕が目を覚ましたのは朝ではなかった。

ガラガラと言う音に目を覚ました、その数秒後ドスタツ！ と言う音がした、その程度のことを気にするはずもないので僕は音から背を向けもう一度寝ようとした、真っ暗で何も見えないしね。

すると僕のベッドに誰かが入ってきた。

おやあ、初めての心霊体験でしょうか？ マジで怖いんですけど！
しかしどうも温かいのだ。

「人間……？」

ここまで来て確認しないほど僕は鈍感ではないので寝がえりをうつようにして後ろを見ると。

ふにつ。

「ひゃうっ」

というかわいい声が僕の耳に届くとともに顔にとても柔らかかな感触がした。悠さんだ。

顔の前に樂園が広がっているようだ。すっごい、いいにおい。甘い香り、ああほんととろけるう。悠さんの慎ましい胸、慎乳が僕を樂園へと誘う。そこで気づく、彼女はパジャマだ。つまり悠さんの胸と僕の顔の間には布一枚しかない。寝るときはやっぱり外すんだね悠さん。

僕のマザーコンピュータ(脳)がものすごいスピードでこの状況を処理しようとしている。ファン(鼻)は回りっぱなしだ、すごい勢いで空気の入れ替えを行っている。

女の人の胸に触れる体験なんて初めてだ、当り前だろ？ ああ、でも牛のおっぱいには触ったことあるよ、えへん。

ではない！ 何故ここに樂園が広がっているんだ！？

「もう、意外と積極的なんだね空君」

ていうか、ナンデココニイル……

「うわあ！ 悠さん！」

「来ちゃったよ」

来ちゃったよ っておい、どうやって入ってきた！？

「んーとね、ちょっと棒使って窓開けて、ジャンプした」

どうやら心を読まれたようだ。ジャンプって、ずいぶんとアクテイブなのね。

「あのお悠さん、ここにいられると僕寝られないんですけど(興奮して)。」

「いいじゃん 朝になったら起こしてあげるから寝ちゃって寝ちゃって、ボクも寝ちゃうからさっ！」

女の子と一緒に寝るとかってねえ、アニメ以外の世界で起きてい

いことなの？

僕近いうちに死ぬんじゃない？死ぬの？とか思っていると。昼間の電車のようなかわいい寝息が聞こえてきた。もう寝ちゃったんですかぁー、早いな悠さん。

チキンでヘタレな僕はどうも意識してしまつて眠れそうにないの
で 床で寝た。床で寝ました！ ああ、床で寝たさ！

何とでも言う方がいい！ そうさ！僕はチキンでヘタレさ！自分のベットで無防備に寝ている女の子に手を出すどころか、そこで一緒に寝られないほどのヘタレっぷりさ！

そうして朝が来る。

僕はほとんど寝られなかった。

一緒になくとも自分の部屋で女の子が寝ているという状況でもう駄目なのだ。起こすと言っていた悠さんを少し早いが起こす。彼女にも準備があるだろう。

「悠さん起きて自分の家戻った方がいんじゃない」

「ない？ と言いかけたところにパンチが飛んできた。

ゴスツ！

「ブゲフワツ！」

朝からナイスなパンチありがとうございまーす。

「ううん、起こしてくれたの？ 空君ありがとう、ボクが起こすはずだったんだけどなあ」

そこで悠さんは気づいたようだ。

「あれ、どうしたの空君？ ボクの寝顔でも見て鼻血出した？ 興奮した？ 発情した？」

まあ、そういうことにおこつ。

「うん、すっごい可愛いから」

もうこんな恥ずかしさには慣れたさ、これがオタの適応力だ。すると悠さんは顔を赤らめて。

「なつ、冗談だったのに……恥ずかしいこと言うなあ空君、照れるじゃないかあ」

照れてるよー、めっちゃかわういういよー!

「じゃあ戻るね」

といい悠さんは窓の方へ。窓を開け棧に足をかけ、そして飛んだ。飛んだ?

隣の部屋をみるとうまく着地していた。

て言うか部屋の窓開けっ放しで来たんだ、セキュリティ面が心配だ。

じゃあまたあとでと別れ、着替えて一階へ。

「あら空輝、早いわねえ。鼻の下赤いけどどうしたの?」

「ああ、おはよう。ちよっと鼻血が」

「エッチな夢でも見たんでしよう?」

母はにやけながら言う。

「母よ、そういうので興奮して鼻血出すのはマンガやアニメの中だけだ」

顔を洗い血を落とし、歯を磨き、寝ぐせは直さない、寝ぐせはその日の髪型だ。あんまりひどいと直すけど。

リビングへ行くと、テーブルの上には食パンと弁当が用意されている。

美佳の通っている中学は近いためまだ寝ているようだ。

今日は食べている時間がありそうだ。そもそも、朝ご飯は大切なもんだ、小学生のころは朝ご飯を食べていて遅刻したこともある。

食べ終わると家のチャイムが鳴った。

母が笑っている

「うふふ、悠ちゃんかしらねえ、早く行きなさい女の子を待たすよ
うなものではないわ」

「ああ」

言っていることは確かなのでうなずく。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

家を出ると悠さんが待っていたそれも、満面の笑みを浮かべて。太陽のような笑顔だ。

この笑顔を守りたいと心から思った。リア充とかそんなの関係ない。

「おはよう空君、今日もいい天気だね」

「おはよう悠さん、天気がいいと気分もいいね」

守りたいのとは別として、僕のリア充ライフ二日目のスタートだ！

第3話 こんな装備じゃだいじよばない

学校の最寄りの駅に着く。悠さんと二人で歩いていると。

「あ、東雲君おはよう！ ん、つとこちらは天野原さん？」

「あ、藤永さん久しぶり」

このツインテールのかわいらしい子は一年のときに同じクラスだった藤永理沙さんだ。

よく遊んだものだったが、二年になってからは廊下ですれ違う時に少し話すくらいになってしまっていた。

「ねえねえ東雲君、この子は昨日転校してきた天野原悠さんだよ？ なんて一緒に歩いてるの？」

「えつと……」

僕がなんと回答したものと悩んでいると。

「うん、家が近くてね、色々と教えてもらっているんだよ、学校のこととかね」

フォローありがとう悠さん、と心の中で感謝する。これで立派な相互フォローの関係になったぞ なんてね。

「へえー、そうなんだ、良かったね東雲君こんな可愛いこと一緒に登校できるなんて」

「ちなみに私も二組なんだけど、覚えて……ないよね、昨日転校してきたんだもん」

「いやいや、覚えてるよ藤永理沙さんだよね」

悠さんは顔を覚えるのが得意なのだろうか？

藤永さんは驚いたようだ。

「すごいねー、天野原さん。こんなモブキャラみたいな私の名前を覚えているなんて！」

自分でモブキャラとか、そんなこと言う人初めてだ、去年はそんなこと言うような人じゃなかったんだけど、この一年に何があったんだろう？ 人は一年で変わるもんだ。

「私のことは理沙でいいから」

「うん、じゃあボクのことも悠って呼んでね、理沙ちゃん」
「どうやらお友達になれたようだ、よかったよかった。」

学校に着くと二人と別れる。

自分のクラスに入ると時間も早いせいいか人があまり多くない。

仲良くしゃべるような友達も少ないので、着席するなり僕は寝ることにした。昨日のあれのせいで結構眠い。

予鈴が鳴って目を覚ます、すると真野が来たようだ。

「よお真野、おはよう」

「ああ空、おはよう。どうした眠たそうだな？」

「いや、まあちょっと昨日はよく眠れなくてね」

「なんだなんだ？ 可愛い女の子でもベットに潜り込んできたとかか？」

「げほっ」

何故知っている、こいつのかんは大したもんだ。

「まあ、そんなことこの世界じゃあり得ないけどな、寝てたら女の子がベットに入ってくるとかどこのアニメだよな」

「ホント、その通りだと思うよ」

僕は同意する。本来ならばこんなことあり得ないのだ、僕は二次元にも迷い込んだのか？

「可愛い子で思い出した、そういえばな」

真野が何か言おうとしたところでチャイムが鳴る。

それと同時に担任が入って来た。

「またあとで話すわ」

真野は後ろの席に着く。

「席に着けー」

「喜べ今日は一時間授業だ、すぐに帰れるぞ」

その知らせにクラスがざわつく、まあ前もって予定表で知っているわけなのだけれど。僕も明日のデートに着ていく服でも買いに行

こうかな？　なんて考えた。

「ああ、お前らもう知っているかもしれないが、隣の二組に転入生が昨日来た、仲よくしてやれよ」

その他の連絡をちゃっちゃと済ませ担任はクラスを出て行った。

ちなみに授業は政治経済だ。授業の準備をしていると、真野が僕の肩に両手を置く。

「おい、空知ってるか？　さっきの続きだが隣のクラスにこの時期珍しい転校生が来たらしい」

手をどけ、後ろを向く。

「うん、さっき先生言ってたね」

「それがな、めっちゃ可愛いらしいんだ！　名前を天野原悠さんという」

「はい、それ僕の彼女です！　なんて声に出していった日には全校生徒を敵に回すことになるだろう」

「へ、へえどんな子なのかな？」

「授業終わったら見に行くぞ」

「え、ちよつと用」

『用が』と言おうとしたところで。

「行くよな？」

何ですか真野さん、その怖いくらいにまぶしい笑顔は。これは断れない。

「しゃーないな、わかった行くよ。でもいいのか？　帰宅部のエースとしての誇りは」

すると真野はこれまた最高のキメ顔で

「美少女のためならそんな下らない誇りは、捨てる！」

わーお、かっこいい顔でめっちゃカッコ悪いこと言ってる！　あの意味がかっこいいけど。ど、どっちだっ！

チャイムが鳴って政経の先生が入ってきた。

授業中後ろの席からは、『どんな子なのかなあ。可愛いのかなあ。彼氏とかいるのかなあ』とか聞こえてきたがこれはスルーだ、めっ

ちや可愛いけど、彼氏はいるから諦めてもらいたいな。
授業が終わり、帰りのホームルームが終わり二組に行くことにな
る。

「さて、行くか！」

「すこいやる気だなあ、真野……。」

「どうやら二組の前の廊下はやたら騒がしいって言うか、通行止め
並みだ、ここを通るなら回り道をした方が早そうだ。急がば回れだ。
しかし真野は僕を逃がしてはくれないだろう。」

「僕ももう腹は括った。てか、家となりだしもっと簡単に会えるん
だけだ。」

「真野と二人で人をかき分ける、結果から言うと二組に潜入できた。
途中のいざごさは省略だ。」

「あ、空君もう帰る？」

「あー、悠さん。それ今はまずかつたなー。」

「思った通りだ。真野の腕が僕の胸倉をつかみそして、足が浮いた
！？ こいつこんな力もちだったっけ？ 結構苦しいんだね、げほ
げほ。」

「おい東雲くん、今天野原さん、お前のこと空君って呼んだよな
あ？ もう帰るのって、まさか一緒に帰るとかじゃアねえよなあ！」

「ご察しの通りだ真野。一緒に帰るし、明日はデートだ。」

「ちよっと、空君を離してよー！」

「ありがとう悠さん、僕は真野の拘束から解放される。」

「失礼、僕としたことが、つい感情的になってしまった。」

「僕の名前は真野慎一、隣のクラスです、よろしくお願いします。」

「ええ、ああ私は天野原悠です、よろしく……。」

「悠さんに対応に困っているようだ。」

「ああ、真野落ち着いて聞いてくれるか。」

「アアン？」

「真野は鬼の形相でこちらを振り返った。」

「いや何でもないです。」

つい敬語になってしまった、怖いんだもん。

今話したら絶対病院送りだ。落ち着いてから話すことにしよう。

「じゃあ、帰るからまた来週」

と言つてクラスの子と別れる悠さん。また来週、とクラスのみんながそう返す。どうやら既に人気者のようだ。

さて、問題は真野だどうやら着いてくるらしい。三人で学校を後にする。

「ねえ、天野原さん？　なんでこんなやつと帰るの？」

おい真野、こんなやつとはなんだ失礼な奴め。

「うん、空君とは家が隣なんだよ」

さつき言おうとしてやめたのに何で言っちゃうの？

ドオン！　という音とともに植えられていた木が一本倒れた。

「しいのおのおめえくうくん」

マジで怖いマジで怖いごめんなさい！　ごめんなさい！

真野はいつから素手で木を倒せるようになったんだろう。今度教えてもらおう

そんなことより生命の危機だ。

「真野君、ボクは暴力はよくないと思うぞ」

人差し指を立ててこれまた可愛らしく言う悠さん。

「空、天野原さんに命を救われたな」

しやれになつてないから怖い。

どうやら真野は諦めたらしく駅に着くと、

「じゃあな空！　さようなら天野原さん僕はここで失礼させていただきます」と言つて帰って行った。

悠さんは手を振るなんてサービスをするもんだから、真野の奴は泣きながら手を振り返っていた。

「真野君面白い子だね」

「ああ、ああ見えてもいい奴だよ」

帰り道、悠さんは途中の駅で降りた。

「え、降りるの？　僕も行くよ」

「いや、ちょっと用事があるんだ、空君先に帰っててよ」

止められてしまった。どうやら着いて来て欲しくないようなので先に帰ることにする。

「うんじゃあまたあとで」

「うん」

そういえば明日のこと何も決めてなかったな後で話そう。

僕も用があつたのだ、明日着ていく服を買いに行かねば。

家に着いて制服から私服に着替える。家に人はいなかった。

「さて、行くか」

自転車にまたがる、目的の店は近所のなんともリーズナブルな値段の服を売っている店だ。

バイトもしていない高校生に繁華街ので売ってるようなやたら高い服は買えないのだ。

ミュージックプレーヤーでアニソンを聴きながら自転車を走らせる、外の音が全く聞こえなくなると危ないので片耳にしか着けていない。

僕のミュージックプレーヤーにはアニソン、キャラソン、声優さんが歌っている曲、その他アニメ関係の曲しか入っていない。だから最近流行りの曲とかは全く分からないのだ。

そこでふと気付いた、『オタク』と『リア充』とは対極に位置し、相容れぬ存在だと思っていた、つまり正直ハイブリッドなんて不可能かと思っていた。だがどうだ？

今の僕の状況を見つみる、日曜のデートに着ていくための服を買いに行く？ フツ、どこのリア充だ。

でも思う事がある、悠さんという彼女が出来たのは夢オチでも何でもないだろう、これは確実だ、そう 信じたい。しかし、手も握れない、腕も組めない、キスなんてもつてのほかだ、こんなのでリア充になったと言えるのだろうか、いや言えないだろう。僕は根っからのオタなのかもしれない、オタ歴四年、この四年間でオタ魂が

染み付いてしまっているように思える。これから悠さんと付き合っ
ていくにあたって、リア充に、真のリア充になれるのだろうか、こ
れが実現できなければハイブリッドになれたとは言えない。さあ、
もう一度、もう一度目標を明確にしたい。僕は何になりたいんだ？
リア充か、オタか？ それともハイブリッドなのか？ 彼女がい
ればそれで満足なのか？ くそ、わからない、今のこの状況に満足
はしているんだ、楽しいし。仕方ない、当分これは保留という事に
しておこう。もしまた考えさせられるような時が来るまで、記憶の
片隅にしまっておこうじゃないか。

そんなことを考えている間に洋服店に着いた。

こちら边には一件しかない全国チェーンの洋服店、ユニゾンクロ
ニクルを略したような名前、明記はしない、だって、アルファベッ
ト読めないんだもん！

全国チェーンということもあり、こんなぎりぎり都内に入れても
らっているような田舎でも大した規模だ。

駐輪場に自転車を停める。

土曜だが、午前中ということもあり案外空いているようだ、まあ
狭い田舎だが地元の知り合いに会うことはないだろう。恥ずかしい
もんね、一人で服買いに来たとか。

そう、知り合いに会うなんてことはあるはずがなかった……のだ
が。

店に入る。

すると「いらっしやいませー」と店員が声をかけてくれた。そう
言われるとつい頭を下げてしまうのだ、リア充はどう対応するの
かな？ スルーするのかな？ それはそれで失礼な気がする、もうい
いや気にしない、僕は僕のまま生きていきますよ。

さて、店に入ったはいいいがどんな服が流行っているかなんてもち
ろん知るはずがない。

広い店内をぐるぐる回る。そりゃもうぐるぐると。

前方に女性用下着が売っていた、紳士である僕は何とも思わない、思わない。

何も思わず通りぬけようとした瞬間……チラ見した、してしまっただ、して、「しまった！」と思った。これは仕方ない、だって男の子だもん、女の子の下着に興味がない男なんていないはずだ！いたら見てみたい。

自分でも見事なチラ見だと思う、伊達に今までチラ見してきたわけではない。

どんなチラ見かと言うと。

顔は正面を向いたまま、全く動かさず眼球だけでターゲットを捕捉する。

ピントが合ったところで瞬きをするのだ、これはカメラで言うシヤッターの役割を果たす、こうすることにより脳内の『開くな危険』フォルダに保存できる。ちなみにこのフォルダ、中学生の時から保存してきた膨大な数の映像が保存されている。これは僕だけのもののため誰にも見せないし、見せられない。趣味がばれてしまう。

いやいやいや、別に女性が胸部に装着する男のロマンを脳内に保存するためにここに来たのではないだる僕。

そうだ、僕は明日着て行く服を買いに来たのだった、余計な事にうつつを抜かしている暇はない！ 隙もない、ぬかりない！ いや最後のはチラ見の話。

男物の服のコーナーへと戻る、さてどうしたものかと見ていると声をかけられた。

べ、別に店内をうろついてて変質者と間違われたとか、そういう理由じゃないんだからね！ 断じて違う。

「お客様、何かお探しでしょうか？」

ん？ どこかで聞いたことのある声だ。ふと振り返るとそこに立っていたのは中学で同じ部活に入っていた五條さんだった。

ちなみに入っていた部活はテニス部だ、男女ともに三年生最後の

大会のときに団体戦で上位まで進み、なかなかいい成績を残したりした。最近顔出してないなあ、今度みんな誘って行こうかな？

「あ、五條さん久しぶりだね。てかなんでこんなところにいるの？」
五條さんとはびきりの営業スマイルを浮かべたまま首をかしげる。
「なんで？　なんでってなにさ？　私がここで働いていたらおかしいの？　私に通っている高校は期末テストが終わって終業式まで休みだから暇なの！　だからこの時間を使ってお小遣い稼ぎ……もとい家計を支えているわけさ！」

なるほど、お小遣い稼ぎをしているらしい。うちの高校ももうすぐ休みに入るんだったかな？　ちなみにこの子、女の子でも僕より背が高い。だから僕が見上げる形になってしまうので少し恥ずかしい。ふ、でもまだ高校2年生まだまだ発育途中さ！　ああ、身長の話、僕は男なので胸は膨らまない。期待させてしまって申し訳ない心から謝ろう。

「へえ、そうなんだ」

「あんまり興味なさそうだねまあいいけど」

「ところでところでお客様？　何かお探してでしょうか？　お客様が一人でいらしたのは初めてですよね？」

何故か接客口調に戻る五條さん、遠まわしにバカにしているのだろう。

いくらバカにされ腹が立ったとしても彼女ができたことをばらすわけにはいかない、ばらしたらおそらく同じ中学校だった友人全員に伝わる。

この人の連絡網は大したものなのだ。

中学の時の定期テスト、どうやったかは知らないがテストの問題の半数を前日までに入手していたこともあった。それ普通に不正じやね？　って思ったね、あんときは。

僕は慎重に言葉を選ぶ。

「いや、ちよつと明日出かける用があつて最近の服持ってないから買いに来ただけど」

店員さん（五條さん）はうなずいて一言。

「そうか、東雲君にも彼女ができたか」

「なんででしょうねー、そんなこと一言も言っていないのにねー、あれーおかしいなー？」

「なんでそうなる五條さん、僕はそんなことは一言も言っていない。またもどびきりの営業スマイルを浮かべる五條さん。笑顔がまぶしいなー。」

「オタクの東雲君が日曜日はどこかに行くからと言って新しい服を買いに来るわけじゃないじゃないか、服買っお金があったら、マンガとかキャラクターグッズを買っだろっ君は」

僕は何も言い返せない、おっしやる通りだ。

「ん……」

「で、あるからしてだな！ 彼女ができたのだろうっ？」

ズビシッ！ っと人差し指を僕へ向ける。

僕もここで白状するわけにはいかないので反論する。

「五條さん、その結論を出すには早すぎるんじゃないか？ もし、

……」

五條さんに遮られた。

「だって君は否定していないじゃないか、東雲君は嘘をつかないからな」

今度は営業スマイルじゃないスマイルだ、効果音をつけるなら

ニコッ

「そう、僕は嘘をつけない、嘘をつくとき笑ってしまう。どうせばれるのだから嘘はつかないのだ、弱点を突かれた。それにこんなかわいらしい笑顔を向けられては……」

僕の負けだ、認めよう。

「ああ、そうだ、東雲空輝人生初めて彼女ができました！」

あれ？ 五條さん、なんでそんなびっくりしたような顔をなさっているのでしょうか？

「え、マジで？ そんな、冗談だったのに」

えー、まつさかーひどいよー五條さん。

「冗談だったのかよおい！」

「まさか東雲君に彼女ができるとは、まさかあの東雲君にねえ」

ほん！ と手を叩く五條さん。

「コーデイネートは私に任せなさい！」

女の子に服を選んでもらえらるとは心強い、お願いするでしょう。

「ああ、うんよろしく頼むよ」

「で、どこ行くの？ その彼女さんと。行く場所によって変わるから」

ほう、そういうものなのか。

「遊園地」

「なるほど、お決まりだね。じゃあ動きやすい方がいいかな？ 予算は？」

おつと忘れていた。お金が、大切だよね、お金は。

「ええと、特に気にしない感じで、できるだけ安くお願いします」

五條さんは苦笑すると早速選び始めた。

更衣室に入れられ五條さんが服を僕に渡す。

「これ着てみて」

「これは、ないんじゃないかなー？」

僕でもわかる、これはちよつと……ださい。

四回くらい試着を繰り返した結果、下はジーパン上は茶色い長そでのジャケットで落ち着いた。五條さんは満足したようだ。

「うん、これなら恥ずかしくない。言っちゃ悪いけど東雲君の着てきた服、あんまりカッコよくないよ」

「そんなことは知ってるわかってる！」

どうせ、タンズ開けて出しやすかった服を着てきただけだ。かっこいいなんて思っちゃいない。

支払いを済ませ帰る。帰り際に五條さんが見送りに来てくれた。

「お客様、ありがとうございました、またのおこしを心よりお待ちしております」

「ははは、今日はありがとう五條さんホント助かったよ。今度ジュースでもおごるよ」

服を選んでもらったのだ、このくらいの礼はしてもいいだろう。

「よっしゃー………！」

なんだこの反応意外過ぎる、てか五條さん面白い子。思わず笑ってしまふ。

「じゃあまた五條さん」

「うん東雲君約束だよ！ またね」

第4話 リミットブレイクスパゲッティ

家に帰ったのは午後一時頃、意外と時間は経っていなかったようだ。

部屋に戻ったところでケータイが鳴った。

『もしもし空君？ 今家にいる？ ちよつと部屋の窓開けてくれな
い？』

「うん、なんで？ 別にかまわないけどさ」

電話は切れてしまったようだ。

窓を開けると、隣の家の窓から悠さんが顔を出していた。

「お帰り空君、待ってたよー どこ行ってたの？」

「いや、ちよつとね出かけてた」

明日着る服を買いに行っていたとは言えない。言えないよ。

「ふ〜ん、あ！ ところでさ空君お昼食べた？ うちに食べにこない？ ついでに明日の話もしたいんだけどなあ」

なるほど、そういうことか。

「え、でもなん迷惑じゃ……」

特に悠さんのお母さんに。さすがに僕は彼女のお母さんの前でデートの予定を話し合えるような勇者ではない。ヘタレな僕には無理です。

「うーんとね、今お母さん家にいないから二人で食べることになるけどどうかな？ それに迷惑なんかじゃないよ」

これまたウイנקが飛んできた。ちよつど家には人がいなくて昼食に困っていたところだ。二人と言うことなら断る理由もないので、いやとでもありがたいので悠さんの家に行くことにする。

「えーと、そうだなじゃあお言葉に甘えることにするよ」

「わーい、空君とお昼ごっはん〜、じゃあ飛んで」

手を挙げぐるぐる回りながら喜んでいたところまではいいい、いいといっても可愛いといいだ。最後の一言がよく聞き取れなかった。

飛んで？ いや気のせいだろう。

「悠さん、最後の言葉が聞き取れなかったんだけどもう一回言ってくれる？」

きょとんとした表情で言ってくれた。

「え、飛んでって言ったんだけど。ああ、その場でジャンプじゃないよ、窓から窓にさ。ほらほらほら、こっちおいでよ」

悠さんが場所を空けにこにこしながら手招きする。

どうやら聞き間違えではなかったようだ。互いの窓の距離は約二メートル、確かに近い。もちろん飛べないこともない、昨日悠さん飛んで入ってきたもんね。思い出して僕は赤面した。だが、彼女の家に窓から侵入とはいささか問題があるのではないか？ いささか、というか重大だ。ビッグプロブレムだ！

「飛べるかー！」

結果、叫ぶことになった。僕の声が窓を飛び越え悠さんに届いた。

「んん、そう？ じゃあ玄関で待ってるから下りて来てよ」

うなずき窓を閉めカーテンを閉める。さっき五條さんに『その服はダサイ』と言われたので、一応着替えた。さっきのよりはおそろくましになったはずだ。

昼食をいただくにあたり手ぶらでは申し訳ないので冷蔵庫に買い溜めしてあった炭酸飲料を持っていくことにする。

家を出ると悠さん（私服ver）が待っていた、腕を後ろで組んでいる。朝は制服だったが今は……、このズボンはなんて言う名前なんでしょう？ 服に関してはからきしだ。

たしかロングジーンズってやつだ、さっき五條さんがそんなことを言ってた気がする。

上は白いワイシャツに少し下げたネクタイ、ボーイッシュな感じでよく似合ってる。ワイシャツの白がきれいなさらさらとした黒い髪を目立たせている。まあどんな服を着ても着こなせるんだらうな悠さんは。

「おじゃましまーす」

「いらつしゃい空君」

先に家に入っていた悠さんが動物のぬいぐるみのようなスリッパを出してくれている。

「犬と猫どっちがいい？」

「猫でお願いします」

僕は猫派だ。猫が好きだよ！ アニメとかの影響でね、猫耳が好きってわけではないのだけれど、とりあえず僕は猫派なの。

「へー、空君も猫派なんだ、ボクもだよ」
リビングへと通される。

僕の家とは違いよく整理されている。引っ越してつきたばかりということだけが理由ではないだろう、きっと悠さんのお母さんはきれいな好きなのだ。

あれ？ そういえば僕女の子の家人の初めてじゃない？ 初めてが悠さん（の家）かー嬉しいな、卑猥な表現なんてしてないぞ！ 絶対してない、そう聞こえたなら勘違いだろう。

「空君、何考えてるの？ 顔がにやけてるよ？」
しまった！ 顔に出してしまったか！

「え、いやさ、あの、僕女の子の家に入るの初めてだからさ、嬉しかったり緊張しちゃったりでね？ そ、そうだ！ これ、飲み物持ってきた！ 飲んでよ」

「ぶーん、まあいいけどさ。空君女の子の家初めてなんだ、じゃあボクの家が初めてなんだね あああありがと このジュース好きなの」

心なしか悠さんも照れてるような気がしたが、多分気のせいだろう。

「今から作るからそこに座ってて」

悠さんは長方形のテーブルを指差した、イスは四つ用意されているが悠さんは何人家族なんだろうな？

あれ？ 今なんて言った？

「今から作るだって!？」

「うん？　そっだよ、空君何か苦手なものとか食べられないものとかある？」

「マヨネーズ以外はほとんど大丈夫だよ」

わー、女の子の手作り料理だってー！　楽しみだなー、今日は初めてばっかりだ！

「男の子なのに珍しいね、マヨネーズって男の子好きなイメージがあるけど」

「いや、あのおいしいのも混ぜたら逆に不味くなっちゃったみたいな感じがね」

例えるならドリンクバーだ。単品同士ではおいしいが、混ぜると恐ろしい飲み物が出来る。でもたまにおいしいのもできるよね、それがマヨネーズとは違うところだ。

カウンター越しに悠さんを見ると、どうやら冷蔵庫に入ってるものを確認しているようだ。

「じゃあ今日はスパゲッティにしよう　いいかな空君？」

「もちろんいいよ！　僕麺類好きだからむしろ嬉しいよ！」

まあ悠さんが作ってくれてくれるって方が何倍もうれしいけどね！　悠さんが作ったマヨネーズなら食べられる気がするよ！　何でも食べられるね！

「おっけー、では！」　といって小麦粉を出す悠さん。

ミートソース作るのに使うのかな？　なんて思っていると、ボウルに大量に入れ始めた！

「え！　悠さん、まさかとは思うけど麺から作るつもり！？」

「そっだよ？」

きょんとする悠さん、かわいい。

「麺って買ってきたのを茹でるものじゃないの！？」

悠さんは驚いたような表情になる。

「スパゲッティって売ってるの！？」

嘘ですよねー、悠さん？

「売ってます、普通に売ってるよ！」

「ボクはじめて知ったよお、なんでお母さん教えてくれなかったのかな？」

悠さんの説明によると、どうやら麺類はいつも悠さんが作る事になっていくらしく、常に手作りだそうだ。だからキッチンにはパスタメーカーなんてものも完備されている。

「すぐできるから待ってよ」

僕は手作りのパスタってのも食べてみたいのでうなずいた、悠さんが作るものに食べれないものはないだろう！

悠さんの手際はいいもので、十分もしないうちに麺をゆで始めた。やはり慣れているのだろう。

さらに十分後。

「できた」

悠さんができたミートソーススパゲッティを僕の前に置く。いいにおいだ。見た目も完璧。

「はい、どうぞ。上手に作れたとは思っけど、空君の口に合うといいな」

では、いただくでしょう。両手を合わせる。

「いただきます」

「どうぞ、召し上げれ」

フォークで麺を巻き口に運ぶ。

なんだこれは？ スパゲ

ッティーなのか？ そんな感想だ。

僕が今まで食べてきたのがスパゲッティだったのならこれはスパゲッティではない。本来であればこの表現は不味かった時に使っただろう。

美味しいのだ、スパゲッティと言う名の料理では再現できない美味しさだ。

十点満点が一番おいしいスパゲッティがあるとして十一点のスパゲッティができてしまった。じゃあこれはもうスパゲッティじゃないじゃないか。新たな料理だ。

僕の表現力を以てするとこれほどの表現でしか表せないのが惜し

い。

「空君、説明長すぎ」

「え？」

「で、どう？ おいしい？」

「もうスパゲッティーじゃないくらいおいしいよ、こんなにおいしい料理を食べたのは初めてだ」

「ホント！？ 良かった」

にこりとほほ笑む悠さん。これまた可愛い！

ふと気が付くと皿の中には何も残っていなかった。あまりのおいしさに記憶が飛んでしまっているようだ。もう少し味わって食べたかったなあ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

お粗末さまだなんて謙遜でも、これは謙遜する必要がないほどに美味しかったのだが。

「じゃあボクの部屋で話そうか」

え！ 悠さんの部屋に入れるの！？ 確かに僕の部屋と距離が近いのでカーテンが開いているときには見えてしまうことはあるのだが。まさか、入る日が来ようとは……。

「部屋に入ってイインデスカ！？」

首をかしげる悠さん。

「だって……空君ボクの彼氏だもんだメなわけないじゃないか」
僕の反対側に座っている悠さんは目をそらし、顔を少し赤らめながら言った。

『だって、空君ボクの彼氏だもん』僕の頭はその部分だけを録音した。よし、再生できる！

ちゃんと保存できているようだ。僕の頭の着ボイスにでも設定しておこう！

さりげなく食器を下げてくれる悠さん、しっかりしてるなあ。

「さあ、いこっか」

「うん！」

初めての女の子の部屋（美佳の部屋はカウントしない）つい緊張してしまう！

悠さんに連れられ、二階へ。

悠さんの部屋に入る、何だろう、僕の部屋とは違う女の子の雰囲気、入っただけでドキドキしてしまう。部屋の中にはUFOキャッチャーで取っただけであろうぬいぐるみたちが所せまし並べられていた。ぬいぐるみがこれだけあっても汚い部屋とは全く感じさせないところがすごい！と感心していると。

ふと気付く、押入れのわずかな隙間から光が漏れている。

「悠さん、押入れに何が入ってるの？」と手をかけようとしたその時。

スパツと閉められた。

「ダメだよ空君？ 女の子の押入れには夢と希望とぬいぐるみと下着くらいしか詰まってないの。見たりしたらダメダメ」

顔は笑っていたし、言葉も柔らかい。しかしなんだろう、どことなく責められてる気がした。まあ当たり前か、僕も見てほしくないものは部屋に置いてある（あくまで健全な、女の子が載った本とか健全な）。

僕は反省する。

「ごめん悠さん、ホントごめん……」

「いやいや、そんな！ 謝らないでよ、大したことじゃないの、責めるつもりはなかったの？ いや全く責めてないし！」

悠さんは笑って許してくれる、ありがたいなあ、テンションが下がっていては明日のデートにも影響が出てしまいそうだ。切り替えなくては！

「さて、じゃあ本題にはいろつか」

そう言って部屋の中央に設置された小さめのテーブルを囲むように座る。

「おーけー！ どこまでもはいつてやるぜー！」

テンションを上げすぎた。

「お、おう！　じゃあ、どこの遊園地に行くかなんだけどさ！　このことかどうかなあ！」

ノリがいいな悠さん、ホントいい人だ。

そう言っつてパンフレットを差し出す悠さん。そこはここから電車で二十分くらいのところにある比較的大きなテーマパークだった。

「おお！　いいんじゃない！？　僕もここがいいと思ってたんだよ！」

「おおう！　そうかい！　やっぱり気が合うな空君、さすがボクの彼氏さんだ！」

その一言で、照れた！　僕は照れた！　それにより僕のテンションは比較的落ち着く。

悠さんも照れたようだ、言っつてから気づいたようだ。勢いに任せつつい言っつちゃったって感じかな？

おかげで二人とも落ち着いた。

「ちよつとジューズ持つてくるね、さっき空君持つてきてくれたやつ」

「ああ、うん、手伝おうか？」

「いや、いいよそのくらい一人でできるし　それより押入れの中見ないでね　見たら空君の机の最下層に隠されているエッチな本バラしちゃうからね」

！？　知られているだと？　まさかそんな！？　ありえない、僕の机の嚴重なセキュリティを突破したのか！？

「悠さん、何故それを……？」

「ん？　冗談だったんだけどホントにそうなの？　空君エッチだな」

「冗談だったのかよ！　自白、というか自爆しちまったじゃないか！」

悠さんはにこにここと笑い、部屋を出て行く。出て行くときにウイंकを忘れない悠さん。そのウイंकに僕はもう……。

部屋に一人になった僕、女の子の部屋に一人だ。もしここが友人（男）の部屋だったらもちろん工口本探しが始まるわけだが、ここは女の子の部屋だ。まさかそんな本もあるわけないので探さない、ないものは探せないだろ？

さあ、気まずい。さっき押入れは開けるなど言われたので開けない、絶対に開けないぞ、僕は反省したのだ。さっきの申し訳なさが込み上げてきたのでドアに向かい土下座をして待つことにする。すぐに悠さんは帰ってきた。

「そ、空君何してるの？ 土下座ってやつですか？」

「いや、気分が土下座だったもんでね、ついやってしまいました！」

「あはは、空君面白いなあ」

またテーブルに向かい合って座る。

思っていたよりも喉が渴いていたらしく、ジュースは一気に飲み干してしまった。

そこでふと気付く、これ、悠さんがいつも使ってるコップなんだよな、いくら洗ってあるとはいえ、間接、かん、せつ、キス？

「いや、違うからねそれ、空君それ違うから」

「え、なに？ 悠さん、洗ってあるであろう悠さんちのコップを使つて『あれ？ これ間接キスなんじゃない？』とか僕が思つてたとでも言うつもり？」

「ふ〜ん、そんなこと思ってたんだ。ただボクは空君が『このジュース、惚れ薬でも入ってるんじゃないだろうな？』とか思ってるような顔だったから言ってみただけなんだけど」

ジト目な悠さん、僕の脳内『悠さん』フォルダにまた一枚CGが追加される。フルコンプリートまでの道のりは遠い。

「惚れ薬が入ってるだなんてことは断じて思つてない！ そんな薬がなくても僕はもう悠さんにメロメロさ！」

あれだけおいしい料理を作る人は食べ物にいたずらはしない。食べ物に失礼だからな。

あれ？ 僕今すごいこと言わなかったか？

「な！ 空君、嬉しいこと言ってくれるじゃないですか」
そうは言いつつも照れてる悠さん。僕だつて照れてるよもちろん。
おもむろにテレビをつける悠さん。ちょうど天気予報がやってい
た。

天気予報士のお姉さんが言うには明日僕たちの行く遊園地周辺の
天気は四十パーセントの確率で雨らしい。

四十パーセントは無視できる確率ではない、初デートに雨が降る
つてのはいやだなあ。

「雨降るかな？ 降ったらやだね」

僕がそう言うと悠さんは

「大丈夫、大丈夫 雨なんて絶対降らせないよ！ 実はボク晴れ
女なんだ、だから僕が出かける日は雲ひとつない青空が広がって
いるのさ、絶対にね」

どこからその自信が湧いてくるかは知らないが晴れ女ということ
らしい。自称雨女つて言うよりは自称晴れ女の方が心強い。

「言われてみれば悠さんが引越してきてから雨降ってないね」

「ふっふっふ、それもボクの晴れ女パワーなのさ」

まあとりあえず晴れ女パワーはすごいらしい。

その後、集合時間などを話し合い一段落したところで家に帰るこ
とにする。

「じゃあまた明日悠さん、今日はお昼ご飯ありがとっ、また明日」
「うん、じゃあまた明日ね」

明日は楽しい一日になりそうだ！ 期待で胸を膨らまし家に帰る。
家に帰ると言っても、家が隣なので一分とかからない。家に帰る
とリビングのソファアに寝っ転がり美佳が本を読んでいた。

『本を読む』という行為には何の問題もない。問題があるのは読
んでいる本と、その読み方だ。

おそらく帰って来てからあまり時間が経っていないのだろう。美
佳は中学の制服を着ている。女子中学生の制服、つまり下はスカ―

トだ。あんまり無防備なのでその下に穿いているパンツという名の純白の布が丸見えなのだ。

兄として、一人の男として、これは注意せざるを得ないので注意しようと思つた。気づいてしまった。そう、読んでいる本だ。

「おい美佳、何故、なんで僕の机の最下層に安置してあつた超健全な本を読んでいる？」

美佳が読んでいた本はさつき悠さんにばれてしまったあのエロ本（悠さん曰く）だ。

「あ、おかえり兄ちゃん」

「ただいま、じゃない、そんなことはどうでもいい、質問に答える」

「ああこれ？ 兄さん帰つてるっぽいから部屋にコンパス借りに行つただけど、いなくてね、仕方ないから自分で探そうと思つて引き出し探していつたら見つけちゃつてね」

「まあ、超健全らしいから別に問題よね〜兄ちゃん」

くっ、これを墓穴と言ふんじゃないだろうか？ 墓穴でもいい、穴があつたら入りたい！

「勝手に僕の部屋に入るなアーアー！」

「それと美佳、パンツ見えてるぞ、もう少し恥じらいというものをだな」

「見たいの？」

何だこいつ？ ナニ言つてやがる、僕が妹のパンツなんて見たいわけないだろ？

「ふざけるな、見たいわけないだろ、お前のパンツなんて朝ご飯のパンと同じだ」

ああ、僕失言。僕はパンとパンツをかけて何とも思わないことを表そうとただけなんだ。分かってくれるよな。

「きゃー！ 私のパンツは朝ご飯なんですか！ 食べちゃうんですか！？ いやだよそんなの、実の兄が妹である私のパンツを食べたいだなんて！ もぐもぐだなんて！ 最低！ 変態！」

ほらねー、思った通りだ、言ってから気づいた。どうしよう……。

「違う、僕は最低でも変態でもない、最高だ」

「わけがわからないよ兄上」

「とりあえずだ美佳、もう少し人目を気にしてくれ」

「まあ、兄さんよりはしてるよ、私だって女の子だもん、人目は気になる。こんな格好してるのは家だけだよ、知らないの兄さん、私結構萌えるの」

「お前には萌えない!」

「間違えた、モテるのって言おうとしたの、中学じゃあ一週間にいっぺんは下駄箱に手紙入ってるもん」

「どうせ果たし状とかだろ? そんなこと自慢すんな」

「そうそう果たし状」

「ってそんなわけあるか!」

何故か僕が突っ込んだ。

「なんだわかってんじゃん兄ちゃん、ラブレターだよ、ラブレターじゃないよ、ラブレター」

「兄ちゃん貰ったことある? あ、ごめん!」

どうせわざとだろ? 口なんか押えちゃってさ。ああわざとらしい、嫌味なやつめ。

「そうだ。ない、ラブレターなんて靴箱に入ってたことなんて、小学校から高校まで一度もない。幼稚園までさかのぼってもない!」

「だよね〜、兄さんがもらえるわけないもんね〜。告白されたこともないんじゃないの?」

ああ、もちろん告白されたことなんて、告白されたことなんて?

あつたなそう言えば。

「聞いて驚け美佳よ、聞いて喚けよ。僕は告白されたことがある!」
「いや、強がりとかいいから兄さん、悪かったよ。嘘が苦手な兄さんに嘘つかせるような真似をして。謝るからさ、そんな嘘言わなくていいよ」

完璧嘘だと思われているようだ、なら喚かせてやろう!

「なんとだな美佳、僕が悠さんに告白したんじゃないんだ、悠さんが僕に告白したんだ！」

寝っ転がっていた美佳が飛び起きた。

「ええ！ マジで！？ 兄ちゃんが告つたんじゃないの！？」

「ああ、僕もびつくりだったよ」

待てよ？ 彼女になるって言われてそのあと僕も告白した記憶が

……。ま、いつか。

「あんなに可愛い悠さんだったらもつとましな男を選べただろうに、なんで兄さんなんかを……」

さらに美佳は続ける。

「確かにおかしいとは思ってたんだよ、チキンでヘタレな兄さんがあんなにかわいい子に告白できるのかつてね」

「ああ、そうだ。チキンでヘタレな僕はあんな可愛い子に話しかけられもしないだろう、ましてや告白なんてもつての外だ」

「そうだよね。でも、悠さんが兄ちゃんに告白とか、世界の七不思議に選ばれても私は驚かない、いやむしろ選ばない方が驚くね！」

「まあ確かに七不思議に選ばれても不思議ではないが規模が小さいかなあ」

「私にとつては一生使っても解けないミステリーだよ！」

「そうだね！ 兄としては他のことに一生を使ってもつと有意義に生きてほしいな！」

「でさ、兄さん」

「なんだ妹さん？」

「明日デートに行くって悠さんが昨日言ってたけど、ホントに行くの？」

僕は自慢げに言った。もう隠す必要もないだろう。

「ああ、行くとも！ さっきなんて悠さんの家で悠さん手作りのスパゲッティをごちそうになったんだ！ そのあと部屋でその話をしていた」

「へ、へえすごいね兄ちゃん。おめでとう」

「ああ、ありがとう、じゃあ僕は部屋に戻って明日の準備をするから」

「あ、兄さん！」

「なんだ美佳？」

「兄さん明日何着て行くの？ 自覚ないようだから言うけど、兄さんの服のセンスは壊滅的だよ？」

妹にまで言われてしまった。さつき五條さんに言われたばかりなのに。またしても言われてしまった。

「うっさい！ そんなの分かってる！ さつき服買ってきたよ！」

「ああ、あのベッドの上にはっぽってあったビニール袋？」

「そうだよ！ 洋服屋行ったら、中学んときの女友達いたからその子に選んでもらった」

「だから問題ないだろ？ 問題あったらその子のせいだ！」

「見てあげよっか？」

なんだこいつ、ファッションリーダーでも気取ってるのか？ だが女の子の意見と言うのは大切だ。インポータントだ。なので悔しいが見てもらうことにする。

「ああ、頼むよ」

部屋に着くと美佳が言った。

「じゃあ着替えてよ」

はっはー、別にいいんですよ、妹の前でパンツ一丁になるのは。でもさ、そういうのって妹が気にするものなんじゃないんでしょうかね？ 気にならないならいいさ、脱いでやる。

僕が上着を脱ぎ服で視界が見えなくなったところだ。腹に衝撃が走った！

「げほう！」

「ちよつと兄さん！ 何レディの前で脱ぎ始めてんの！？」

そんな理不尽な……。

「だってお前が着替えてよっていったんじゃねえか！」

「ちーがーうー！ 私は兄ちゃんの裸見たところで何も思わないで

しょうが！ ばっかじゃないの？ カーテンくらい閉めなさいよ！
悠さんこつち見てるじゃない！」

僕が振り返り窓の方を見ると、悠さんが顔を手で覆っていた。

「兄さんの方が人目を気にした方がいいんじゃないの？」

「ごもつともです、美佳さん、おっしゃる通りです。」

「わ、悪い、今度から気をつけ……ます」

もう一度外を見ると悠さんはカーテンを閉めてしまっていた。申し訳ないことしたなあ、明日謝ろう。

今度はこちらもカーテンを閉め、気を取り直して着替える。着替え終わり美佳の感想を待つ。

「まあ、悪くないんじゃない？ いいセンスしてるわ、その女友達
どうやら文句はないらしい、心なしか残念そうな反応だ。僕とし
ては嬉しい限りなんですけどね！」

「そうか、なら明日はこれで行くよ、ありがとな美佳」

「礼なんていいよ、きもちわるい。あと兄さん、パンツ！ 色は紺
がお勧めよ」

「！？ なんで自分の妹にパンツの色を勧められなきゃいけないん
だよ！」

「あはは、じゃっ頑張つてねおにくちゃん」

美佳は笑いながら部屋を出て行った。

くそっ！ あり得ない、この僕があんなのを一瞬だけ可愛いと思っ
てしまった！ とくに最後のところの『おにくちゃん』だ、何と言
う破壊力、妹属性が皆無な僕にまで……。

とりあえず着ていた服のタグを今のうちに外しておこう、着いた
まま着て行ったら悠さんにデートのために服を買ったとばれてしま
う。

そう、明日はデート、東雲空輝十七歳。オタクな僕ですが、生ま
れて初めてデートに行きます！

第5話 決戦（デート）の朝

目を覚ます。時計を見ると悠さんとの待ち合わせの時間である八時より二時間早い。アラームが鳴るより早く起きてしまった

昨晩は悠さんがベッドに忍び込んでくるなんていうサービスはなかったが、デートの前日と言うことで『小学生が遠足の前日になかなか眠れない。の法則』（僕が作った）によりなかなか眠れなかったが、朝は早く起きられた。これもその法則に組み込むべきか検討中だ。窓を開き空気の入替えを行う、悠さんの部屋のカーテンは閉まっていた。

「さて、と。シャワーでも浴びるか」

女の子と出かけるのだ、男として身なりを整えないというわけにはいかない。

パジャマを脱ぎ洗濯かごへ放り込む。

朝の風呂場とは寒いもので床なんてまるで氷のようだ、自宅に居ながら北極にいる体験ができる。うちの風呂、なんてすばらしいんだ、これでオーロラでも見られれば……。

「なわけあるかー！」

僕も初めての体験だ、風呂場に入った。理不尽な突っ込みをしてごめんなさいお風呂場さん。謝罪の意をこめて冷え切った床をお湯で温めて差し上げる。

「ああ、そうだ。これがリア充たちがよくするという朝シャンつてやつか」

これで僕もリア充に一歩近づいたかな？ なんて独り言を言っていると。風呂の扉が叩かれる。

『ドンドンダン！ ドンドンダン！』

こんな時間に誰だドラムをたたいているのは？ 僕は今朝シャン中で目を開けられない。

「入ってますよー、空輝が入ってますよー、空気じゃなくて空輝

だよー」

まあ、親がつけた名前だ。こんな名前でも結構気に入っている。扉が開き誰かが入ってきた。

「父さんか？　いくら久しぶりに帰ってきたからって、息子と一緒に風呂つてのはどうよ？　息子の僕としてはいやだね、断じてお断りだ。父さんよ、入ってくるなら女の子になつてからにしてくれ」

もちろん僕の父さんが女の子になれるというスキルがあるわけではないので冗談だ。僕はこんな冗談を言える父さんが嫌いではない。僕が父さんだと思つた人物は髪を流している僕の目を手で押さえこつ言つた

「だーれだー」

状況を整理しよう。時刻はだいたい六時十分、僕はデートを控えて体をきれいにするために朝シャンなるものをしている。もちろん素っ裸。風呂に服着て入るやつはいないだろう？　いたらそいつは天才か変態か宇宙人だ。僕は二番目のに片足を突っ込んではいるが服は着ないで風呂に入る。

次に僕の後ろで目を覆っている人物を状況から考えよう。この間に起きている家族は母ぐらい、妹はおそらくまだ寝ている。母が風呂に入ってくるとかそんなことはあり得ない。よつて母と美佳はない。次に父さんだ。父さんは今仕事でどっかに行つていられるらしい、今朝帰つてきてそのまま風呂に入ってきたという考えが一番当てはまる。しかし、だ。今聞こえた『だーれだ』という声は明らかに女性のそれだ。父さんがまさか仕事中にそつちに目覚めてしまったとは考えにくい、てか考えたくない。よつて父さんも消えた、いや消した。

さあ問題です。前の条件を満たせるものが僕の家族にいるでしょうか？　はい、僕。どうぞ答えてください。いませーん。（自問自答つてやつだ）

聞こえた声は悠さんのものに似ていた。そこで気づく。ああ、そうか。まだ僕は寝ぼけているんだ、だつて悠さんが僕の家風呂場

にいるわけがないじゃないか。カーテンは閉まってたし、まだ寝てるんじゃないかな？

「時間切れー」

またしても悠さんの声がした。ああ、僕終わってるな、女の子と一緒に風呂に入りたいという願望が強すぎたのかな？

「正解は、ボクでした」

ちょうどシャンプーを流し終え後ろを向いた。

そこには信じられない光景が広がっていた。紺色の肩から足の付け根までを隠す水着、つまり『スクール水着』略してスク水を着た悠さんがいた。

僕はここまでしてスク水を着た女の子と一緒に入りたかったのか。すごい再現度だ。クオリティーが高い！

「ちよつと空君？ ボクのこと幻想だとか思ってたない？ 現実だよ、スク水女子高生、天野原悠、ここに見参！ だよ？」

「あ、はいこれタオル。前隠して」と、タオルを渡される。

「ああ、どうも御丁寧に」

「って！ どうしてうちの風呂にお前がいるんじゃない！」
「ごめんなさい悠さん、勢いでお前とか言つて。でも許して、この状況だったら仕方ないよ、むしろお前呼びわりで済んだことに感謝してほしい。」

「お背中流しに参りました」

「いや、いいから！ 背中とかタオルがあれば洗えるから！」

「冷たいな空君、そんな冷たい空君には、えいっ」

温めてあげると言わんばかりに僕の背中に抱きつく悠さん。二つの小ぶりで熱々な肉まんが僕の背中に当たる。これはもうやけどでは済まされないぞ。こういう時に使っただろうなこの表現。心臓が止まるかと思った、いや止まった。ちなみにこの時、僕は悠さん（スク水ver）のCGをちゃんと収拾した。この辺はぬかりない。

この後僕はさっさと風呂を出た。責めたければ責めるがいい、何

故もつとこの状況をエンジョイしなかったのかと。しかし考えても見てほしい、スク水を着た女の子（美少女）と一緒に入っているのはマンガやアニメの中だけだろ？ ここで僕が楽しむなんて言い出したらおそらく僕は二次元の世界へレッツゴーだ。僕としてはアニメの世界に行けるのはとても魅力的ではあるが、ペしゃんこになるのはごめんだ。

そもそもヘタレな僕にそんな勇気があるはずない、これは生まれ持った性質だ。

ペンギンが空を飛べないのと同じこと。僕と違うのはペンギンには泳ぎという特技があるところだ。

風呂場から悠さんが言う。

「空君ごめんごめん。そんなに怒らないでよ、美少女が風呂場に入ってきたんだよ！ こんなシチュエーション滅多にないよ？」

「もちろん怒ってなんていないよ！ むしろ……」

「むしろ？ 嬉しかった？ 踏切上がった？」

何の事だかさっぱり分からない！ 彼女と下ネタの話なんて絶対しないんだからな！

まあたしかに、貴重な体験ありがとうございました！ と思っただがそんなこと口には出さない。

「いや、なんでもない」

そこで悠さんの口調が変わる。

「実を言つとね、昨日の夜からちょっとお風呂が使えない状況で借りに来ただけで、空君起きちゃって たっぽくて部屋にいなかったじゃないですか？」

「また窓から侵入ってわけですか」

僕は苦笑する。

「まあ、そういうことなら、使って使って。今この家には僕以外男いないから」

「なら安心だね、ありがと」

あれ？ 許可取る前に入ってきて来なかったか？ まあ細かいことは

気にしない。気にしたらそこで人生が終了してしまう。

とりあえず服を着る、これは部屋着で五條さんが選んでくれたイケている服ではない。

脱衣所を後にする、風呂場からは『ふんふん』と鼻歌が聞こえてきた。

風呂で想定外の刺激を受けたため、火照りに火照った体を冷やすために緑茶を飲む。

風呂の後は緑茶に限る、カテキンパワーだ、カテキンパワーはすごいんだぞ？ おかげで風邪知らずだ。

キッチンで飲んでいると母が起きてきた。

「あら空輝、早いわね。今日はデートだったかしら？」

「うっさい。それより母よ、天野原さんのお宅は今風呂が使えないらしい、というわけで今悠さんが使っている。問題ないよな？」

「問題しかないわ、空輝」

「えっ？」

予想外の答えに僕はもう一度訪ねた。

「使って何か問題があるの？」

「悠ちゃんがつちのお風呂を使うことには何も問題はないわ
こう続ける母。」

「あんた今風呂出たみたいだけど、まさかとは思っけど一緒に入ったりなんかしてないわよね？」

「は、ははは……、まさかアニメじゃあるまいしそんなことあるわけないじゃないか」

僕は嘘をつくのが下手だ、顔に出してしまう。どうしようもないのだ。

「まさか、ナニしてたの？」

「ナニも何もしていない！」

「彼女ができたからってあんまり調子のもってハメ外すんじゃないわよ」

「言っておくが母よ、僕に女の子を襲うような度胸はない」

思い出したような顔をする母。

「そうだったわね、チキンでヘタレなあんたにそんな勇氣はなかったわ、悪かったわね」

本当に申し訳なさそうな顔をする母、逆に傷つく。

すると悠さんが風呂からあがってきた。

「朝からお邪魔してすみません。うちの風呂の調子が悪くて、空さんに言っ借りてしまったのですが、大丈夫だったでしょうか？」

「あら悠ちゃん、もちろん大丈夫よ」

悠さんには優しい母だ。

「それよりも、うちのバカに何かされなかった？」

僕はすかさず叫んだ。

「その話はさつき済んだだろうが!!」

悠さんは少し顔を赤らめ、

「何かって、その、エツチなこと……とかですか？」

「なんでー！　なんで悠さんそんなに照れてるの!?　さつきまでの悠さんはそんなことじゃ全く動じないでしょう!?」

自分から胸当ててくるぐらいだし……（思い出し照れ）

「あんたまさか本当に……」

「しない！　僕は本当に何もしていないんだ！　悠さんも何か言ってくれよ！」

「じゃっ、ボクは家に戻りますね、お風呂ありがとうございました、失礼します」

そう言っって階段を上がっていく。

「この状況を解決してから帰れやあ！」

すると悠さんはくるりと振り返り『にこっ』と笑って帰って行った（もちろん僕の部屋から）

ああもう！　可愛いんだから！

その後、母を納得させるまでに一時間近くかかった。

楽しくなるはずの一日のスタートは、波乱の幕開けだった。

ポケットに財布を詰め、例の服に袖を通す。さあ準備は完璧、待ちに待ったデートの始まりだ！

家を出る。悠さんはまだいない。それもそのはず、まだ待ち合わせの時間まで十五分あるのだ。五分前行動なんて生ぬるい、デートなら男は十五分前行動を心がけるべきなのだ！

それからしばらくして悠さんが家から出てきた。

下はライトグレーのハーフパンツ。上はピンクのフリルブラウスにベージュのジャケットを羽織っている。

この前とは違い、ボーイッシュの中にも少し女の子っぽさを取り入れてきた感じだ。普通に可愛い。いや、訂正。異常に可愛い。僕は可愛いとしか言えないのか？と自分でも思うが可愛いものは可愛いのだ。

ちなみに服に関しては少し勉強した。だって最近の男の子だもん。「おっ、早いね空君」

「準備が終わってから、いてもたってもいられなくなっちゃって出てきちゃった」

嘘ではない。見栄も含まれているが、嘘は付いていない！

空を見上げながら悠さんは笑った。

「ほらね、晴れたでしょ」

そつえばそうだった、空は雲ひとつない快晴。絶好のデート日和だ！悠さんはすごい晴れ女なんだな、自称するだけのことはあるようだ。

「ホント、晴れてよかったよ。すごいね悠さん」

「喜んでもらえて嬉しいなっ、今日からボクのことにはシャインガールと呼んでくれ」

「社員ガール？」

「違う、『会社員』の社員じゃなくて『光る、輝く』って意味のシャイン」

「それなら『ファインガール』の方がいいんじゃないかな？」

晴れ女の直訳ならこっちの方が正しいはずだ。
すると悠さんは俯き、ふるふると震えている。

「そうか、空君はそういう人だったのか……」

え？ 今ので怒ったの！？ 勝手に人の部屋の押入れ開けようと
しても怒らなかつた人が？

顔を上げるとそこには満面の笑みが浮かべられていた。ああまぶ
しい！

「天才だな空君！ ボクには思いつかないような素晴らしい名前だ
！ 空君は英語得意なのかな？ 見得なつたよ」

「どうやら悠さんは国語も苦手らしい。『見損なつ』の反対を『見
得なつ』（みとくなつ）だと思っているようだ、どちらかと言つと
見直すが正しいのかな？」

「じゃあ行くつか、しゅっぱーっ」

悠さんがこぶしを握り天に向け突き上げる。僕もつられて同じ行
動をした。

「おー！」

第6話 初デート！ ～そして物語は動き出す～

その遊園地は昔大企業の工場が建っていた土地を買い取って作っ
たらしい。『らしい』というのも聞いた話しだからだ。僕はその時
まだ生まれていないからね。

その企業は高度経済成長で急速に力を延ばしたがバブル崩壊の不
景気に耐えられなかったとのこと。大企業の工場だったと言っこと
もありその土地は広大だ。

一言で言つと広い。とても広いのだ。

おそらく、いや、絶対に一日では遊びきれない。それは遊園地側
も分かっているらしく、宿泊施設も充実している。

電車を降りこれまた広いエントランスゲートへ向かう。本来なら
は入場券を買うのだが、

「あれ 空君、チケットかわないと」

そう。実は僕、チケットは前日にコンビニで買っておいた！

もちろんおごりだ、男ならこの程度はしておかなければならぬ
とアニメで見た気がする。

「いや、悠さん。チケットはもうあるんだ」

首をかしげる悠さん、

「なんで？」

「いや、何と言つか。買ってあったと言つか……」

「ええ！？ やるなあ空君。で、いくらだった？」

財布を構える悠さん、払う気は漫々なだろうが、僕もおごる気
満々だ。

「いや、いいんだ。気にしないで」

なんて言えば格好がつくか分からないので、とりあえず意思表示
その後どうしても払いたいと悠さんが引かないため、昼食代を悠
さんが払うということで落ち着いた。

駅の改札のようなゲートを通り抜けて入場する、そこには別世界が広がっていた。

中世ヨーロッパの街を再現したと思われるレンガ作りの建物、その中にはお土産が売っているようだ。

また様々な動物を摸したかわいらしいキャラクターの着ぐるみが風船を配っている。

中の人たいへんそうだなー、とか思ってしまうあたりが可愛いげのない僕だ。

「わー広いね 何から乗ろうか？」

悠さんが僕の少し前に来て聞いてきた。

そこで首のあたりにひらひらと紙がついている事に気が付く

「あ、悠さんこれ何？」とその紙をつかむ。

タグだった。そこには僕には考えられないような値段が表記されていた。女物の服が高いとは知っていた、しかしこれほどまでとは……。

「えっ！ 嘘っ、そんな！」

悠さんは急いで服を脱ぎカバンから取り出したハサミでタグを切った。

女の子の鞆にはハサミが入っているのか。

「新しい服だったんだ」

僕が尋ねる

「うー、このボクがタグを取り忘れるとは。一生の不覚」

大袈裟だなあ。

「昨日、学校からの帰りさ私、途中で電車降りたじゃない？ 実は服を買いに行ってたんだ」

うなだれる悠さん

「あー、なるほど。服選びを僕に見せたくなかったって感じ？」

「うん、今日着てくる服が分かっちゃってるってのはやだからね」

「可愛いよ。すごく似合ってる」

僕は恥ずかしいのを堪えて言ってみた。あれ？　そこまで恥ずかしくない！　あれ！？

「えっ、あっ！　えっ！？　可愛い！？　そそそ、そんなことはわかってるよ！　ボクは可愛いんだよ！　それよりさ、ほら！　手を繋いでくださいえい！」

噛んだみたいだ。超照れながら噛んだようだ。悠さんは自分から風呂に入ってくるくせに他人からのほめ言葉に弱いようだ。ホント可愛い、このままいくと僕、オタクから抜け出しちゃうよ……。だってアニメのキャラよりも可愛いんだもん。

オタ歴四年でまだまだ日は浅いが、四年間に見てきたアニメ、読んできたラノベやマンガ。そのどれにもこんな可愛い女の子は出てこなかった。

今なら言える。悠さんは俺の嫁！

あー、自分でも思うよこのリア充っぷり。爆発するね、絶対そのうち核爆発規模の爆発起こすね！　みんなに迷惑がかからないように太平洋のど真ん中にも行こうかな？

悠さんの手を握る。その手はとても白く柔らかくすべすべしていてシルクのような肌触り。どっかのCMみたいだが、本当に。

歩いているとコーヒーカップが空いていたので乗る事にした。

『本当に回るコーヒーカップ』と看板に書かれている。回らないコーヒーカップなんてないだろうが、嘘も本当もありやしない。

「わー、久しぶりだなー、コーヒーカップなんて十七年ぶりだよ」

「悠さん今何歳？」

「女の子に歳を聞くの？　十七歳だけど」

若い女の子に歳を聞いてはいけない意味がわからない。

「悠さんそれ初めてって言うんじゃないの？　久しぶりじゃないし」

「そうとも言います！　いや、そうとしか言わない！」

「僕の突っ込みを奪わないで！」

ブザーが鳴りカップが回り始める。

初めてということなので僕は回さないで悠さんに主導権をゆだね

当たり前だ、こんなコーヒークップに乗るのは初めて来た人だけだろう。僕はもう乗らないと誓った。誓ったのだが。

「すっごい楽しかったよね　だからボクもう一回乗りたいな」
デレ期到来の予感、もともとデレてはいたが超デレに昇格か？

僕も男だ、女の子が乗りたいと言ったら乗る。例えこの身が朽ち果てようとも、願いがかなうならば本望だ。

というわけで、テイクツー。行っとく？

ブザーが鳴ってからその後の五分間、僕の記憶はない。気づくとそこには悠さんがいて、笑っていてくれた。それが僕の五分間の記憶と引き換えに手に入れられたものなら安いものだ。

「じゃあ次はジェットコースター乗ろうよ！」

コーヒークップで体力を使い果たした僕だがジェットコースターなら大丈夫だ。

「よし！　テンション上げて行くぞ！」

僕は吐き気をテンションでごまかす。

「おー！」

悠さんもそれに続く。

さすがにジェットコースターには列ができていた。係員の持っている看板には二十分待ちと表示されている。日曜日にしては空いている方なんじゃないかな？　最後尾に並ぶると悠さんが思い出したように言った。

「そういえばさ昨日、その……部屋に美佳ちゃん連れて服脱ごうとしてたけど何してたの？」

そういえば僕の不注意で、あくまで僕の不注意で、着替えをみられそうになってしまったのだった。美佳に服を見てもらうのが目的だったんだけど……。

「ええと、その……」

「なるほど！　妹との禁断の愛か」

周りの人が一斉にこちらを向いた。なんてこと大声で言い出すんだ、わざとやってんだろ。僕はまだ何も言っていない！

「違うから！ 自分の妹とそういう関係になるのはアニメや漫画の中だけだから！」

「じゃあなにやってたのさ」

これはあれだろうか？ ジェラシーってやつかな？

妹とまずい関係だと思われるのはごめんなので本当のことを話す。僕だって隠していたかったんだけど。

「実は僕も家帰ってから服を買いに行つてさ、その服を美佳に見てもらつてたんだ」

「あーなるほど、ボクと同じってわけですか！ いやまあ良かったよ、もし空君が妹に手を出していた場合、ボクはどういうリアクションをとればいいのか分からなかったからね」

僕だってどういうリアクションを取ればいいかわからないし。

「そうか！ 美佳ちゃんがお嫁さんになって、ボクが妹になれば…

…」

「いや、もういい。この話は終わり」

不服そうなお悠さんが頷く。あれ、さてよ。悠さんが妹？ 何と言うシチュエーション、それはそれでいいかも……。

「そうだ、空君。服すごい似合ってるよ、かつこいい」

さっきの仕返しだと言わんばかりに、あまりのまぶしさに失明するんじゃないかと思われるような笑顔を浮かべ僕に言った。

「そ、そう。ありがとう」

照れずにはいられない。

そこで僕達に順番が回ってくる。悠さんが先に座り僕も乗り込んだ。

レバーが腰の位置まで下がり係員が「行ってらっしゃい」と笑顔で送り出してくれる。

悠さんは「行ってきまーす」とノリノリだ。乗り物が発信すると悠さんが話しかけてくる。

「ドキドキするよねー、ほら、ジェットコースターなんて久しぶりだし、それに大好きな空君が隣だしね」

「おぼふえふわえるみよ！」

自分でもなんて言ったかわからないことを口に出した、もう一度同じことを言ってくれと言われても無理だな。悠さんはさっきのことまだ根に持っているんだろうか、今のは破壊力が大きすぎる。

このジェットコースターは『ナイトロッククライマー』という名前前で、夜に絶壁を上っていることを思わせる作りになっていて、出発して数十秒で落ちる。しかもほぼ垂直に。パンフレットには七十五度と書いてあったが大丈夫なのだろうか。

その後は洞窟を探検する感じで最後にもう一度八十度の垂直落下が待ち受けている。

「さあ空君もうすぐ落ちるよお！」

「そうだねえってうおお！ 高い高い！」

思った以上に高かった、落下距離が長かった。血が脳へ持っていかれ、頭が痛くなる。悠さんは僕の右手を掴み上へ持ち上げられ、僕は左手で手すりを全力で掴む。

「うわあああああああー！ー！ー！ー！」

「きゃっほおー！ー！ー！ー！ わふうー！ー！ー！ー！」

危ない危ない、意識を持っていかれるところだった。悠さんはと
言つと。

「いやあーホントすつきりするねー 景色もきれいだったし」

景色なんて見ている暇は僕にはなかったよ。女の子はこういう絶叫マシーンに強いようだ。

それからは右へ左へ揺られ、揺られ。隣に座っている可愛い女の子は僕に体をくっつけてくる、果たしてこれがわざとなのかそうでないのかは分からないが、控えめな胸が僕の二の腕に当たるのだ。もうぶにぶにと。

「やつほおー！ー！ きつもちいー！」

これは僕の歓喜である、恐怖一割、快樂九割って感じた。

そして最後の垂直落下へ、僕は大変惜しいことをした。もっとその感触を味わっていたかった。またも僕の記憶に欠落が生まれたの

だ、本日二度目。

最後の落下時僕は胸の感触に気を取られていて、悠さんが腕を上げた瞬間、あごに衝撃が走った。そこからの記憶はなく、次に目を覚ましたのはジェットコースターを降りる寸前だった。

「起きて起きて！ もう降りないとだよ！」

もう朝かー、美少女が僕を起こしてくれる。ここは二次元なのかなー。なんて思っていると。

「えいつ」

一発類にビンタを食らった。

「いつて！ 何！ 何？ 僕を起こしてくれた美少女は！？」

きよろきよろしていると、その美少女は隣にいた。

「ああう、ごめん、でも、もう降りないと！」

何とか降り場に着く前に気がついた僕。

「なんでジェットコースターで寝られるの？」

「お前が殴ったんだろおがぁー！」

僕も他のこと（主に胸）に夢中で気を抜いていたこともあったが、とどめはアッパーだ。ちよっときつめに突っ込んだっていいじゃない。

「おおう、そうだったっけ？ 済まない、済まない。じゃあお詫びに……」

この展開、あれ？ 一度経験したことがあるような。

「チュロスを買ってあげよう！ ボクも食べたいしねー」

チュロスとは棒状のドーナツみたいなものだ。味も色々で、この遊園地には、シナモン、キャラメル、ハニーの他に、抹茶なんて味もある。

せっかくなのでお言葉に甘えることにする。実は結構ピンチなのだ、二人分の入園料に、洋服まで買っているので僕のお財布はかなり寂しい。リア充生活にはお金がかかることが分かったよ、オタク生活にもそれなりにかかるけど。

そのあと僕たちが乗ったのははフリーフォール メリーゴーラン

ド 別のジェットコースター コーヒーカップ(三度目)。

三度目のコーヒーカップ。さすがの僕も悪魔の誘惑に負けた。美化して言うが、コマの端から水が噴き出している感じになった。僕も言いたくはなかったんだ、僕の口から液体化されたチユロスが噴出して、それでも悠さんは手を止めなかったんだよ、僕もびつくりだ。もう乗らないって決めた。いくら可愛い女の子、いや悠さんが乗りたいと言っても、もう乗らない、泣いたって乗ってやらない。一人で乗ってください。

係りの人に全力で謝り、あちらはにこりと許してくれたが、その笑顔は引きつっていた気がした。おそらく気のせいではないのだろう。

僕の胃の中がすっきりしたところで、お昼の時間になった。

「さてと、そろそろお昼にしようか」

「もう乗らない、コーヒーカップなんてもういやだ、もう乗らないもう乗らない……」

「うう、悪かったよ、ほらさ、吐いてすっきりしたところでお昼に！」

「それフォローになってるのかな？ でもまあ確かにお腹減ったし、何食べる？」

「んーと、空君は何食べたい？ ボクのおごりだから何でも言うてるよ」

遊園地に来て女の子に昼飯をおごってもらおう男って……。

でもこればかりは仕方がない、今回はかりはともいうが、僕がチケット代を払う代わりに悠さんが昼代を払う。もちろん最初は僕が昼も払うつもりではいたのだが、悠さんがどうしても払いたいと言うためにこうなった。

「何でもいいよ、吐かなければ……」

そこで悠さんが「あそこは？」と指をさした。言い終わって何かに気づいたように「あ」と声を発した。僕は指で指された店を見る。

その店は看板の形がコーヒーカップだった。これは嫌がらせだろうかと思つたが、悠さんはそんな性格ではないのでそれはないだろう。「う、ごめん。たまたま看板がコーヒーのカップだったってだけで……」

「大丈夫、大丈夫、気にしないで。ここにする？」

悠さんはにこつと笑い頷いた。

中は普通のレストランで四角いテーブルが等間隔で並べられていて、床に敷かれたマットが高級感を醸し出している。店員さんの制服も執事服だ。かつこいい。

席に案内され、メニューを見ていると、

「さあ空君、何が食べたい？ 頑張つて作っちゃうよ！」

何を言っているか、僕にはわからない。作っちゃうのは厨房にいるコックさんではないのだろうか、ここはセルフなレストランには見えないが。

「作るつて何を？」

「食事だよ？ ボク達のお昼ご飯」

「悠さんは作らないでしょ？ わざと言ってるんだよね？ ああ、

ごめん。突っ込み待ちだったのか！」

きよとんとしている悠さん。僕にも何が何だかさっぱりだ。

「え、『レストラン』つて、食材と厨房を提供してくれるお店じゃないの？」

「悠さんはどこの国で生まれたの？」

「サン、いや。日本だけど？」

サン？ 『日』を英語で言ってしまったのだろうか？

「レストランに来たのはどのくらいぶりなの？」

「えーとね、十七年と三カ月ぶりくらい」

「それを初めてって言っただろおがぁ！」

外国人顔負けだ。外国にもレストランはある、他の星からやってきたのだろうか？

「レストランつてのは、食べたいものを注文すると、それを作つて

持つてきてくれるの。僕たちは食べて、お金を払うだけ」

「めっちゃ便利やん」

「なんで大阪弁？」

「あはは」

突っ込んでいると胸はいっぱいになるが、お腹は膨れないので注文することにする。僕はハンバーグを、悠さんはスパゲティを頼むと五分程度で料理が運ばれてきた。

「ボク、自分以外の方が作ったスパゲティを食べるの初めてなんだ」

「多分、悠さんが作った方が美味しいと思うよ……」

お世辞とかではなく本当にそう思う。悠さんが作ったスパゲティを食べるともう他のそれがそれではなくなってしまう。

「いただきます」

「いただきます」

悠さんがスパゲティを口へ運ぶと動きが止まった。

「ねえ、空君。これホントにスパゲティ？」

「やっぱりそう思うよね、絶対に悠さんが作った方が美味しいもん」

「違うよ、スパゲティってこんなに美味しいものなの？」

悠さんの手が小刻みに震えている。「空君も食べてみなよ」と言うてフォークにパスタを巻く悠さん。

こ、これって間接、キスってやつなのでは……。

悠さんが僕の口へスパゲティを運ぶ

「あーんして」

「おげふおびゅば！」

リア充爆発しろ！ 僕爆発しろ！爆ぜろ！ 粉々になれ僕！

そうは思いつつも食べる、初めてのキスはトマトソースの味だった……違うか。

スパゲティの味は普通よりは美味しかった（悠さん補正を含む）、美味しかったのだが、悠さんの作ったスパゲティに勝てるはずがない程度だった、なんせ悠さんの作ったものはリミットブレイク

しているからな。

「あの、美味しいんだけど。絶対悠さんが作った方が美味しいって」「空君、ボクが作ったのを美味しいって言うてくれるのはうれしいんだけどさ……、ボクはこんなに美味しいスパゲティーは作れないよ」

どうやら味覚が違うようだ、悠さんの作ったスパゲティーはまるで別世界の食べ物かのようで、地球で表現できるおいしさを越えていたのに、こんな遊園地のレストランのスパゲティーがそれを上回ることはまず不可能だ。

それからの悠さんは黙々と食べ続け、「おかわり」と言つて同じスパゲティーを注文し、2杯目も完食したのだった。

食後のコーヒーを飲み一息つくとう悠さんは満足そうに言った

「いやあ、幸せだね」

「ホントだよ、あんまりいいことが続くとそのうち悪い事が起きそうで怖くなるよ」

悠さんが少し真面目な顔になる

「悪い事は起きない、いや起こさないよ、だから安心して楽しもうよ。ボクは生まれつき運がいいんだ」

「そうだね、楽しむよ！」

今僕はどんな顔をしているのだろう、おそらくとても幸せそうな顔をしているはず。鏡があったら見てみたいわ。

三日前までの僕は毎日アニメみて友達とそれについて話したりしてた。それはそれで充実してたのではないかと思う。しかしどうだろう、僕は悠さんに出会って、一緒に過ごして分かった、まだ三日しか経ってないけどね。

オタの充実にも限界があるということだ。リア充はこんなに楽しい毎日を送っていたのか、オタが妬むのもわかる。いや僕には分かり過ぎる。

「次は何にのろっか？」

コーヒーを飲み終えたところで悠さんが聞いてくる。

「コーヒーカップ以外ならなんでもいいよ」

本当にもうあれには乗りたくない、トラウマになった。

悠さんは「じゃあここは？」といってパンフレットを指差す

「またジェットコースターですか……」

これで本日三度目だ。レストランを出て真っ直ぐそこへ向かう。

確認するが今日は日曜日、一週間で最も自由な一日だ。なのに何かがおかしい気がする、やたら空いているのだ。いくら普通の日曜日とはいえ、この日本有数の遊園地で、こんなに並ばずに乗れるのは滅多にないはずだ。みんな他の乗り物に行っているのだろうか。

というわけで、そのジェットコースターの列に列んで約十分で順番が回って来た。

「ねえ悠さん、今日全然待たずに乗れるね」

前に行ったと言う友人の話だと最低でも三十分は待ったと言っていた。

「うーん、そうだね。まあさっきも言ったけどボクは運がいいからね」

乗り込みレバーが下がる。

「わくわくしてきたよ」

「僕は緊張してきたよ……」

さっき読んだパンフレットにこのジェットコースターは園内最速の飛ばし屋と書いてあった。

発車のベルが鳴り黒いサングラスをかけた係員さんが「振り落とされないようになっ」と、言ってウイंकをした

「振り落とされたりしちゃうような作りはまずいんじゃないの!？」

僕はつい突っ込んでしまったが、係員は「ははは、いつてらっしやい」と手を振っている。

それに悠さんも振り返す

「いつてきまーすっ」

いちいち可愛いんだから……。

発進するといきなりスピードが上がる、速い速い。

「うわぁー!!」

「いえーい」

園内最速は伊達ではなかった、左右上下に揺らる、これはこれで気持ちがいい。景色も綺麗。そして急カーブに差し掛かる。

この速さで突っ込んだらそのまま空中へなんてこともあるんじゃないかな、ジェットコースターが「もう俺、決められたレールを進む人生なんて嫌なんだ」とか言い出してさ。なわけないか。僕失笑。

そこで「ガキョ」と、本来出ないような音が聞こえた気がする。
え？

「ちよつと、嘘だろ!」

「きやつ!」

悠さんは僕の手を力いっぱい握る。ジェットコースターは無理矢理レールを外れ、見えない道を進んで行く。

そして重力に従い地面へ。つまり本当にジェットコースターは自分の人生を進もうとしてしまったのだ。

成る程、そうだよな。いいことありすぎたもん、神様だつてそろそろ悪いことを与えるはずさ、でも死ぬのはやだなあ。

いくら空いていたからといってこのジェットコースターには僕たちの他にも人が乗っているのだ。

僕のリア充生活の代償は僕一人の命では足りないようだ、本当に申し訳ないと思う。

ふと隣を見ると悠さんが何かをぼそぼそ言っている。しかも左手首が凄いい勢いで輝いている。なんでかな……。

悠さんだけは守ってあげたい、しかし今の僕にはどうする事もできない、これほどまで自分の無力さを呪ったことはない。

あ、あったかも。中二のときに……いや、この話しはしなくていいや。体に衝撃が走る、そこで僕は気を失った。

第7話 奇跡としか言えないねって

目を覚まし、体を起こす。どうやらベットに寝かされていたようだがここは天国だろうか、いや違う。

「げふっ！」

凄い勢いで僕の腹に抱き着く悠さん。彼女が天国にいるはずがない、そんなのは僕が許さない。

「よかつたよー！ 本当によかつた！」

目には涙が浮かべられている。僕なんかのために涙を流してくれるのか、これは感涙ものだ。

「ここはどこ？」

「え、まさか、ボクの事忘れちゃったの？」

「そうそう、ここはどこ、私は誰？つて違うわ！」

僕が悠さんを忘れるはずがない。

「あはは、いつもの空君だ」

周りを見渡すといくつもベッドが並べられていて医者らしき人達が寝ている人達を診て回っている

恐らく園内の医務室か何かだろう。

そういえばジェットコースターがレールを外れて……、どうなったんだ？

僕が起きた事に気付いたらしくスーツに身を包んだ初老のおじいさんが近付いて来た。

「私はこの遊園地の責任者の高木と言います。この度は誠に申し訳ございませんでした、なんとお詫びしていいか……」

成る程、どうやら本当に事故があったらしい、実感が沸かない

「僕は大丈夫そうです、それより他に乗っていた人は大丈夫だったんですか？」

「はい、もう奇跡としか言いようがありません、不幸中の幸い皆さんの怪我は比較的軽い物でどの方も命に別状はないと報告を受けま

した」

本当に奇跡だな、あれだけのスピードでレール外れて死者がでないとは。

「数日して身体に異常が出た場合ご連絡下さい、当たり前ですが全てこちらで負担します」

名刺を受け取った、このあと、まだ事故の調査があるらしく園内には残れない。

僕達も帰る事にする。

車で送ってくれるようなのでお言葉に甘える事にしよう。

高木さんは僕たちを家の前まで送ると「では失礼します」と一礼して帰ってしまった。まだ仕事がたくさんあるのだろう。

「じゃあまたね空君」

「うん」

また明日と言いかけたところで悠さんが体勢を崩した。僕はぎりぎりのところで体を支える。

「どうしたの悠さんっ!?!」

悠さんからの返事はない。

息が荒い、額にさわるとかなり熱い。

とりあえず僕は悠さんを抱え僕の部屋のベッドに寝かした。

第8話 過去そして現在

それは遠い昔の記憶

遠いとは言ってもだいたい八年くらい前の記憶。

空君は「それは遠くない！ むしろ近いわ！」とか突っ込んでくれるのかな。

ボクが小学生だった頃、言い直しそう。ボクがまだロリっ娘だった頃の話し。

ボクは小学校の実習でこっちに来ていた。こっちというのはつまりこっちの世界ということ。僕たちはティエラと呼んでいる

河原を歩いてみるとふと白い何か流されていた事に気付く。すぐにそれが猫だと分かった。

ボクは後先考えず川に飛び込んだ。計算も何も無い、体が勝手に動いたといってもいいかも。

水を吸った服は重くなり、流れも比較的速い、すごい勢いでボクの体力を奪って行く。

猫を掴んだときまでには帰るだけの体力は残っていなかった。

半ば絶望しかけたその時、声が聞こえた。

「諦めちゃ駄目だ！ 今助けに行くから！」

ボクと同じくらいの歳の男の子。

近くに落ちていた木の板を持ってこっちに泳いできた。

ボクに板を掴ませ「大丈夫？」と聞いてくる。

それに頷き一緒に陸へ上がる。

「無茶するよね君、でも僕は好きだなそういうの、ヒーローみたいでかっこいいじゃん」

その笑顔はとてまかつこよく、まるでヒーローかのようにボクは初めて恋をした。

「あ、あの。助けてくれてありがとう。よかったら名前を教えてくださいいんだけど……」

「僕かい？ 僕は通りすがりのヒーローさ！」

自分でヒーローとか言う人に恋をしたようだ。

「いや、名前を」

「ごめんなさい、調子に乗りました。僕は東雲空輝っていいいます」

空輝と名乗るヒーローは案外気が小さかった。

「ありがとう空君」

「みゃあ……」

猫が弱々しく鳴いた。空君はそれを見ると、

「その猫どうするの？ 飼える？」

ティエラからの小動物の持ち込みは禁じられているので持つては帰れない。ボクは首を横にふる。

「そうかあ、仕方ないよね。僕が母さんに聞いてみるよ」

このままこの猫を放したらそのうち死んでしまうだろう。空君が飼えるならこれ以上にならない展開だ。ぜひお願いしたい。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「ヒーローに任せとけ！」

ボクは髪を結んでいたリボンを猫の首に巻く。

そのあとのことはよく覚えていない

僕のベッドに悠さんが寝ている……、夢のようなナイスなシチュエーションだが。それがもし熱を出して倒れた女の子でなければの話だ。

こういう時にどうすればいいか分からない、どうしよう？ どうしよう！

一応言っておくが真面目な展開だぞ僕！ ふざけてる暇があったら考える！

そつだ、熱を出したと言えば額に冷たいタオル、というわけで用意したものがこちらです。三分クッキングか！ 動揺しすぎてわけ

がわからなくなっている状態な僕だ。

悠さんのおでこにタオルをおこうとしたその時、部屋の窓が開いた、ドアではなく窓だ。

一呼吸おいて僕は振り向く。

「ちよおりゃあー！」

奇声とともに何かが僕の部屋に飛んできて、見事な着地。ポーズまで決め込んでいる。とりあえず拍手してみる。

「お、おう。ありがとう、ありがとう。じゃない！ アホか！ ねーさんに何をした！？ ナニをしようとした！」

外人さんだろうか、黄金色の髪を右で結んでいる、サイドポニーってやつか、きりつとした顔立ち、どこか悠さんの面影があり、僕が見てきた中で悠さんの次に可愛い、あくまで悠さんはトップだ。おそらく僕が死ぬまで、いや死んでもこの座は変わらないだろう。服は白いＴシャツに黒いひらひらしたスカート、少し男の浪漫…

…もとい下着が見えてしまった。

冷静に考えていると、その女の子は蹴りを繰り出してきた。

「ごふえ！」

見事に僕の腹にヒットする、クリティカルヒット！

「なんだよジロジロ見ちゃって、恥ずかしいだろうが！」

「え、えーと。君は誰？」

「おっと、紹介が遅れたな、貴様みたいな下衆野郎に名乗る名前でもいいなら名乗ってやる。ワタシの名前は天野原奏音、悠ねーさんの妹だ」

奏音と名乗る女の子は名前は思いつきり和名なのに髪は金髪だ。

「今、『髪の色金色のくせに名前超和名とかばっかじゃねーの』とか思ってたろ！」

いや、確かに似たようなことは思ったが、罵倒はしていない。正直に答える。

「ああ、一言一句間違っていない」

「こっの野郎！ このワタシをバカにするとはいい度胸じゃないか

！ ほめてやるう」

そう言っただけで背伸びをして僕の頭をなでる。なんでほめられた？

「ところでさ、なんでねーさんここで寝てんの？ 行為に及ぼうとしたところを邪魔しちゃった？ それにしては服着てるし、ねーさん寝てるし……」

とんでもないことを言う奏音ちゃん。

「待って待って、僕はそんなことをしようとしていない！ 断じてしていない！」

ここに至るまでの経緯を話す、奏音ちゃんは神妙そうな顔つきで聞き入っていた。

「なるほど、つまり貴様はねーさんにあんなことやこんなことをしようとしていたわけだな」

「どう解釈するとそうなるんだよ！ 明らかおかしいだろその解釈……！」

「何言ってるんだ？ あんなことやこんなことと言ったら、介抱とか手当とかだろ？ アンタこそどんな解釈したんだ？」

きょとんとした顔でそういう奏音ちゃん。さすが姉妹、あんなことやこんなことの解釈まで一緒だった。

「うづん、まあ。そうだな」

「よし話してやるう、どうしてこうなったかをな。その前に一ついいか？」

「なんだよ？」

「アンタ名前なんだ？ 話にくい」

そうだった、僕の自己紹介はまだだったな。

「僕の名前は東雲空輝、高校二年生、十七歳だ」

「~~~~~」

驚いたような奏音ちゃん

「どっし」

「黙っている水素！」

一言、水素とか言いやがった！ 空気の中で最も軽い気体。空気

と言われたことはあるが水素と言われたのは初めてだ。かなりシヨツク！

そしてしばらく考え込んだ奏音ちゃんが口を開く。

「実はワタシ、あなたよりも年下だ、ピッチピチの十五歳だ、意味はわかるか？」

「え、特に何も」

「つまりはな、貴方よりも年下だ」

「うん、それはわかる。二回目だしね、それ言うの」

「うづ〜〜〜」

「話し方とか気にしているのなら別にいいよ？ 気にしないで」
すると奏音ちゃんの顔が輝いた。そのままの意味ではなく例えの表現で。

「おおう、そうかそうか、寛大なんだな二酸化炭素は」

少し重くなったが、気体の名前からは卒業したい……。

「では、よろしくなっ！ 空輝先輩！」

「ぐはっ！！」

まさかの不意打ち、ウィンクしながら奏音ちゃんが言う。この破壊力は抜群だ、姉妹そろって可愛い。

「こ、こちらこそよろしく……」

僕がジュースを用意し部屋に戻ってくると、奏音ちゃんは正座をして待っていた。

「はいこれ、ジュース。炭酸大丈夫？」

そういつて炭酸飲料の入ったコップを渡す。

「もちろん大丈夫だが、ぷぷぷ……」

何がおかしいのか、口を押さえて笑う奏音ちゃん。

「どうしたの？」

「いや、だつてぷつ、二酸化炭素が二酸化炭素の入った飲み物持つて来ぷっ」

「二酸化炭素って言うなああああ！」

「まあ、それは置いておこう、ねーさんが蚊帳の外だぞ先輩」

簡単に置いておかれてしまったが、確かにそんなことはどうでもよかった、今最も重要なことは悠さんのことだった。

「どうしてこうなったのか分かるのか奏音ちゃん？」

「まあ、わかる。一言で言うところなのだが、説明にはまず宇宙の成り立ちから説明する必要があるのだけど、聞くか？」

「よし、聞こう」

それから一時間後

「これで地球ができたわけだけど、ここまでは大丈夫か？」

この一時間黙って聞いてはいたものの、さっぱりわからなかった。

「全然わからないよ……」

「よし、じゃあ、おふぎはこのくらいにして真面目に話そうか」

「！？ おふぎに一時間も使うなやあ！！！」

「いや、無駄な一時間ではなかったぞ、ワタシはふぎしてからじゃないと真面目に話せないんだ」

「どんな性格だよそれ……」

「よし、では真面目モード奏音。話します」

「まずはだ、今いるこっちの世界は『ティアラ』ってワタシ達は呼んでいるんだ」

「えっ、つまり、もうひとつ世界があるって言うこと？」

「まあ、簡単に言うとそういうことだな、そのもう一つの世界って言うのがワタシ達の住んでいる『エルデ』だ」

「君たちは別の世界から来てるってこと！？」

「信じられないだろうが、これは真実だ」

「ああ、まあ信じるよ」

「私たちの世界にはクラフトっていう、力というか、魔法というか、むむ、表現が難しいな」

「じゃあ見せてみてよ」

「ん、そうだな。サイコロある？」

僕は机の引き出しに入っていたサイコロを取りだし、それを渡す。

「はい」

「おお、ありがとう。これがもし十回投げて十回全部同じ目だったらびっくりしない？」

「うん、それはすごいね」

では、といって奏音ちゃんはサイコロを振る……。

結果は十回すべて六だった。

「な、これはすごい……」

「これがクラフトだ」

「サイコロで同じ数を十回出すので悠さんがこうなったの？」

「いや、これは簡単なものだからたいして体力を使わないんだよ」

「そうなんだ」

頷く僕。

「クラフトはこのデバイスを介して使用する」

そういつて手首を見せる、そこには天使のリングのような黄色い輪が付いていた。

「事故のとき、ねーさんの腕光つてなかった？」

「ああ、そういえば光っていたな……」

「エルデの人たちは、天使の末裔みたいな感じなのさ、だからこのデバイスは天使のリングを使いやすくなったようなものだ」

「天使だったの！？　なんで頭の上じゃないの？」

「考えてもみてよ、頭の上にこんな浮かんでたらダサいだろ？」

いまだき頭の上に浮かべてるのなんて、ほとんどいないよ、お年寄りくらいなものさ」

「なるほどな」

「この力でねーさんは、ジェットコースター事故をできるだけ被害を少なくしたんだろうね」

「それで、体力を使い果たしてこうなったと？」

「うん、そう。相当な力を使っているからね」

「それで、悠さんは寝てればそのうち起きるの？」

奏音ちゃんは深刻そうな顔をして黙ってしまった。

「……どうしたの？ まさか、起きないとかじゃないよね!？」
僕が言うと

「よし、ちよつと待っててくれ先輩っ!」

そう言つて窓から跳び移り、悠さんの家へと歸つて行つた……。
部屋に残された僕と悠さん。

「起きてよ悠さん……、僕はどうすればいいんだよ……」

ベッドに向かい合うようにして座っていると、扉が開いた。今度
は窓ではなく、部屋の扉だ。

「兄貴いー、今暇? ちよつとこ っ!？」

言い終わる前に悠さんの存在に気付いたようだ。

「おい美佳、ノックをしるといつも言つてるだろう」

「ななな、何で悠さんが兄さんのベッドで寝てるの？ ま、まさか
まさかまさか事後……?」

こいつのせいでシリアスな空気が一気に飛んでいった。空気ブレ
イカーと名付けよう。

「んなわけあるがバカ野郎! タオルを額に乗せた人を見てそれは
ないだろうがっ!」

僕が憤る

「ふふ〜ん、私バカだけど、野郎じゃないもん、女だもん、じゃが
いもん」

……じゃがいもん?

僕は一通り事情を説明した。

「そんなことがあつたんだ、そうとは知らずに……」

珍しく美佳が素直に謝つた。

「いや、いいんだ、知らなかつたんだし」

「本当にごめんね、あのプリン兄ちゃんのだつたんだ……」

……おや?

「お前、まさか、食つたのかあのプリン」

「知らなかつたんだ……」

「明らか途中の話しが噛み合っていないところからみて、知つてたよ

な？」

「えっ、そんな、パンツはダメだよ……」
そう言っつて顔を赤らめる美佳、会話が全く噛み合わない。

「お前のパンツなんかいるかあっ!!」

「ネットとかで売ればけっこう高いんじゃない？ ほら、私可愛いし」

「そっなの？」

「捕まるけどね」

「じゃあいいや」

見事に僕の怒りを鎮めた美佳。こいつ、できるっ。

「ところで兄よ、悠さんけっこう汗かいてるみたいだから」

「以外と気がきくな、拭いてくれるのだろう、こっとうときには頼りになるな。」

「ああわかった、今出ていく」

「ペロペロしないの？」

「悠さんぺるぺる……っつてできるくアツ！」

「兄さんもけっこうバカだよね？」

くっ、否定できない……

「じゃあホントに拭くからさ、タオルと水持って来てくれる？」

「ああ了解」

用意して部屋に持って行くと

「覗くんじゃないよ、兄さん？」

と釘を刺された。

「当たり前だっ」

「というわけで僕は今、自分の部屋の扉の前で正座をしている……。すると中から」

「うわっ、悠さん肌綺麗……」

「あ、あの野郎、なんてことを……」

僕は持ち前の妄想力を発揮する。

「胸は……、そっでもないなあ、えっなんでこんなに柔らかいの！」

「ぶはっ！」

美佳のやつ、絶対わざとやってるだろう……

すると部屋の部屋の中からドスタツ！ と音がし

「きゃっ！ 何なのあんた！？」と美佳の声が。僕は急いで扉を開くと……。

「どうした美佳！？ ツ 「まず初めに目に飛び込んで来たのは悠さんの一糸纏わぬ上半身の姿だった。

そして

「「何見てんだ変態っ！」「」

見事に息の合った美佳と奏音ちゃんのドロップキックが僕の顔面に直撃した。

第8話 過去そして現在（後書き）

設定裏話 エルデ：Erde…ドイツ語で地球 テイエラ：tie
rra…スペイン語で地球

第9話 よくわかる奇跡の起こし方

東雲家一階リビング。

僕はそこで美佳と奏音ちゃんにお説教をされていた。正座で。

何故説教をされているかは言うまでもない、男子禁制の僕の部屋に不可抗力とはいえ立ち入ってしまったからだ。

男子禁制の僕の部屋ってなかなか面白い状況だな。

「だからね兄さん！いくら妹が悲鳴をあげたからって、中の状況を知ってたら開けちゃいけないと思うの！」

元はといえば奏音ちゃんが窓から侵入したのが原因何だが……。

「ごめんなさい」

「だからさ、先輩！何で半裸のねーさんがいると分かっている部屋のドアを開けたのさ！」

「ごめんなさい」

「ところで兄さん、こいつ誰？」そういつて美佳が指を差すと、奏音ちゃんはむっとした。

「お前こそ誰だっ！年下だったら先輩って呼ばせてやるんだからなっ！」

「十五歳だけど？」

奏音ちゃんはむっとした表情がらぐぬぬという表情になった

「な、何月生まれだっ！？ワタシの方が早かったらおねーちゃんって呼ばせてやる！」

「五月だよ」

奏音ちゃんはなんてこったという表情になった。だんだん面白くなってきたぞ

「うひゃあ！何日だっ！ワタシの方が早かったら……、奏音様って呼ばせてやるんだからなあ！」

いい加減ツツコんでやれよと僕は思うのだが……

「三日だよ」

「うわあああー！ー！ーんっ！」

奏音ちゃんは泣きながら部屋を出て行った。

数秒後。

「あ、フロン先輩、サンダル借りますね」

「僕はクロロフルオロカーボンじゃないっ！　そもそも温室効果がスじゃないっ！　空輝だ！」

そんな僕の喚きは完全にスルーされ、また泣きながら出て行った。奏音ちゃんがいなくなった東雲家、とても静かだ……。

「それで兄ちゃん、さっきの誰？　やたら可愛いかったけど」

やはり奏音ちゃんは可愛いようだ、女の目から見ても可愛いようだ。

「ああ、天野原奏音ちゃん、悠さんの妹だっけ。僕もさっき知り合っただ」

「え、マジでっ！？　何で金髪なの！？　たしかに似てないわけじゃないけど……」

「僕もよくわからないから、帰って来たら奏音ちゃんに聞いてみてくれ」

そして数分後『ピーンポーン』と家のチャイムが鳴った。

「はい」と僕が玄関のドアを開けると、少々息を切らせた奏音ちゃんが立っていた。

「や、やあ空輝先輩……」

「おかえり、どうしたの奏音ちゃん？　とりあえず上がってよ」

「ああ、あとサンダルありがとうでした」

そしてリビングへ行き美佳の前へ

「どうしたの蒼ちゃん？」

美佳が不思議そうに訪ねると

「そ、その……先程は申し訳なかった、お詫びと言ってはなんだけどこれを」

そういつて差し出したビニール袋にはジュースとお菓子が入っていた、これを買って行ったのか、変に律儀な奏音ちゃんだ。

「え、いいのに、年は同じでしょ？」

「いやたとえ三日でも年上は年上だ、処分は如何様にでも……」

美佳は困ったように僕の方を見るが僕は助けを求められても困るので首を振る。

「そうだ！　じゃあ友達になろう！　喋り方も普通だよ？　私は東雲美佳、その兄ちゃんの妹だよ」

奏音ちゃんはまたも太陽のような笑顔になり

「おおー！　兄妹揃って寛大なんだな東雲家！　ワタシは天野原奏音、悠ねーさんの妹だ！　宜しく頼むぞ！」

「ところで五酸化二窒素先輩、ワタシの出身について話したか？」

「いや、僕は水と反応して硝酸とか作れないからね、いい加減気体の名前言うのやめてくれないかな？　確かに名前は空輝だけどさ、空気じゃないんだよ？　くそう紛らわしい。ああでも出身の方はまだよ、勝手に話すには少し重大すぎるかなと思っただけだからさ」

美佳は首を傾げる。

「どういうこと？」

「賢明な判断だ先輩、ありがとう。では話そうワタシは」

「えっ……！？」

突然美佳が叫んだ。奏音ちゃんは困惑した表情で

「ど、どうしたの美佳ちゃん！？」

「うん、多分驚くだろうから、先に驚いておいた」

「ああなるほど」

「そこで納得するのかよっ！」

僕はついツッコんでしまった。

奏音ちゃんが一通り話した後美佳が口を開いた

「なるほどね、よし麻雀をしよう。私に勝ったら信じてあげる」

「麻雀？　ああ、エルデでは一巡目に勝負がつくから、つまらないと言われて今ではほとんどやらないうあの麻雀か」

「一巡目ってどんだけだよエルデ……」

早速牌を用意する、三人麻雀だ。サイコロを投げ親を決める、奏音ちゃんのリングはもちろん光っている。

「あ、私が親だ」

奏音ちゃんが親になった。まさか、この流れって……
牌を配り終え

「ツモだ」

「「なつ！ 天和!？」」

僕と美佳の驚きの声が重なった。

「天和、大三元、四暗刻、字一色」

牌を開くとそこには言った通りの役が揃っていた。どこの麻雀漫画だよ……

「あ、有り得ない……」

「平等に確からしい確率ほどいじりやすいものはないからね。これで信じてくれたかな美佳ちゃん？」

「う、うん」

「じゃっ」

一言そう言っただけ帰ろうとする奏音ちゃん

「ちよつとまってよ！ 悠さんはどうなるのさ、せめてそれだけでも説明してから帰ってよ！」

奏音ちゃんはすっかり忘れていたようだ。

「おおつと、そうだったそうだった、ねーさんのことだし、寝てればそのうち起きると思うよ？」

「えっ？ じゃあどうしてさっき深刻そうな顔をして出て行ったの？」

そう、彼女は先ほど僕のした「悠さんは大丈夫なの？」という質問に答えずに自分の家に帰ってしまった。

「おいおい先輩、毎週買ってるマンガは発売日に買ってこそだろう？」

「お前……、まさかマンガなんか買ったために僕にとつもない心配

をさせたのか？」

「わわわ、悪かったよ先輩！ そそそんな怖い顔しないでえ」

奏音ちゃんは今にも泣きそうな顔で言った。僕はそんなに怖い顔をしているのだろうか。

「まあ、悠さんが大丈夫ならいいけどさ……」

そのあと美佳が奏音ちゃんの耳元でこっそりと「兄さんは滅多に怒らないけど、マジで怒ると怖いから気をつけてね」

と言っていたのは聞こえなかったことにする。そんなに怖くはないと思うのだけれど……

第10話 彼女の記憶

次の日

悠さんが心配でほとんど眠れなかった僕だが、朝は誰にでも平等にやってくる。ちくしょう学校爆発しないかなあ……

昨日はあの後、悠さんをお姫様抱っこして彼女の家のベッドに寝かして家に帰った。これできききキスしたら目覚めないかな？なんて馬鹿な妄想をしてしまったことは誰にも言えない、そんなことを考えてしまう自分が腹立たしい。

それからのことは僕は知らない、おそらく奏音ちゃんが上手く取り計らってくれただろう。

というわけで今日、僕は一人で登校する。今日は終業式、明日からは春休みだ。

「はあ……、鬱だ。悠さん大丈夫かな……？」

一応なにかあった時のために、奏音ちゃんとケータイ番号とメールアドレスを交換しておいた。

早速今朝メールがきたんだったな『や、やあ先輩、おはよえ。ねーさんはまだ起きないっほいから、今日は一人でいつてくください』所々濁点が抜けていたり押しすぎたりしていた……

奏音ちゃんはまだあまりケータイに慣れていないのかな？ おはよえって何だ……

そんな愉快なメールに僕は『おはよえ。了解、連絡ありがとう』と、返信した

とまあそんなことを思い出しながら電車を乗り換えた。

扉に背を向けて吊り革に捕まった。扉が閉まりますとアナウンスが流れそして

『たっ たっ たっ たっ』と後ろから聞こえる軽快な足音、僕は振り返り 『どいてえー！！！』

「ぐぶあー！」

扉が閉まる寸前に女の子が飛び込んできた。

「ちよつと、駆け込み乗車はやめ　ッ!？」

駆け込み乗車をして僕の腹にアメフト部よろしく見事なタツクルを決めたその女の子は　悠さんだった。

「ゆ、悠さん……」

僕は消え入りそうな声でそう呟いた、目から水滴がこぼれるがこれはタツクルが痛かったからではない。

「おおつと失礼、申し訳ない、お詫びにボクが貴方の……ってそんなに痛かった？　おかしいな、極力被害は小さくしたつもりなんだけど」

そういつて彼女は光っているリングを確認する。

「悠さんっ!」

僕は抱き着いていた、抱き着いて……抱きしめた。

「ちよ、ちよつと！　こんな人前でななななんて事を！」

悠さんはあわあわと手をバタバタさせた。

「落ち着いた？」

「うん、ありがとう」

「どうしたのかな？　いきなりボクに抱き着いて、何か悲しい事でもあったの？」

「よかった、ホントによかったよ、悠さんが無事で……」

悠さんはきよとした表情で

「えーと、ボクの事どこで知ったのかな？　ああ、隠れファンか！　さすがだなボク、いつの間にかファンを作ってしまった！」

は？　なに言ってるんだか、僕は苦笑する

「ははは、何言ってるのさ、僕は悠さんのかかか、か、彼氏じゃないか」

ボンつと悠さんは真っ赤に顔を染めて

「ふええ〜!？　たしかに君はボクの、その、好みのタイプではあるけど、そういうことはちゃんと順序を……」

「え、あの、ちよつと悠さん、僕の名前は？」

「天野原悠ファン一号!」

「……冗談、でしょ? 空輝だよ? いつも空君って呼んでくれたじゃないか!」

僕は取り乱す、自分でも分かるくらい動揺している、背中には冷や汗をかき、心臓の鼓動が早まる。

「空君? うーん、覚えがないなあ、二酸化」

「炭素じゃないっ!」

僕は電車の中ということも忘れて叫んでいた。

「ご、ごめん。そんなに怒るとは思わなくて。本当にごめんなさい」
深々と謝る悠さん

「ちがう、違うんだ……、ごめん悠さん。そうだ、さっき何て言ううとしてたの!?! お詫びに貴方の 後!」

「ああ、あれは……、何て言おうとしたのかな? 多分貴方の願いを叶えてあげる だったと思う、あれ? でも前にもこんなことあったような……」

どうやら紛れも無い事実のようだ。悠さんの記憶がない

最寄り駅に着き悠さんと二人で登校する

「おつ、悠ちゃんに東雲君じゃん!」

後ろから声をかけられた

「あ、理沙ちゃん! おはよー」

「藤永さん、おはよう……」

実のところ二日ぶりに会う藤永さんだが、ずいぶんと久しぶりな気がする、なんでだろう?

「東雲く〜ん、テンション低いぞ? 私のツインテ専用技『ツインテビンタ』をお見舞いしてやろうか!」

そう言っって首をブンブン振りツインテールが空を切る。この場合の『空』は僕ではない、これなんて補足説明?

「いや、いいよ、遠慮する」

待てよ? こんな補足説明よりもっと大切な事があることに気付

いた。

悠さんは藤永さんの事を覚えている

「ゆ、天野原さん、藤永さんとはいつ知り合った!？」

「えーと、土曜日だから、二日前かな？」

「何言ってるの東雲君？ 私と悠ちゃんが友達になったとき君もいたじゃん」

悠さんはその言葉に驚いた表情で

「えっ、嘘、空君いたの？」

「……いた」

「ケンカでもしたのかな？」

とりあえず、悠さんに一緒に帰ろうということだけ伝えて二人と別れた。

終業式、体育館に集められ延々と繰り返し返させる校長のありがたい無駄話を聞きながら僕は焦っていた、まさかとは思いつけど、僕だけ忘れたのか？ そんなに都合よく、いや、この場合悪く僕だけを忘れた？

とりあえず放課後だ、奏音ちゃんに聞かなくては、どうしてこんなつたかを

生活指導部の教師の「髪染めるなー、や、事故に気をつけるー」なんていうもはや恒例とも言えるいらぬ注意で終業式が終わり、クラスに戻る

すると後ろから真野が

「どうした、空？ 元気無いじゃないか。ところで今朝のニュース見たか？ あの遊園地のジェットコースターで事故があったんだってさ、でも死者どころか怪我人すらほとんどいないらしい、奇跡だな」

「ああ、ホントに奇跡だよ。サイコロ十回連続同じ目を出すのとはわけが違う」

「何言ってるんだお前？ ところでよ、今日も天野原さんと帰るのか

？ 俺もいいよな！」

「ああ、勝手にしろ……」

「空、お前ホントどうした？ 具合でも悪いのか？」

「いや、体調は完璧、今なら三時間で世界一周できる」

「じゃあなんで？」

「三時間で世界一周なんてできるわけないだろうがっ！！」

「お前元気だな、自分で自分に突っ込むとか」

真野は苦笑する

「いやさ、精神がズタボロなのよ」

「どのくらい？」

「消しゴム落としただけで、命を落としそう……」

「そうか、大変だな」

「消しゴム落としただけで命落としてたら、命が何個あっても足りないだろうっ！？」

「やっぱお前元気だわ」

このままだとボケとツツコミのハイブリッドになってしまう……

春休みの課題なんていういらぬ物や、過ごし方なんていう余計なもの、通知表なんていう恐ろしいものを配り終えホームルームは解散した。

廊下へでると悠さんが待っていてくれた

「ごめん、待った？」

「うんうん」

首を横に振る

「時計の短い針が二周するくらいだよ」

「一日も待ってたのかよっ！？ しかも昨日のこの時間は悠さんスパゲティー食べてたじゃないか！」

ドスンッ！ と大きな音がして、その方向を見るとそこには穴が空いていた。コンクリートできている柱に穴が空いていた……

「なあ空、なんでお前が一日前、天野原さんが何してたか知ってるんだ？」

声を弾ませ、につこりとした真野がそこにいた。いてしまった。

「そうだよ空君、なんで知ってるのかな？」

「くくくく、ごめんなさいでしたあ！　ぐふおえっ！」

謝っただけでは許されず、真野に一撃頂いた。天井に叩き上げられ亀よろしく床に落下した。

真野はいつからこんなに強くなったんだろう……ガクッ……

「真野君！　前にも言ったじゃないか、暴力はよくないと思うって」

「く、ごめんなさい……」

「でもあれ？あの際は どうして二人で帰ったんだったかな？」

まさか、真野を覚えていて僕を忘れたしまったなんて……

真野は僕が事実上空気となったことに憐れむとともに喜んでいるようだった。まったく、器用なやつめ……

帰り道ケータイを確認すると奏音ちゃんからメールがきていた。

『せ、先輩　バカか？（笑）　バカなのか？（大笑）おはよえって

なんだよ？（大爆笑）　やっぱり先輩バカだな！（水素爆笑）P・

S・空気なだけに……ぷぷっ』

あのやろう、水素爆弾の爆発くらい笑ったっていうことと僕の名前である『くつき』をかけやがった！　不覚にも笑ってしまった……奏音ちゃんが間違えたのにな、おはよえ……。

「えーと、じゃあまた後で」

そう言っ て別れようとすると

「えっ！　空君、家隣なの！？　そういえば美佳ちゃんの名字も東雲だったっけ、お兄さん？」

本当に見事に『東雲空輝』という存在だけが彼女の記憶から抜け落ちているかのようだった。いや、抜け落ちているのか。

「そう、僕は美佳の兄だよ」

「おお、じゃあ美佳ちゃんによるしくね」

そういつてウインクする悠さん、めっちゃめっちゃ可愛い……

とりあえず家に入る、話しはそれからだ

「なっ!？」

「お帰りなさいあなた! ご飯にする? お風呂にする? それとも、お・ひ・る・ご・はん?」

家の扉を開くとそこにはエプロンをした奏音ちゃんがいた。どうしてお前がココニイル?

昨日とは違い、エプロンの下にはどこかの学校の制服を着ているようだ。

「か、奏音ちゃんっ? どうしてうちにいるのさ!？」

「裸じゃなくて残念だったな! 先輩!」

「ああ! 心の底から残念だよっ!」

奏音ちゃんは一步下がり

「せ、先輩。確かに先輩は思春期男子だが、そんなことを女の子に言うとその……引かれるぞ?」

「思春期女子のお前が最初に言ってきたんだろっがあ!」

「それで、どうする? やっぱり昼ご飯だよな?」

「えっ、スルーなの? 僕のツッコミはするーなの!？」

「何の事だ空気先輩?」

「おまつ、もう一回言ってみる! 今空気って言わなかったか!？」

僕は空輝だぞっ!」

「紛らしいな先輩、文にすると分かりやすくなると思う、ラノベでも書いたらどうだ?」

「確かにラノベならわかりやすいな。って、主人公は僕かよ!？」

「誰もそんなことは言っていないだろう、先輩はモブキャラAだ」

「モブキャラAだと!？」

「モブ先輩、昼ご飯は何が食べたい?」

「あの、とりあえず僕の家に上がらせてくれないか?」

「モブ先輩って言われたことへの反応はなしですかっ!？ ああ、

これは失礼した、玄関を塞いでしまっていたか」

リビングへ移動し椅子に座る。奏音ちゃんはキッチンだ。

「お湯が沸いたら三分で出来るからちよっと待っていてくれっ」

「奏音ちゃんまさかそれって……」

「ん？ エルデ自慢のカップラーメンだぞ？」

「やつぱりか」

「そんなぽいぽい女の子の手料理食べられると思ったら大間違いだぞ先輩、ギャルゲヤラノベの主人公じゃあるまいし、先輩はモブキヤラなのさ」

「サラッと酷い事言うよね奏音ちゃん……」

奏音ちゃんがテーブルの上に、みたことのないパッケージのカップラーメンを置き僕の向かい側の席に座る。

「ちなみにこのラーメン、三分経つ前にふたを開けると歳をとる」

「玉手箱かつ!?!」

奏音ちゃんはおもむろに僕の前に置いたカップラーメンのフタを

開けた

「うわっ!」

つい反射的に身構えてしまったが……何も起こらない。

奏音ちゃんはお腹を押さえて爆笑した

「あはっ、あははは！ 信じてやんのっ！ だいたいそんな危険なカップラーメン売ってるわけないじゃん、ていうかあるわけないじゃん！ あははははは!」

「お前なあ……、僕は今かなり精神が不安定なんだぞ？ キレても知らないからな!」

奏音ちゃんは何かを思い出したような顔をして青ざめた

「す、済まなかった！ 許してくれっ!」

「いや、うん。そこまで謝らなくてもいいけどさ」

エルデ自慢のカップラーメンは驚くほど美味しかった。エルデは食べ物が美味しいんだな。

ラーメンを食べ終わり奏音ちゃんが口を開いた。

「ねーさんの事、話していいかな？」

そう、この話を僕は聞きたかったのだ。

「もちろんだよ、話してくれ。真面目な話しの前のふざけた話しは
いらないの？」

「え？ あああんなの嘘に決まっ　　ひっ！　ごめんなさい、ごめ
んなさいっ！」

僕の顔を見ていきなり謝りだした奏音ちゃん、さっき言ったことを
思い出したのかな？

「えーとだな、ねーさんには会ったんだよね？」

「ああ、見事に僕だけ忘れられていたよ……。ジェットコースター
事故のあれが関係してるんだよね？」

「おそろくね」

「悠さん、記憶、取り戻す……。よね？」

つい言葉が震えてしまう。

「わからない、正確に言うところのまま何もしなければ戻らない……」
「え、嘘でしょ……？」

確かに悠さんが元気なのはとてもうれしい。でもたった三日、三
日だけが彼女とすごした時間は、僕が今まで過ごしてきた中で最
も楽しく、そして充実していた。この思い出を僕だけしか覚えてい
ないというのはとても悲しいんだ……。

「いや、申し訳ないけど嘘ではないんだ先輩。だが手はある、ある
んだけど……」

言い淀む奏音ちゃん。

「あるんだけど？」

「その、危険だし、失敗するとねーさんの記憶の保証ができない」
記憶の保証ができないということはつまり、失敗すれば記憶をす
べて失うかもしれないということだ。

「えと、その方法って？」

「なんで先輩のことだけねーさんが忘れたと思う？　他のみんなの
ことは覚えてるのに、『東雲空輝』という存在だけ、忘れたと思う

「？」

「空気だからか？」

「ぺしっ！ と頭を叩かれた。」

「先輩、ワタシは珍しく、柄にもなく、なんとなく真面目な話をしているんだ」

「今なんとなくなってる？」

「うっさい。つまりだな、ねーさんの中で先輩が一番大切だったってことだよ。妬けるね、妹とか父さんとか母さんとかよりも、先輩の方が大切だったんだねーさんは」

「どういうことだ？ 出会って三日？ いや、ストーリーカーをしていたらしいからもう少し前から僕のことには知っていたかもしれないが、そんな奴が自分の家族よりも大切だと？」

「だからってどうして記憶がなくなるのさ！？」

奏音ちゃんは左手を突き出しリングを僕に見せる。

「デバイスはな、意思を持っている」

「え、意思？ 考えたりするってこと？ て言うか生きてるの！？」

「これは持ち主とともに生まれ、持ち主とともに死んでいく。つまり自分の分身みたいなものだ、でも意思は独立してるけどね」

「そうなんだ、大切なんだね」

「当たり前だろう」

「ところでそれって記憶を失ったことと関係あるの？」

「おおありだ。あのなあ、前にも言ったけど、クラフトを使うとそれなりに体力を消耗するんだ、デバイスだって疲れるのは嫌だろう？ だからリミッターをかけることがあるんだよ、使いすぎて死なないようにとかね」

「確かにデバイスさんも死にたくはないよな」

「ここからは推測だけど、先輩の記憶があるとねーさんの生命に危険があると判断したデバイスが先輩のことを忘れさせたんだと思う。あくまで推測だけど」

「なるほどね、で、その方法って言うのは？」

「先輩がねーさんの記憶の中、正確には精神世界だけどとりあえずそこに入ってお願いする」

「はっ!? 無理だろ普通に考えて!」

「何のための奇跡の力だ?」

「できるの?」

「私ひとりでは無理だけど、何人か一緒になら送りこめると思う」
「なるほどね……」

「あ、ティエラでは無理だよ? エルデに行かないと」

「は!? エルデって、そんな簡単そうに言うけどどうやっていくのさ!? 僕パスポート持ってないよ?」

「アホかっ!? 世界が違うんだ、パスポートなんていらぬ。ねーさんの部屋の押入れから行けるよ」

マジかよ……、あの夢と希望とぬいぐるみと下着しか詰まっ
ないという悠さんの部屋の押し入れは、別世界につながっているの
か……

「で、どうする? ゆっくり考えてくれ、先輩もしかしたらねー
さんの記憶の中に閉じ込められてしまいかもしれないからな?」

「わかった、考えてみる」

「ワタシは一回帰ってねーさんの様子を見てくるけど、いいかな?」

「ああ、そうしてくれ。カップラーメンありがとう、おいしかった
よ」

奏音ちゃんは慎ましい胸を張り当り前だという表情を浮かべ「お
邪魔しました」と言って帰っていった。

第11話 作戦会議

さてどうする？ 僕は自分の部屋のベッドに寝っ転がりながら一人考えていた。

失敗すれば最悪、悠さんは記憶を失い、僕は悠さんの精神の中に閉じ込められる。僕の頭には悪いことばかり浮かぶ。そんな頭を叩いていると、窓が勝手に開いた。

ドスタツ！ 窓から入ってきたのは悠さんだった。

「よっ！ 空君。奏音から話は聞いたよ。ボク達本当に付き合ってたんだね」

「うん、記憶なくしても窓から入ってくるんだね悠さん……」

「いいじゃないか空君、近いんだからさ」

近いからって、さすがにそれは不法侵入とかじゃないのかな？

姉妹そろってやんちゃだな天野原さんちは。

「で、どうするの？」

いきなり真面目な声になった悠さんに僕は驚いた。いつも語尾に音符マークが付きそうなくらい楽しそうに話す悠さんだが、今だけは違う。これは彼女自身の問題でもあったのだった。

「どうすればいいと思う？」

「ごめんね空君、ボク本当に何も思い出せないんだ、でもね、何か大切な。本当に大切なもの、そこにあるはずのものが無いような感覚はあるんだ。それが多分君との記憶なんだよね……」

「悠さん……謝らないでよ、悠さんがもし力を使ってくれなかったら僕だけじゃなく他の人たちもただでは済まなかったと思うんだ。感謝してるよ、ありがとう」

「うん、ボク分かる気がするよ、君が好きだったって。だってかっこいいもん」

とんでもないことを普通に言う悠さん、僕は照れてしまう。

「あ、ありがとう……」

「ボク思い出したいな！ 君との記憶、君と過ごした思い出を！
だからさ、例えばボクの記憶がなくなつたとしてもいいからさ、思い出させてくれないかな？ 大丈夫、空君を閉じ込めたりはしないよ！」

そういつて微笑む悠さん、その笑顔に僕は、東雲空輝はどう応えたらいいのだろう。できるのか？ こんな僕に彼女の記憶を思い出させることが……。

思い出される彼女との記憶

電車の中でのいきなりの告白、度を越えたおいしさのスパゲッティー、今まで僕に向けてくれたすべての笑顔、言葉。彼女の、悠さんの記憶を取り戻す。それは僕にしかできないんだ！ 彼女にも思い出して欲しい、僕と過ごした時間を。たった三日間の記憶だけでも大切なのは時間じゃない、密度だ！ この三日間僕の生活はとても充実していた、きっと彼女もそうだったはずだ、そうであってほしい。

やってやろうじゃないか東雲空輝！ 今こそ男を見せる時だろ！
「分かつたよ、悠さん。思い出そう、君の僕との記憶を！ 僕頑張るからさ！」

「うん、信じてるよ、空君」
悠さんは目を閉じ顔を、唇を近づけてくる。え、嘘！？ 僕そういうの初めてなんだけど！ そのマシユマロが固そうに見えるほど柔らかそうな唇に僕も応えるように目をつむり

唇が重なるか寸前のところでドアが開く。

「兄貴〜？」

「せんぱーい！」

ドアからは美佳が、窓からは奏音ちゃんが飛び込んできた。

「あ、ごめん！ お取り込み中だった!?」

見事に八モる美佳と奏音ちゃん。こいつら双子か？

場所を移し東雲家一階、リビング。四人がけのテーブルにそれぞれ座り作戦会議(?)を行う。

僕の隣に悠さん、正面には奏音ちゃん、美佳は斜め前だ。

「おいバカッ」

「ちよつと奏音、年上にバカはよくないと思うよっ！」

悠さんの顔はまだ赤い、僕の顔もおそらくそうだろう。そんな状態でもちゃんと注意するお姉さんの悠さん。

「いや、あの、最後まで聞いてくれねーさん。バカッブルって言うとしたんだ」

ボンッ！ と、さらに赤くなる僕と悠さん。美佳はにやにやしなからイライラしている様子だった。器用だな美佳も。

「では気を取り直して、ねーさん達！ 決心はついた？」

「えええー………！？」

美佳がいきなり叫んだ。

「ちよつと待つてよ！ 兄さんまだ十七歳だよ！？ 親の同意があつてもまだ無理でしょ！」

「バカか！ 結婚じゃない！ 僕たちはまだ出会って三日しか経つてない！ 四日目突入したけど、今悠さんの記憶がないんだ！ だから三日で止まつてるのかな？ あれ？」

自分でも何言ってるかわからないくらい動揺している僕。あわあわ！

「そそそそうだよ美佳ちゃん！ けけけけ結婚はまだ早いよ！」

悠さんもあわあわする、可愛い！

「え？ 悠さんの記憶がないってどういうこと？ 私の名前は知ってるじゃん」

「僕に関しての記憶が一切ないんだ、マジで」

頷く奏音ちゃんと悠さん。

「え、どうして？」

例によつて一通り経緯を美佳に話終える。

「なるほど、モテ期到来だね。おに〜ちゃん！」

くそ！ くそ！ やめる！ おに〜ちゃんって呼ぶな！ 実の妹

に萌えてたまるか！ だがそんなことは決して声には出さない僕だ。

「モテ期なんて来ないよ僕にはね、テスト期間じゃあるまいし、そんなのないんじゃないの？」

「そう？ 空君かっこいいけどな」

そう言つてにこつと首を斜めにしながら言う悠さん、半端ない！

半端ない可愛さだ。ぱないの！

「おい、バカッブル！ 話が進まないんだけど……」

奏音ちゃんが呆れたように言う。

「よし、では会議を始めます！」

仕切るのは奏音ちゃんだ。て言うか前フリ長っ！！

「作戦決行は明日でいいよね？ なるべく早い方がいいと思う」

「うん」

偶然声がハモつた僕と悠さん。前方から「ちっ」と聞こえたが、

それは気のせいのはず。

「ねーさんの部屋の押入れからエルデに行く、その後サンストニフオン国立学院に行つて、それから先輩の仕事だ」

「その、サンストなんちゃらつて何？」

「ボク達の国だよ、エルデの中にも国があるの、ほらティエラの本とかフィンランドとかね」

なるほど、でもなんでフィンランド？ 北欧が好きなのかな？

「学院に言つて既に部屋とかは準備できてる、ちなみに私の通つてる学校だ」

「準備早いな奏音ちゃん、助かるよ」

「作戦は以上！ 何か質問は？」

は？ 作戦会議というよりも遠足の説明のような感じだったんだ

けど、一番大切な記憶の取り戻し方を聞いていない。

「ちよつと奏音ちゃ」

「次亜塩素酸！ 発言は挙手してからだ！」

「僕からはカルキ臭なんてしないだろうが！ それに次亜塩素酸は気体じゃないからな！ もう既に空気ですらなくなってるんじゃないかよ！ 僕は空輝だあ！」

「ではどうぞ」

何事もなかったかのようにスルーする奏音ちゃん。

「どうやって悠さんの記憶を取り戻すの？」

「前にも言っただじゃん先輩、お願いするの」

「誰に？」

「ねーさんのデバイスに」

「は？ お願いしたら返してくれるのかよ？」

「望みは薄いな、空気なだけに……」

「おまえ、ちよつといい加減に……」

奏音ちゃんは「ストップ、ストップ！」と言いながら手を前に出して静止を求めた。

「だから先輩、ワタシにも分からないんだよ！ 初めてだしさ、エルデ史上初なんだこんなことをするのは」

「マジっすか……」

「マジだ！ 大マジだ！ だいマジじゃないぞ？ なんだその大魔神は」

「奏音、一人で何言ってるの？」

しゅんと小さくなる奏音ちゃん。悠さんには弱いようだ。

「とととにかくだ！ ねーさんの精神世界に入ったらそこから先輩は一人だ、こちらからは何もできない。頑張ってくれ！」

奏音ちゃんは親指を突き立てキリツと綺麗な歯を見せる。

「あのさ！ ところで私は行けるの？ その、エルデに」

ほとんど空気と化していた美佳がここぞとばかりに口を開く。

「ちよつと今兄さんに失礼なこと言われた気がするんですけど」

ジト目で僕の方をみる

「いや、何のことだよ？　そ、それでどうなんだ奏音ちゃん？」

「うん、大変申し訳ないが美佳ちゃんはお留守番だ、さすがに二人もエルデには連れて行けない。本来は一人だつてダメなんだ、今回は特例」

美佳は一瞬残念そうな表情を見せたがすぐに笑顔で「じゃあ、しようがないね、頑張ってよ兄ちゃん」と言った。

その後、明日の集合時間などを決め、解散となった。

第12話 なぜだ、なぜ爆発しない？

そして夜

昼間奏音ちゃんに早く寝ておけ、と言われた僕はさっさと風呂を済ましベッドに入った。

妙に暖かいこのベッド。まあいいか、風呂上がりで体が温かいのだろう。

明日は悠さんの記憶を取り戻せるかそうでないかという重大な日だ、緊張してなかなか眠れない。こんなに緊張したのは高校受験の前日くらいか？ いやそんなもんじゃないだろう、おそらく生まれ初めてだ。とにかく寝よう、寝ることだけ考える！

すると窓が開いた。

知ってるぞこの展開、あれだよな、この後ドスタツって悠さんが奏音ちゃんが入ってくるんだよな？ 三・二・一はいっ！

ドスタツ！ 期待を裏切らない音に僕は安心した、寝がえりをうち、侵入者の顔を確認すると、そこには。

「お兄ちゃん！ 一緒に寝てあげる！」

美佳だった……、どうしてお前なんだ……

「なんでお前が悠さんの部屋から飛び込んでくるんだ？ と言おうとしたときにドアが開く。」

「空君！ 一緒に、その……。一緒にねてくりよしよい！」

最後の方は噛み噛みでなんて言ってるか分からなかったが、やはりキュートだ！ いや、プリティか？ ラブリーでもある、もういい、ハンパなく可愛い！

「なんで悠さんがドアから入ってくるのっ！？」

本来はドアから入ってくるのが普通のことなのだが、悠さんの場合はいつも窓からだったのつい叫んでしまった。

そして、布団が吹っ飛んだ！ 僕は今までそんなことあり得ないと思っていた、ただのつまらないギャグだと。だがそのあり得ない

ことが、今僕の目の前で起きたのだ。

それを起こした張本人、布団を中からガバツつと吹き飛ばしたの
は

「じゃっじゃーん！ 驚いたか先輩！ ワタシだ！ 奏音だ！」

「なんで布団の中にお前がいるんだああー！ー！ー！」

奏音ちゃんだった。

「先輩、遅いぞ！ 布団の中で死ぬかと思った！ 汗でびしょびし
よじゃないか！」

「なら入らなきゃいいだろう……」

「せんぱーい、お風呂貸してー」

「さっさと行って来い！」

奏音ちゃんは部屋を出て行った。

「それで、二人はどうするのさ？ 僕の部屋じゃ四人も寝れないし、
ていうか僕には女の子と寝る度胸なんてないからな！」

「え！ 兄さん私のこと女の子としてみてくれるの？」

「誰もそうはいつてないだろう！？ 美佳、お前はただの妹だ！」

「大丈夫だよ空君！ ほら詰めればこのベッド三人は入るから！」

奏音は床で寝かせるよっ！」

そういつて僕のベッドに入ってくる悠さん、シャンプーのいいに
おいがする……。

「ちよちよちよちよちよっ！ 無理無理無理！ ダメダメダメ！

僕が床で寝るから！」

「それじゃあ意味ないじゃん！ あ、でも空君のにおいが……」

ピシツつと僕の理性にひびの入る音がした。やめて！ そんな可愛
いこと言わないで！ それ以上僕の理性を傷つけないで！

結局どうなったかというと。

本来縦に使うはずのベッドを横に使い四人で川プラス一本の字で寝
ることになった。責めて端っこにしてください という僕の願いは
即座に却下され端から奏音ちゃん、僕、悠さん、美佳、となった。

「なんか修学旅行みたいだね」

楽しそうに言う悠さん。

「まくら投げかねーさん!? まくら投げをしようと、遠まわしに言っているのか!？」

「違うだろ、奏音ちゃん。ていうかそんなに枕ないし」

この狭い部屋の中でまくら投げなんてしたら大変なことになる。

「兄さんの部屋で寝るのなんて何年ぶりだろう? 小学校の時だったよね?」

「どうだったかな、覚えてない」

「兄さん冷たい」

そうこうするうちにみんな寝たようだ、僕を除いては。

例によって女の子と一緒に寝ることなんてできるはずのない僕は一階のソファで寝ることにした。みんなを起こさないようにベッドを抜けるのには苦労したが、何とか成功したのだ。

時間は午後十時、母だろうか? リビングの明かりは付いていて、テレビもついていた。

「お、空輝久しぶり」

ソファに座り猫を膝に乗せ僕に話しかけてきたのは父さんだった。

「あ、父さん。ホント久しぶりだね、お帰り」

「ああただいま。そういえばお前、彼女ができたそうじゃないか、まさかあの空輝に彼女がなあ……」

猫をいじりながら感慨深そうに言う父さん。

「はっはっはすごいだろ! めっっちゃ可愛いんだぞ! ところでヒメルは元気だった?」

ヒメルと言うのは今、父さんになでられ気持ちよさそうにしていく猫の名前である。

昔川で流されているのを見つけ、助けてそのまま飼うことになった、今ではもう立派なおじいちゃん猫だ。僕の猫派の一因も彼にある。最近父さんが仕事に連れて行っていたため家にいなかった。

「ああ、元気だったぞ。ほら」

そういつて僕に渡す。

「にゃあー」

まったくヒメルは可愛いぜ！

「空くーん？」

！？まさか、まさかのまさか。悠さんが降りて来てしまった……。目をこすりながら眠そうにしている。

「空輝、お前、まさか。彼女を家に連れ込んであんなことやこんなことを！？」

「待て待て待て待て！確かに僕も父さんの立場だったら同じことを考えた！けどな父さん、思い出せ！僕の性格からしてそんなことできると思うか？」

「無理だ」

即答だった。それはそれで悲しい……

「そうかそうか、まあ理由はいい。はじめまして、空輝の父です」
悠さんは一気に目が覚めたようだ。

「うふえあふふあ！？ボボボボク、わたしはその、空君とおおお付き合っているらしい天野原悠です！よろしくお願いしましゅー！」

「空輝にはもつたいたいなくらい可愛いじゃないか。ところで『らしい』とはどういうことかな？」

父さんはそれを聞き逃さなかった。さて、どう説明したものか……。悠さんを見ると口を押さえている。やっちゃった！の構えだ。

「あの、いやあ空君すつごいかっこいいから、いまだに信じられないというか、なんとというか……」

悠さんナイスフォロー！でもそれはほめすぎ！頬が紅潮するのが自分でも分かる。

「そうか？ そんな空輝よりこの私を」

「何言っただ父さん、ほら母さんがキッチンから包丁持って睨んでるぞ」

「なーんて言っってみたりしてみたりして……」

弱い！ 弱いぞ父さん。だが悠さんに手を出されても困るので助かった。

「あれ？ その猫？ なんでこんなところに？ でもこの雲みたいな模様、ヒメルだよな？」

え？ どうして彼女がヒメルのことを知っている？ 僕が助けた猫で最近家はいなかった。悠さんとは初対面のはずだ。なのに何故？ 確かにヒメルには雲のような模様がある。白と黒の猫で白い毛の部分が綿のような雲に見えるのだ。

「気のせいじゃないかな？ だって悠さんヒメルをみるの初めてだよ？ それに白と黒の猫なんていっぱいいるし」

「そう……、そうだよな。うん気のせいかも」

この時の僕は大切なことをスルーしてしまってた。『彼女がヒメルの名前を知っている』ということ。

結局僕は悠さんに捕まり、ソファで寝る計画は失敗に終わった。だが僕は負けなかった、悠さんがもう一度寝るのを待ち、色々あって疲れたためにやってくる睡魔に打ち勝ち、ベッドを抜け出して美佳の部屋で寝た。選択肢は他にもあった。だが疲れを取ることを最優先にしたのだ。妹のベッドで寝るとかこのシスコンだよ……。背に腹は代えられぬ、いいだろう僕は変態である！ 認めようじゃないか。そんなことより明日は決戦だ、絶対に悠さんの記憶を取り戻してやる！ 本当に疲れていたようでベッド（美佳の）に入ってからは一瞬で眠りに落ちた。

朝、ケータイのアラームがいつもより早い時間に鳴った

僕は美佳のベッドで寝ていたため他人に見つかるのは避けたという事で、早めに設定しておいたのだ。

「うわ、やっぱりまだ眠いや……」

なんて言いながら身体を起こそうとする……が、上がらない。上

がらない？ お腹の辺りには何とも言えない違和感。布団をどかし、違和感正体を確認すると、そこには僕の腹をがっしりとホールドした悠さんがいた。

「はっはっは、なーんだまだ夢の中か。まったく、ちゃんと起こしてくれよケータイ君」

僕が『ここはまだ夢のなか説』を唱えていると、悠が眠たそうな目を開け上目遣いで口を開いた

「ふえ？ あ、空君おはよ〜」

「空君、起きるんだ！ 今寝たら死んでしまっつー！」
その言葉に目を覚ます。

「あ、起きた？ 二度寝は危ないよ、遅刻の危機だよ？」

僕に二度寝した記憶はない、おそらくこの数秒間、悠さんのあまりの可愛さに気を失ってしまったのだろう。危なかった、本当に死んでしまうところだった。

「おはよう……って言うかなんで僕と一緒に悠さんが寝てるのさっ！」

「だってボク達付き合ってるんでしょ……？ って空君！？ 二度寝はダメだよっ、乙女の顔もチョココロネだよっ！」

おっと危ない、また気絶しかけた……、ところで乙女の顔もチョココロネ？ なんだそれ聞いたことない。

「いや悠さん、乙女の顔がチョココロネじゃ色々と困っちゃうですよっ……」

特に、どっちから食べていいかわからなくて。

「あはは、空君面白い事を言うね。それを言うなら『仏の顔も二度まで』だよ」

にっこり笑って言う悠さん。いつもなら『お前が言ったんだろっがっ！』と、突っ込むところだが。

「可愛いから許すっ」

「ボクがいったんだろっがっ！」

！？ 突っ込まれなかった悠さんは自分で自分に突っ込むという暴拳に打って出た。僕以外にこれをする人に会ったのは初めてだ。てつきり僕の専売特許かと……。

「こんなところ（美佳の部屋）にいつまでもいるわけにはいかない
ので、僕は顔を洗いに洗面所へと向かおうとする。」

「あれ、空君。どこ行くの？」

「顔洗ったり歯を磨いたりしてくるよ」

「ああ、そうだね。じゃあボクも一度家に戻るとするよ」
僕についてくる悠さん。

「あれ？ 僕の部屋は二階だよ？ 洗面所は一階だからこっちじゃないよ」

「いやいや空君。まるでボクが空君の部屋から出入りしてるみたい
な言い方じゃないか。思い出してよ、昨日はボク玄関からお邪魔し
たんだよ？」

「あ、なるほど。いつもの癖でつい」

悠さんを送りだし洗面所へと向かう。が、洗面所からは美佳と奏
音ちゃんの声が聞こえてきた。

「ああん、私のくぱあって開いちゃってる」

「ホントだ、ところで美佳ちゃんの綺麗なピンク色だね」

「そうかな？」

「ワタシのよく血が出ちゃってさ、優しくしないとなんだ」

「あ、じゃあ私がしてあげようか？」

「ええ！ 恥ずかしいよ……」

僕は取り乱す、あいつら洗面所で朝っぱらからナニしてる？ 僕
の頭の中ではとんでもないことが起きていた。

「お前らナニしてるっ！？」

僕が洗面所の扉をガラツと開き叫ぶと

「「歯磨きだけど？」」

「……………」

二人で仲よく歯磨きをしていた。

「え、じゃあ何が開いちゃったって?」

「ほら兄ちゃん、私の歯ブラシこんなに開いちゃってる。新しいの買わないとだね」

「綺麗なピンク色って?」

「ほら美佳ちゃんのはぐき綺麗なピンク色だろ?」

「あ、ああそうだね……」

「ところで兄ちゃん?」

「なんでしよう妹ちゃん?」

「ナニ想像してたの?」

美佳がジト目で僕の方をみる。

「やめて! ごめんなさい! そんな目で僕を見ないでっ!」

色々あつたが無事身支度は整えられた。今日から春休みなので学校には行かない。もっと大切な、悠さんの記憶を取り戻しにエルデに行くのだ。

朝食を食べ終え自分の部屋でゴロゴロしていると、ドアがノックされる。

「どうぞー」

「お邪魔するぞ、先輩」

美佳とは違い、ドアはちゃんとノックする奏音ちゃん。いい子だ。

「どうしたの、奏音ちゃん」

「いや、緊張してガチガチになっていると思ったが、その様子なら大丈夫そうだなっ!」

心配して見に来てくれたらしい。

「そうでもないよ、かなり緊張してる。でも、もう覚悟は出来てるさ」

「そうか、その意気だ。ちなみにエルデに行くにあたって絶対に守らなくちゃいけない事があるんだ」

「な、なにかな……?」

『絶対に』ということと重苦しい空気が場を支配する。

そして奏音ちゃんの口がゆっくりと開かれる。

「おやつは三百十五円までだ……」

「そんなことかよっ！ 今までの緊張どうしてくれるんだよ！ 緊張して損したよっ！ って言うかしっかり消費税の分は足されてるんだね！ 優しい限りだよ！ でも、もしかしたらそのうち税率上がっちゃうかもだよっ」

「その時はその時だ」

「ああ、臨機応変に対応ねって違うんだよ、そんなことはどうだっていいんだよ、なんかもつとないのかよ！ ほら、例えば危険物の持ち込みはダメとかさ！」

「ダイナマイト以上に危険な先輩が何言ってるんだか」
「やれやれといった表情をする奏音ちゃん。

「僕はそんなに危険じゃないからなっ！？」

「水素爆発って結構危ないらしいぞ？」

「訂正、僕は今すぐにも爆発しそうなだけど？」

「せせせせ、先輩！ 顔とセリフがあってないぞ！ そんな眩しい笑顔で言う言葉じゃないぞっ！」

「そろそろ君にも僕が空気でない、身体に教える必要があるし、そろそろだな」

手をわきわきしながら奏音ちゃんに歩み寄る。

「ふわあ〜、変態だあ〜！」

奏音ちゃんの細い綺麗な腕を掴んだところで『ピロピロリン』と着信音。

「あ、メールだ。ちょっと失礼」

奏音ちゃんはポケットからケータイを取り出し内容を確認する。

「まったく、運のいいやつめ」

「先輩、準備が出来たらしい。ねーさんの部屋に行くぞ」

「あ、ちよと待ってくれる？ 父さん達にちよつと」

「あ、ああそうだな。多少の危険はあるし、ちゃんと別れは告げた方がいいかもしれない」

一階リビングに降りるとちょうど二人ともいた。

「あの、母、父さん」

僕の声に二人ともこちらを向く。

「今日から何日か分らないんだけど、ちよつと家を空ける」

「何言ってるの空輝？ 寝言は寝て言うものよ」

「いや、あの僕は真面目に……」

「おい空輝、それは……必要なことなんだよな？」

父さんが僕の意図を察したのか真剣に尋ねる

「うん、かなり大切」

「なら行ってこい、護ってやるんだぞ」

「ちよつと父さん？」という母をなだめ僕に行ってこいと言ってくれた。

僕は深々と頭を下げ「行ってきます」と家を出た。

ドアをノックし悠さんの部屋に入れてもらう。家には「鍵は開いてるから勝手に上がってくれ」ということで上がらせて頂いたわけだ。無用心過ぎやしないか？

「お、先輩。思ったより早かったな」

「ああ、父さんが分かってくれたようでき、ところで一ついいかな？」

「何だ？」

「何故美佳がいる、行けないんだろ？」

美佳は悠さんのベッドに座っていた。その神聖な領域から今すぐ降りろ。

「いやいや、私は見送りにねー」

「と、いうわけだ」

「ならいいけど……。悠さん待たせてごめんね」と言いながら、悠さんの方を見ると。昨日奏音ちゃんが着ていたのと同じ制服を着ていた。

「うん、全然待つてないから大丈夫だよ。その、あんまりじろじろ見られると恥ずかしいんだけどなあ」

つい凝視してしまっていたようだ。

「あっ、ごめん。あんまり似合ってるもんだから」

その制服は彼女に似合い過ぎていた。ベージュ色を基調としたブレザータイプの上着に、赤と黒のチェックのスカート。悠さんは頬を染めながら

「まったく、褒めるの上手いなだね……」

美佳と奏音ちゃんがジト目で僕たちを見ているが問題ない。

「ごほん」と奏音ちゃんが咳ばらいをし

「さて、そろそろ行くとするか」

「よし、いざ決戦の地へ！」

「頑張つてね兄ちゃん」

「じゃあ先輩から行ってくれ」と言つて奏音ちゃんが押し入れを開くと目映い白い光が溢れ出し、部屋中が真っ白に見える。

「うわっ眩しっ、ていうか僕からかよっ」

「大丈夫、すぐに行くから」そういつて悠さんが僕の背中を押す。

悠さんに押されては仕方ない、僕は再度覚悟を決め、光の中へと踏み出した

第13話 異世界は案外近いところに

光を抜けると寮の一室のような、しかし寮にしては広く、整理された部屋に出た。

でもドアみたいな押入れだなと驚いたが、僕をそれ以上に驚かせる光景がそこには広がっていた。

艶やかでさらっとした白銀の髪は腰まで届いていて、それをツースイドアップにしている、肌は雪のように白く、眼は少しつりあがつていて瞳はサファイアのように青く透き通っている。まるで精巧に作られた人形のような顔立ちをしていて『可愛い』というよりは『美しい』という印象を受けた。そして彼女は悠さんにはない『あるもの』を持つていた。『胸』である。僕はあまり大きさを気にしないが、彼女の胸部には女性の最大の魅力の中の一つであり、男のロマンである双丘があった。悠さんの胸をみかんと例えるならば、彼女のそれはりんごといったところだろう。

そろそろお気づきではないだろうか、何故僕がここまで胸の大きさを正確に表せているかということに。

僕がネコ型ロボットの秘密道具よりも驚いたこと。

彼女はお着替え中で下着姿だったのだ。上下ともに白と水色の縞模様……。

「……………」

「……………え？」

徐々に彼女の顔が赤くなっていき 叫ぼうとしたのだろう。だが彼女は叫ぶことができなかった。

「どーんっ！ 先輩、立ち止まってたら危ないぞ、後ろから人出てくるんだから！」

押入れから出てきた奏音ちゃんに僕が突き飛ばされた。不意の突撃に僕はよろけ、前にいた銀髪美少女（下着姿）にぶつかり、彼女を後ろにあったベッドに押し倒すこととなった。

「うわっ」

「きゃっ！」

……吐息がかかる距離。目の前には綺麗な瞳、視線を少し下げるとしつかりと谷間ができています。

一瞬の沈黙の後

「あの、その……見かけによらず、大胆なんですね……恥ずかしいです」

銀髪美少女はジト目で僕をみながら、ハーブの音色のような声で言った。

「いや、今成り行き分かってたよねっ!？」

「私が着替えていたところに貴方があらわれ、押し倒されました。

恥ずかしいです」

「大事な部分が抜けているっ!？」

「間違ってますか？ とりあえずそこをどい」

「ちよつと空君！ ルーナちゃんにナニしてるのさっ!？」

奏音ちゃんのとから来たであろう悠さんがあわてた声で言った

「ルーナちゃん？」

僕は銀髪美少女から飛び退いた。

「自己紹介はひとまず置いておいて、先に着替えたらどうだろう先輩？」

「え？ 僕は着替える必要は」

「ああと、失礼。彼女もワタシの先輩なんだ」

僕は後ろを向き着替え終わるのを待った。

「あの、もういいですよ」

悠さんと奏音ちゃんと同じ制服を着たルーナと呼ばれていた少女が言った。

「あ、あの。さっきはごめん……」

「気にしないでください、私は大丈夫です。勘違いしててくださいいよ？ 私すっごい恥ずかしかったんですからね！ 大丈夫って言うのも所詮は建前ですっ!」

「建前かよっ！」

初対面なのに突っ込んでしまった。

「えーとね、空君。こちらはボクのクラスメイト、ルーナちゃんだよっ」

「はじめまして、ルーナ・ソネモントです。気軽にルーナって呼んでください」

「こここちらこそはじめまして！ 僕は東雲空輝っていいいます。よろしく」

握手をすると、彼女の手がとてもきれいだということが分かった。見た目だけでなくさわり心地も最高だ！ って僕は何言ってるんだ……。

「はい、握手はそこまで！ 空君ちょっと変なこと考えてなかった？」

むつとしながら悠さんが上目遣いで聞いてきた。見事に見抜かれていた。

「いやいや、ぼ、僕は悠さんラブだよ！」

「ふえっ！ そ、そんな！ ふえっ！」

悠さんが真っ赤になった。

「なるほど、貴方があの空輝さんでしたか」

「え、僕のこと知ってるの？」

「ええ、ここは学院の寮で私と悠ちゃんの部屋なんですけど、最近悠ちゃんずっと貴方のこと見ていましたし、口を開くたびに空君、空君って」

「え、そうなの！？」

僕が聞きたいぐらいだったが、この質問をルーナにしたのは悠さんだった。

「そういえば悠ちゃん記憶が一部ないんですね、奏音ちゃんから聞きました」

「うん、ないんだよ」

しゅんとする悠さん

「ところで僕を見てたってどうやって？」

たしかに悠さんは僕に初めて電車会った時「ストーカー行為をしていた」と言っていたがこのことだろうか。

「ティエラ空輝さんが知らないのは無理ないですよ、お見せします。勘違いしてもいいですよ？」

「つまり本当は見せたくないってこと？」

「見せたくて仕方ありません」

「何その露出狂みたいな発言!？」

ルーナはパソコンのようなものを出し、おなじみのゲームマットを開いた。

「これです」

ドヤ顔で言うルーナ。

「いやいやっ！ これはえーと、ティエラ？ にもあるし、これ人は写ってても顔が判断できない程度でしょ？」

「これにクラフトで」

ルーナの指の付け根が光った。正確に言うと、彼女の指輪が光った。

「ルーナのデバイスは指輪の形なんだ」

一瞬悠さんがこつちを見た気がしたが、気のせいだろう。

「はい、そうですね、よくデバイスのことをご存知で。最近はやリングとかピアスとか、何でもあります」

「そうなんだ……」

「えーと、奏音ちゃん私はティエラのことあまり知らないから」

「ああ、そうだな。ワタシに任せてくださいっ」

そういつてパソコンを受け取る奏音ちゃん、珍しく敬語を使っている。

「とりあえず、美佳ちゃんでもいいかな、座標は東雲家……、よし」
そういつて僕にパソコンを向けると。

美佳が冷蔵庫に置いてあった僕のシュークリームを食べていた。

「あの野郎！ 僕のシュークリーム!」

「シユークルートですか？」

「いや、キャベツを薄塩で漬けて自然発酵させた酸味のある食べ物じゃないから！」

「辞書みたいな説明ですね、ちなみにドイツ語で言うと『ザウアークラウト』です、ちよつと待ってて下さい」

「今はいらなからねっ！？ ていうかあるの！？」

「勘違いしているようですね、悠ちゃんにあげるんです」

悠さんは困った顔で「え、ボクもいらなよ……」

「そう、おいしいのに……」

しゅんとするルーナだった。

「と、まあこんな感じでエルデのパソコンは便利なんだ」

「超便利って、法律に触れそうだな！」

「ボクはこんなことしてたのか、ごめんね空君」

ちつとも反省の色は見えないが、可愛いから許す！ 可愛いは正義！

「可愛いから許す！」

「あの、ところでそろそろ学校行かないとじゃないかしら、早い方がいいって連絡だったけど」

ルーナが言う。

「そうだねっ、じゃあ行くっか空君！」

「ちよつと待って！ 僕、学校入れるの？」

悠さんが奏音ちゃんの方をみる視線で聞いている。

「だ、大丈夫……じゃないかな？」

奏音ちゃんは作り笑いを浮かべている。

「大丈夫ですよ、こんなこともあるっかと」

「あるっかと？」

「吉野君に言っておく予定を立てました」

「あの、えーと。その吉野君が誰だかは知らないけど、予定を立てただけ？ 実行してないような言い方だったけど」

はっ、となるルーナ。にこりと笑った後

「しまったああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

僕の中で一瞬定まったルーナのキャラが崩壊した瞬間だった。

すると悠さんが僕の側に来て、顔を近付けてくる。そして耳元で「ルーナちゃんは基本的に落ち着いた子なんだけど、たまに暴走しちゃうんだ。まあそこがいいところでもあるんだけどね」

本人に聞こえないための配慮なのだろうが、僕はそれどころではなかった。

耳にかかる悠さんの吐息、微かにかおる甘い匂い。僕の脳はオーバーヒート寸前だった。

「そそそ、そうなんだっ！」

悠さんは僕の慌てっぷりを見て首を傾げる

「どうしたの？ 顔真っ赤だよ」

「いや、なんでもないよっ！ ところでどうする？ 僕学校入れないんじゃない」

「んー、そうだね。生徒会長にでも言ってみよっか」

おもむろにケータイを出しボタンを操作する

「あ、かいちよーさんですか？ 天野原です、悠です。お願いがあるんだけどいいかなー？」

なんか、やたらフレンドリーな話し方だが、生徒会長ってどんな人なんだろう。僕の知ってる生徒会長は、高校生とは思えないほど子供だったり、羽が生えたり、下ネタ好きの変態だったりする、全部アニメだが……、さすがにそれはないだろう。

「はい、じゃあまたあとでー」

ケータイを閉じる悠さん

「何とかしてくれるって」

「へえ、いい人そうだね、生徒会長」

「許可下りたら連絡するからそれまで、ぶらじゃーしてきなよって言ってくれた」

「前言撤回、なんだその変態」

おそらくぶらぶらということを言いたかったんだろう、悠さんに

なんてこと言わせるんだ、変態生徒会長め

「うん？ けっこう面白い子だよ」

「ところでさ、学校行かなくていいの？」

「うん、今はこっちも春休みだから行っても行かなくてもいいんだよ」

「へえ、まあわかった事にしておくよ」

細かいことは気にしないことにしよう、なんせ異世界なのだから。なかなか会話に入れずにうずうずしていた奏音ちゃんがここぞとばかりに割って入る

「質問かつ！？ 質問ならワタシが受け付けるぞっ！」

「ところで悠さん、これからどうしようか、少し時間あるんでしょ？」

「！？ スルーっ！？ 今ワタシスルーされたっ？ 空気先輩のくせにワタシをスルーしたのか！ 空気にスルーされたワタシはなんなんだっ！？ どんな存在に成り下がるんだっ」

奏音ちゃんが衝撃を受けて騒いでる

ルーナがなだめるように、奏音ちゃんの肩に腕をぽんとおき

「重量だな……」

「グラビティ……ッ！」

やたらとテンションの高いグラビティ、もとい奏音ちゃんだ。

「そうだねー、じゃあエルデの街を案内してあげる！ デートだよ初……、じゃないんだよね、ごめん……」

「いやいや、謝ることないよ！ 嬉しいな！ 楽しみだよっ！」

悠さんは笑顔浮かべ「じゃあ行こうか」と立ち上がった。

「私達も行っているのかな、奏音ちゃん」

「ダメって言われてもついて行きますけどねっ！」

「うん、みんなで行こうよ」

ちなみに悠さんが電話をし始めたあたりからずっと、ルーナは黙々とシュークルートを食べていた。なんでそんなもんが冷蔵庫に入ってるんだよ……。

第13話 異世界は案外近いところに（後書き）

設定裏話 ルーナ・ソネモント ソネ：Sonne ドイツ語で
太陽 本来の読み方はゾネですが、そこは御愛嬌 モント：Mo
nd ドイツ語で月

第14話 寮から街へ

部屋を出ると、そこはヨーロッパのゴシック様式の大聖堂を彷彿とさせる廊下だった。

窓にはステンドグラス、そこからは光が差し込んでいて、なんとも神聖な雰囲気、壁にはランプも並べられている。休日の午前ということもあってか、歩いている人は少ない。その中で確認できる髪の色は黒、赤、茶色、明らかに今いる場所が日本でないとわかる。

悠さんについて行くと広い空間に出た。エントランスホールといったところだろうか。

天井は高く、大きなシャンデリアがぶら下がっていて、ところどころに彫刻が彫られている。どうやらここは二階らしい。なぜなら中央には城にあるような、やたらと広い階段があり、その両端には明らかに不釣り合いな近代技術、エスカレーターがついているからだ。

コツコツと歩くたびに響く大理石が高級感を出している。

海外旅行に来たような気分だ。考えたらここは寮なんだよな、寮でこの規模となると学校はこれ以上だと予想される。

無駄に大きい扉をくぐり外にでると 庭が広がっていた

中央にはこれまた豪華な噴水、その向こうにはよく整理された林が広がっていて、それを貫くようにレンガの道が通っている、そこが外に通じているようだ。

「どこの豪邸だよ……」

「はっはっは、サンストニフォンの技術はエルデーなんだぞっ！」

慎ましい胸を張って威張る奏音ちゃん

「そうだね、私も初めて来たときは驚きました。私の国には、これほどのものはありませんでしたから」

「私の国？ ルーナは外人さんなの？」

「はい、私はサンストニフォンに留学に来ているんですよ、私の国

はとにかく雪が綺麗です」

胸を張るルーナ、サンストニフォンは技術で勝っていても、バストは完敗だった。

「サンストニフォンに銀色の髪を持つ人はいないんだよ、綺麗だよねルーナちゃんの髪」

ルーナのツーサイドアップがぴよこんと跳ね

「ほ、褒めても涙しか出ないんだからっ！」

「どんだけ嬉しいんだよっ！」

僕のとりの奏音ちゃんは金髪のサイドポニーをブンブンとプロペラよろしく振り回している。そして視線で悠さんに「どう？ ワタシの金髪はどう？」と訊いているようだ。

悠さんはそれを完璧にスルーして僕の方を向く

「空君、どこか行きたいところある？」

「グラビティ……！」

「いや、任せるよ。そもそも僕はなにがあるかもわからないしね」

「あ、そっか。そうだったね」

奏音ちゃんは地面に手を付き「ねーさんにまで……」と落ち込んでいた。

ルーナはその肩に手を置き

「大丈夫、奏音ちゃんの金髪も黄金虫みたいに綺麗だよ！」

「うう、ルーナ先輩。誉めてくれるのはとっても嬉しいんだけど、ワタシの髪を虫に例えないで欲しい……」

素直に喜べない奏音ちゃんだった。

門を出る前に、部屋を出てからずっと気になっていた事を聞いてみる

「あのさ悠さん、なんでこんなに晴れてるのに三人とも傘を持っているの？」

寮の部屋をでるとき、みんな当たり前のように傘を持って出たのだ。外は雨が降っているのかな？ と思ったが、そんなことはなく、雲一つない青空が広がっていた。

「ん？ あー傘ね、すぐわかるよ」

弾むように言う悠さん。すぐわかるのか……

門を出て僕は驚いた、かなり驚いた。門の外は一面湖が広がっていて、向かいの岸までは一キロから二キロくらいあるようにみえる。

「これって、どういうこと？」

「あつちに見えるのが街だぞ」

そう言っ指をさす奏音ちゃん

「ああ、船でも来るのか」

ルーナがこいつは何を言っているんだ？ といった表情で

「船なんて来ないですよ」

「なるほど、泳いで行くのか」

「はい、そうです。水着は持ってきましたか？」

「んなわけあるかっ！ 今のはボケだよ、突っ込んでよ！ ボケを空振るほど悲しいことはないよ！」

「んなわけあるかっ！」

「遅いよっ！ 明らか遅いよっ！ 駅の改札に着いてから財布忘れたことに気付くくらい遅いよっ！」

ルーナは「ぷっ」と笑い

「それは遅いですね、ドジっ子可愛いです」

「お前だよっ！」

「たしかに私は可愛いかもしれないですが、ドジっ子ではありません。ツンデレですっ」

「ツンデレは自分でツンデレって言わないからねっ！」

「可愛いって事は否定しないんですね」

「……可愛いってよりは綺麗って感じかな」

「恥ずかしい事をさらっと言いますね、ありがとございます」

ルーナは頬を染めながら言った。

「さて、ワタシの出番だぞ！ ついにワタシの出番だぞ！ 空輝先

輩、この湖はな、飛んで渡るんだ！」

「は？ 何言ってるの奏音ちゃん、ついに頭壊れたか？」

「ごんの野郎！ いい加減にしないとワタシもキレるぞ！」

「ごめんごめん、悪かったよ。それで飛んで渡るってどういうこと？」

「ここでこれを使うんだ」

そういつて傘を見せる奏音ちゃん。傘を何に使うのだろう？

「傘だね」

「先輩には言つてなかったが、ティエラにいるときと、エルデにいるときでは、使えるクラフトの出力が違うんだ。つまり、ティエラよりもすっごいことができるのさ！」

「まさか、傘で飛ぶの？」

今の説明から至った結論を言ってみる。

「その通りだ。ちなみに、なんでティエラでは制限がかけられるかというと。昔モーセって人がティエラで海を割ったんだとさ、エルデはできるだけティエラに干渉しないようにしてるのに、それはさすがにまずいでしょ？ だからそれ以来生命の危機でもない限りはあんまり派手なこととはできないようになってるんだ」

「なるほどな。って、モーセってエルデの人だったの！？ あれだよね、シナイ山でヤハウエと契約を結んだっていわれてるあのんだよね？」

「おお、よく知ってるな先輩」

まさか過ぎた、モーセが異世界人だったなんて。

「さてと、じゃあ行こうか」

悠さんが傘を開く、それにつられてルーナと奏音ちゃんも開く。

「ちよつと、僕は！？」

「ボクと一緒に行こう、二人乗り初めて〜」

「え、二人乗りって、自転車みたいな気軽さだけど、大丈夫なの？ 傘でしょ、途中で落ちたりしないの？」

「大丈夫だよ、空君はボクが護るもの」

「その言葉は凄いい嬉しんだけどさ、どっかで聞いたことある気がするよ！」

「笑えばいいと思うよ?」

「あははって、それちょっと違うけど多分僕のセリフ!」

「じゃあ掴まって」

僕は悠さんの傘の柄に掴まる、悠さんはその上から握るので僕の手と重なって、とてもドキドキしてしまう。

「せーのっ、テイクアウト!」

「お持ち帰りじゃなくてテイクオフだからねって、うわあああ〜」

気球のように、だが気球には出せないような速度で上昇する傘。足場はないのにどうしてか、柄は軽く握っているだけで大丈夫なようだ、重力をほとんど感じない。悠さんの手が僕の手を優しく握ってくれている。

「大丈夫?」

「う、うん。すごいね! ホントに飛んだよ!」

「まあエルデでは当たり前のことなんだけどね、でも空君が喜んでくれて嬉しいよ」

にこつと笑う悠さん。あ、今気が付いた。これ相合傘だ!

傘は上昇をやめ街へと向かう。だいたい上空百メートルといったところだろうか、けっこう高い。

「こつこつというのって跨いで飛ぶものだと思ってたけど、違うんだね。なんか歩いてるみたい」

「えへへ、そうだね。ティエラでは箒に跨いで飛んでる人たちがいるもんね」

「フィクションでしょ!?!」

「でも、それがイメージできるってことは、昔はそうやって飛んでたんじゃないかな?」

「ど、どうだろうね」

「あ、これ相合傘だね空君! 空を飛びながら相合傘ってなんか口マンチックだね」

「そ、そうだね……」

「空君顔赤いよ、大丈夫？ 高いの怖い？」

「いや、違うよ！ その、悠さんがこんなに近いんだもん……」
いきなり高度が下がる、まるでフリーフォール。

「うわああ！」

「ごごごごめん！ ちょっと空君、恥ずかしいこと言わないでよ、
て、照れるじゃないか……」

どうやら操作を誤ったようだ、どう操作をしているのかは分からないが、迂闊に変なことを言うのはやめよう。命にかかわる。

少し後ろをついて来てるルーナと奏音ちゃん

「奏音ちゃん、なんか見てて恥ずかしくなってくるんだけど」

「あ、奇遇ですね。ワタシもです」

傘のくせにかなりスピードが出ていたようで、五分くらいで街に着いた。

第15話 エルデの街並み

たしかにそこは街だった。池袋や新宿のような、いや、ロンドンといったほうが近いかもしれない。とりあえず、そういった繁華街であることは確かだ。立ち並ぶビルは、やたらと綺麗で建てたばかりのよう。地面には赤やベージュ色のレンガが敷き詰められていて端には木が一例に植えられている。ただ新宿やロンドンと明らかに違うところは車道がなく、車が一台も見当たらないところだ。

おそらく傘で事足りるのだろう、その証拠に空には人が歩いていて、飛んでいると表現したほうがいいかもしれないが、どちらでもあまり変わらないだろう。服装はまちまちだ、スーツの人もいれば制服の人、私服の人もいる。ここはテイエラと同じだ。

「さてと、まずはゲームセンターでも行く？」
どこへ行くでもなくぶらぶらと歩いていると、悠さんがそう言った。

「ゲーセンか、エルデのゲーム興味あ」

僕の言葉を遮り、奏音ちゃんが割って入る

「ダメだ！　ねーさんがゲーセンに行くと余計な荷物が増える、邪魔だっ！」

「たしかに悠ちゃん無双が始まってしまいますね」

悠さんはしょぼんとする

「ほら、またの機会に行こうよ」

「……うん、そうだね　じゃあ他にどこか行くところある？」

「ワタシ、デバイス屋さんに行きたい！」

「何それっ！？　デバイスって売ってるの？」

「うむ、クラフトが使えるデバイスは生まれたときから持っているんだけど、最近はクラフトの使えない補助デバイスがあるんだよ、もちろん意思はない」

「ケータイに例えると、アプリみたいなものだね、デバイスで電話

とか、メールとかができるようになるんだよ」

と悠さんが補足説明してくれる、僕の知識と今言われたことを照合し、結論を導き出す。

「賢い電話みたいだねっ！」

「たしかに一つの媒体としても使えるから、クラフトを使えなくてもいいなら先輩でも持てるぞ、女の子にモテるかは別として……ぶっ！」

「一言多いからね奏音ちゃん」

「そうですね。悠ちゃんを攻略したからって、私達まで落とそうとは考えないことです、ギャルゲの主人公じゃあるまいし、痛い目見ますよ」

「そんなことは断じてしないからなっ！僕は悠さん一筋だっ！」

「言い切ったな」

「言い切りましたね」

「ふわぁ、言い切られちゃったよ！」

「もちろん言い切るとも！」

僕は自信を持っていた、悠さん以上に可愛い子はいない、絶対に浮気なんて考えられない。だがその自信は一瞬にして打ち砕かれた。「ではテスト」と言っていていきなりルーナは自分のスカートを上げ始め、下着が見える寸前のところで止めた。僕の目は彼女の雪のように白い綺麗な太ももに釘付けになってしまった。

「……なっ」「……」

「がつつり見てましたね空輝さん、不合格です」

「がつつり見てたな先輩」

「がつつり見ちゃうんだね空君」

ジト目で僕を見る三人

「いいものはいっ！」

確かに悠さんは僕の知っている中で最も可愛く、そして理想の女の子である、だが、男という生き物は目の前の欲望に恐ろしく弱い生き物なのだ。これは浮気とは言わない、だからと言って代わりの

言葉は見つからないのだが……。

その後僕は悠さんに一発いたされたが、甘んじて受けよう。

「さあ、着いたぞっ」

ビルの壁に設置されている看板には『オンザマップ』と書いてある、似たような店を知っているがここは異世界、気のせいということにしておこう。

中に入ると、まさに電気屋さんだった。電気で動いているのかは怪しいところだが、見た目は電気屋さんで間違いないだろう。画面レスなパソコンや画面レスなテレビ、おまけに傘まで置いてある

「悠さん、これ画面ないよ？ テレビ見れないじゃん」

「ん、これはね。ここを押すと……、ほら」

悠さんがボタンを押すと、SF映画でしか見たことのないような光の画面が展開される、画質もきれいでまるでそこにそれがあるかのようなようだ。

「すごいね！ 映画の中みたい！」

「たしかにこういうのはテイエラにないよね」

近くに展示されている傘をみると『早い、疲れない、場所を取らない。の三拍子、長距離飛行ならこれ！』と書いてあった。牛井みたいだな。

「これすごいんだよ、最近発売されたんだけど、今までののは、あんまり長く飛んできると体力が持たなくてさ、遠くに行くのに時間がかかったんだけど、これなら一つ飛びだよ」

「へえ、ところでエルデには飛行機とか、自動車とかないの？」

「うーん、あるにはあるんだけど、環境にも悪いしね、最近では専ら傘かなあ」

「へえ、環境に優しいんだね」

悠さんは僕の言葉に黙ってしまった、そして数秒唸った後

「環境に優しいって何なんだろうね。環境に優しいっていうけどさ、それって環境が人間たちに優しくしてくれるためにしてるんでしょ

？ 別に環境がいくら悪くなっても人間の生活に問題がなければいくらでも環境を破壊するよね、まったくやれやれだよ」

「ずいぶんともなことを言い始める悠さん、僕はびっくりする。」「そ、そうだね……」

「ってこの前ニュースで偉そうな先生が言ってたよ？ ボクもそうは思うけど、環境に優しいのはいいことだと思っよね」

「自論じゃないのかよ！ いきなり真面目に話し始めるからびっくりしちゃったよ！」

「ボクはいつも真面目です」

と言いながら綺麗な黒髪をさらっと払う。

「いや、ふざけるとは言わないけどさ……」

そのあとユニークな電化製品(?)を見て回っていると「せんぱい、ねーさん」と呼ばれ奏音ちゃんたちの方へ歩いていく。

「このデバイスどうかな？ 最新機種なんだけど、先輩買わないか？」

「え、いや。僕お金ないし……」

うーんと悠さんが隣で悩んでいる。そして

「せっかくエルデに来たんだし、ボクがプレゼントするよ！」

「え、いや、悪いよ！ 高そうだし……」

そもそもプレゼントするのは男がするものだ、女の子にされるのは嬉しいけども……

「新規は安いんだよ、学割きくしね」

「ケータイかよ！」

ホントにケータイみたいだった。ちゃちゃっと会計を済まし悠さんが戻ってくる。

「はいこれ」

とってってネックレス型のデバイスを渡される。

「あ、ありがとう……。大切にするよ！」

「うん！ コンセプトは『説明書なんてないんだぜ！ 何故って？ めんどくさいからだよ！』らしいから説明書見なくても使えると

思うよ、ていうか無いよ」

「それって簡単だから説明書作らなかつたんじゃなくて、めんどくさいから作らなかつたんだよね!？」

金色の長方形のネックレスを指でなぞると光の画面が展開される、アイコンは分かりやすく、タッチで操作できるようなので何とかなりそうだ。ていうか、これどんな技術使ってるんだろう……。デバイスをいじっていると隣から声がある

「あああ~~~~~」

変な声のする方をみるとルーナが変なことをしていた。変なことだ。金色の扇風機に向かって声を発していた。

「へえ、エルデにも扇風機はあるんだねって　おいっ!」

「な〜ん〜で〜しよ〜う〜?」

「ルーナじゃない!　奏音ちゃんそんなに早く髪を回して疲れなのか?」

扇風機だと思ったもの、それは奏音ちゃんの金髪サイドポニーだった。本当の馬の尻尾のようにすごい勢いで回っている、これなら夏も快適に過ごせるだろう、と思ったが、残念ながら回している本人は相当疲れるようで、汗だくだ。これでは暑苦しくて実用化は不可だな。

「はあはあはあ、ルーナ先輩、こういうの、はあ。無茶ぶりってやつですよ……」

「ちなみに私のツーサイドアップは水中を素早く移動するのに適しています」

「マジで!??」

「マジなわけではないですか、冗談です」

そっくりいながらどういう仕組みかはわからないが手を使わずに、ひゅんひゅんと髪を回転させるルーナ、あながち嘘ではないのかもしれないところが怖い。すると首をかしげる

「?　空輝さん、ツッコミが来ませんね、頭でも悪いんですか?」

「いや、冗談に思えなくて　って頭悪いつてどういうことだ!

その通りだよ！」

「わーお、認めちゃいました！ さらに私のシッコリまで奪っていきました！ やりますね……」

そこで悠さんのケータイが鳴る。

「漫才中悪いんだけど準備出来たみたい、行こうか」
そうして僕たちは学校へ向かった。

第16話 〈On the bed in the bed〉

それは街の中心に位置していた、街のどこからでも見えるくらい高いが、ビルではない。大聖堂にビックベンをくつつけたような形状だ。入口は自動ドアで外見とのギャップが激しい、こんなギャップには萌えない。

入口まで行き、ここにいるはずない人物の顔を見て、僕は自分の目を疑った。

「よ、吉野……？」

茶色いストレートの髪を目にかかるくらい伸ばし、悠さん達と同じようなブレザーにチェックのネクタイをしている。体格はがっしりとしていて、背は高め。本来ここにいるはずのない人物、それは吉野だった

「お、ティエラからのお客さんって東雲だったのか、びっくりだな
たいして驚いた様子ではない吉野だが……」

「はっ、えっ？　なんで吉野がここにいるんだよ！」

予想外の人物に会い、僕は取り乱す。お巡りさんがいたら間違えなく職務質問されたことだろう。そして変態紳士ですと答え……そのあとは考えたくない。

「あれ？　先輩達お知り合いか？」

「知り合いもなにも、同じ学校だし」

「先輩はもうこの学院に入学してたのかわ？」

「違う！　こっちではなくティエラの方だ」

「俺はティエラの学校にも通ってるからな」

「って事は吉野はこっちの世界の人だったってことかっ！？」

「ああ、生徒会長をしている」

まさか昼飯にラーメンを勧めてくるようなやつが異世界で生徒会長をしていたとは……、たしかにこいつならぶらじゃーしてこいよって言ってもおかしくない

「まあ、ラーメン関係ないけどな」

「人の心を勝手に読むなっ！ ていうかどうやって読んだ!？」

「まあとりあえずこれ、天野原に頼まれてた物だ。生徒会長だから
ってそんな簡単じゃないんだからな」

そういつてICカードのような物を渡す吉野。

「なにこれ？」

「入構許可証だ、これがないと入れない。お、デバイス買ったのか、
ならデバイスにいれとけよ」

「どうやって？」

「挿 入っ！」

吉野がアブナイ事を走りながら僕のデバイスにカードをタッチす
ると、カードは吸い込まれるように消えていった。

「はっ!？ お前何した、どうやった！」

「インストール終わったから、入ろうか」

説明は割愛された、おそらく説明されたところで僕には理解でき
ないだろうけどね

自動ドアを通り抜け、学校に入る。

もし誰かが、ここはショッピングモールです、と言ったら僕はな
んの疑問も抱くことなくその言葉を信じただろう。

ホールのように広いエントランスの天井を、吹き抜けが貫いてい
て、目で確認できるだけでも三十階はあるだろう。階段はなく、全
てエスカレーターのように、エレベーターは僕がよく知るそれでは
なく、床が持ち上がるリフトのような物がその代わりをしていると
思われる。春休み中らしいが、生徒は多め。しかし、部外者である
僕に気付くような人は少ない。みんな友達とのおしゃべりに夢中の
ようだ。

「これ何階建てなの？」

「ん？ ああ、必要に応じて増えたり減ったりするから一定じゃな
いんだ。だからなんとも言えないな」

普通ありえない事をあたかも当たり前のように言う吉野、さすが

生徒会長。器がでかい。

「生徒会長関係ないけどな。ところで天野原の記憶を取り戻しに行くんだっただな、付いてこい」

リフトに乗り階を上がる、一階の生徒がずいぶんと小さく見えるようになったところでリフトを下り、寮と同じような廊下を数分歩き部屋に入る。

その部屋はたくさん機材が置かれていて、中央に置かれているベツドを除けば、どこかの実験室のようだ。

「ちよつと準備するから待っててくれ」

そういつて吉野は機械を操作し始めた。

「どうやって悠さんの精神世界に行くのかな？」

「安心してくれ、理論は言ったところでわからないだろうが、入るのは失敗しないから。これは作ったワタシが保証しよう！」

奏音ちゃんが慎ましい胸をぽんと叩く

「作ったって何を？」

「そのベツドだよ、ただのベツドじゃないぞ？ クラフトを使う事で精神世界に入る事を可能にするベツドだ！」

「まさか、二人でそこに寝るとかじゃないよねっ!？」

「その通りだぞ？ 別にソファアに座るのでもよかつただけけど、形状は吉野先輩がここだけは譲れないって言うから」

「吉野お！」

吉野は操作を続けながらにやにや笑っている。

「まあ、いいや、よくないけど。ところで、これって前からあったの？ 今回の為に作られたような機能だけだ」

「もちろん今回の為だけに作ったんだよ？」

「昨日の今日でかつ!？ そんな時間なかつただろう」

「知らないんですか空輝さん、奏音ちゃんはバカだけど一応天才なんですよ、バカだけだ」

「はっはっはー、ワタシはバカだったのさ！」

「うん？ 知ってるよ」

「まっ、間違えたっ！ ワタシは天才だったの！ ルーナ先輩が変な事言うから間違えちゃったじゃないですか！」

うふふ、とルーナは笑っていた。

「そうか、凄いんだな奏音ちゃん」

「もつと褒めてっ！」

「凄いバカなんだな奏音ちゃん」

「バカって言うなあ！」

「ははでもさ、奏音ちゃん凄いよ、ホントにありがとう」

そう言っ頭て頭に手を置くと

「ふはっ！ 勘違いしないでよっ！ ワタシはねーさんのたむえ

ゲフッ！」

「ツンデレは私だけで十分ですっ！」

ルーナがいきなり奏音ちゃんの腹にパンチを入れた……

「おいおいソネモント、人数減らすなよ、二人じゃきついんだか

らな」

「私のキャラを奪おうとするからこうなるのです！」

「も、申し訳なかったルーナ先輩、意識したつもりはなかったんで

すが……」

学校に入ってから一度もしゃべらず空気と化している悠さんの方

をみると、緊張しているようで、下を向いていた。

「悠さん？」

「ふへっ！？ な、何かな空君？」

「大丈夫？ 緊張してるみたいだけど」

「うん、その、大丈夫なんだけどさ……、もし空君を閉じ込めちゃ

ったらどうしようって思っっちゃって……」

珍しくネガティブな悠さんだ

「昨日僕に大丈夫って言ってくれたじゃない、大丈夫だよ」

「あはは、やっぱり空君かっこいいや」

「びよほふわっ！」

「お取り込み中悪いが準備ができた、二人とも服を脱いでくれ！」

「え？ 服脱ぐ必要はないんじゃないですか会長？」

「黙れ天野原妹、脱いだ方が雰囲気出るだろ！」

「絶対脱がないからな！ って悠さんちよつと！？」

「うん？ 暑いからブレザー脱ごうと思って」

本気で驚いた、ホントに脱ぐのかと思った。

「まあいい、冗談はさておき、二人とも寝てくれ、これは冗談じゃないぞ？」

「お前が設計したんだろうが！」

こうなってしまったものは仕方ないので、悠さんと一緒にベッドに寝る。表現はエロいが、ただ横になるだけだ。よし、言いなおそう。悠さんと一緒にベッドに横たわる……あんまり変わんないや。

悠さんとベットに寝るのは初めてではないが、やはり照れるし緊張する。ただでさえこれからのことで緊張しているというのに……。

「空輝先輩、精神世界では一人だ、こちらからは何のアドバイスもできない。あ、入ると言っても先輩の精神だけだから、体はこのままだけどね」

「うん、まあ分かってる」

「じゃあ頑張ってくれ」

「頑張れよ東雲」

「フィールグリユック」

「じゃあ天野原妹、カウント始めるタイミング合わせろよ」

「では、三」

「二」

「一」

悠さんはにこりと微笑み僕の頬にキスをした。

「ボクの記憶をよろしくね」

カウントがゼロになった瞬間僕は優しい光に包まれ

第16話 〈On the bed in the bed〉(後書き)

ルーナが言った「フィールグリユック」 ドイツ語で Vie
l Glück 幸運を祈ります って意味 英語ではグッド
ラックにあたります。

ここは……どうやら悠さんの精神に入るとは成功したようだ。

体は浮いていて、自分の周りにはいくつものモニターのようなものがあり、その中で悠さんがほほ笑んだり、悲しんだり、喜んだり、怒ったり。これが記憶なのかな……。

「空君」

不意に自分の名前が呼ばれ振り向くと、悠さんがいた。

「いらつしゃい、ようこそ私の中へ」

おかしい、奏音ちゃんは中に入ったら僕一人だと言っていた、それに何か引つかかる。

「どうしたの空君？ 私のデバイスにお願いに行こうよ」

なるほど、わだかまりの正体はこれか。

「なんで悠さんの格好をしてるんだ？ お前、デバイスだろ？」

悠さんは自分のことを「ボク」と呼ぶ、今までに一度だけ「私」と呼んだことがあるが、それは僕の父さんに自分を紹介するため。

僕と話すときには必ず一人称は「ボク」のはずなのだ。

「うーん、まあそうだな。確かに俺は悠のデバイスだ。よく気づいたな、褒めてやるよ」

「それで、分かってんなら話が早い。悠さんの僕に関する記憶を返してほしいんだ」

「ああ、もちろんだ」

「マジで！ ありがとう」

思っていたよりもすんなりいって、少し物足りない感じがするが、記憶が戻れば問題ない。

デバイスは一呼吸置き、はっきりと言った。

「ああ、もちろん無理だ」

「はっ！？ どうしてだよ！」

「ところで空君、どうして君は悠を『悠さん』って呼ぶんだ？ ル

「ナは呼び捨てなのに」

なんでそんなことを今訊くのだろう、そんなことより記憶なのに！

「そんなことはどうでもいいじゃないか！ 記憶を返してくれ！」

悠さんの格好をしたデバイスは激昂し叫ぶ。

「いいわけねえだろおが！ お前がルーナや奏音の名前を呼ぶたびに、悠がどんな気持ちになってたか分からないのか！？ なんて自分呼び捨てや『ちゃん』ではなくて『さん』なんていうよそよそしい呼ばれ方なんだろうって思ってたんだよ悠はっ！」

デバイスに告げられる悠さんの気持ち、僕はちっともそんなことは考えていなかった。ただ、いきなり彼女ができて、女の子の下の名前を呼ぶのなんてほとんど初めてで、恥ずかしかった。でもルーナは悠さんのおかげで親しみやすくて、いつの間にかそう呼んでいた。まさか悠さんがそんな風に思っていたとは……

「まだお前は『悠さん』って呼ぶんだな」

「く、それは……。僕が悠って呼べば記憶は返してくれるのか？」

「いいや、返せない。記憶を戻すと死にかねないんだよ、あいつは」

「ッ！？ 死にかねないってどういうことだよ!？」

『死』という言葉に僕は動揺を隠せない。

「あいつはな、お前に会うのが初めてじゃない、それには気づいていたか？」

「ストーカーしてたってあれか？ それには気づかなかった」

「まあ、無理もない。俺が記憶を消したんだもんな、でもあの猫の話から思い出してもいいと思っただがな」

記憶を……消した？

「何言ってるんだよ、お前。僕の記憶を消したってどういうことだ……？」

「正確には封印しただけだな、少しのはずみで思い出せるようなもんだっただけ。見せてやるよ、あの時の記憶を」

デバイスはそういつてパチンと指を鳴らす。

辺りは一変し、モニターから僕のよく知る土手へと変わった。

ただ、今の土手とは違い少し昔……僕が小学校の頃の土手だった。僕は登校のために毎日ここを通っていたからよく覚えている、ヒメルを拾ったのもこの川だ。

「ここがどこだかは、分かるよな？」

不意に現れるデバイス

「ああ、家の近くの土手だろ？」

「来るぞ」

土手を歩いてきたのは……小さい女の子、少し悠さんの面影がある。おそらく小学生の頃の彼女だろう、髪にリボンをしていて可愛い。悠さんは川をみていると、何かに気づいたようで走って坂を下る。そして川に飛び込み泳いでいった。

「おい！ 悠さんが危ないぞ！」

僕が彼女を追いかけると

「無理だよ、これは記憶だ。触れない、悠は今でも生きてるだろ？」

こんなところじゃ死なないよ、ていうか俺が死なせないよ」

その言葉に安心するが、悠さんは明らかに溺れそうだ、すると一人の男の子が

「これ、僕だ……」

小学生だった頃の僕は木の板を取り、悠さんを助け出していた。だが何かおかしい、僕の記憶ではこの時助けたのは人ではなく猫、つまりヒメルのはずなのだ。

名前を聞かれた小さい頃の僕は『僕は通りすがりのヒーローさ！』なんて恥ずかしいことを言っている。確かにこのころの僕は何でもできると思っていた、だからヒメルも何も考えずに飛び込んで助けたのだ、本当は悠さんだったようだが……。

ッ！ そこで記憶がつながる、何故悠さんがヒメルの名前を知っていたか……、『ヒメル』という名前は彼女と一緒に考えて付けた名前だった。

「思い出したか？」

いつの間にか最初にいた空間に戻っていた。

「ああ、全部思い出した、この後僕の家に行つてヒメルの世話をしたんだよな」

「ああ、そうだ。そのあと悠が帰るときに言った言葉、覚えてるか？」

「……、悪い。覚えてない」

「まあ仕方ないよな、八年も前のことだ、気にするな」

「それで、なんて言ったんだ？」

『空君、今日はありがとう。ボク大きくなつたらまた来るよ、だから待つててね。ちょっと記憶は消しちゃうけど我慢して。今度会つたときはボクが君を守るから』

「悠はまだ小学生で、テイエラの人間との必要以上の接触は禁じられていた。だから記憶を消さざるを得なかつたわけだ」

「それは分かつたけど、それが悠さんが死にかなないのとどういう関係があるんだよ！」

「悠がお前に会つてから毎日晴れてただろ？」

「確かに、毎日雲ひとつなかつた……まさかっ!？」

「そうだよ、お前が昔『僕は晴れが好きなんだ』つて言ったからだ。毎日クラフト使つて天気をいじつてたんだよ」

「それだけでか？ しかも八年も前のことなのに……」

「悠にとつてはそれだけのことじゃなかつたんだろうよ、それだけじゃないぞ。お前の周りの確率を操作して、何があつても事故に遭わないようにしていた」

「でも、ジェットコースター事故は起きたじゃないか！」

「それまで使い過ぎてたんだ、体力もほとんどなかつた。だから一瞬集中が切れて事故は起きた。それでもお前は生きてるだろ？ あいつは凄いよ、自分が死ぬのを覚悟で力を使つたんだからな」

「そんな……僕なんかのために」

「悠が寝ている間俺と話していたんだよ」

「何を話したんだよ？」

「お前、つまり『東雲空輝』の記憶を封印するってことをだ。そしてたらあいつは、空君の記憶だけは消さないでくれって泣いてたよ」「それでも消したんだな」

デバイスは悠さんの顔で笑う、自嘲的に。

「俺はあいつのデバイスだ、これ以上あいつに危険なことはさせられない、お前がいるとあいつは力を使い続ける、このままだと本当に命に関わるんだよ。それでもお前はあいつの記憶を返せって言えるのか？」

デバイスの真剣な表情に、僕は言い淀む。

「何か、何か方法はないのかよ！　悠さんに記憶を戻しても彼女が危険にならないような方法は！」

「あるよ、空君」

「じゃあそれをすれば」

「君がいなくなることだよ」

デバイスは言う、悠さんの声で。最も確実に簡単な方法。そう僕が消えること。僕がいなくなれば悠さんはクラフトを使う相手がいなくなるし、デバイスにとって僕をこの世界に閉じ込めるのは容易なはずだ。しかし、それはできない。

「……悪いなデバイス、それはできない」

「だろうな、人間なんてそんなもんだ。死ぬのは怖いよな」

「違うんだ、僕は悠さんと、いや悠と約束したんだよ、必ず帰るって」

「そんな約束なんて……関係ない！」

そういつて向かってくるデバイス。どうすれば悠の記憶を取り戻せる？　いや、それは後だ。まずはこのデバイスを何とかしなければならぬ。僕の装備は服だけ、太刀打ちすることはできない……服だけ？　自分の体をみていると『これ』があったことを思い出す。これなら何とかなるかもしれない！

僕はそれを手に取り走ってくるデバイスに

「ごめんね悠っ！」

「なっ!？」

デバイスから放たれる拳を避け、悠のおでこにそれを押しあてる。
押し当てた物、それは彼女にもらったプレゼント。僕のデバイスだ。
吉野がICカードを取り込んでいたのを思い出したのだ。こうすればもしかしたらと思っただが。

「……お前はそれでいいんだな？ この方法なら俺も文句はない、確かにこれが一番良かったかもしれない、名案だよ。お前しか苦しまないからな」

「どうやら成功したようだ。」

「ああ、だから記憶は返してくれ。これからも悠を守ってくれよ」

「当り前だ。これからは悠がクラフトを使っただびにお前の体力が消費される。分かってやったんだよな？」

「も、もちろんだ……」

そんなことは微塵も考えていなかったのだが……

「デバイスの共有なんて考えると、大したもんだよ空輝、まあお前はクラフトを使うことはできないけどな。これからよろしくな相棒」

ナンテコッタ！ 悠さんのデバイスは手を差し出す。

「どうした？ 握手だよ」

悠と固く握手し、男と男(?)の闘いは幕を閉じた。

目を覚ますと白い天井、隣には天使のような女の子が、可愛い寝息をたてて寝ている。

「帰って……、来れたかな」

「おっ、東雲起きたか。って事は成功したんだな？」

「ああ、もちろんだ」

「それにしても三年は長くないか？」

「三、年？ 三年間も僕は悠の中にいたのか!？」

隣にいたルーナが吉野の頭を叩く

「なに嘘言ってるんですか」

「なんだ、やつぱり嘘か……」

「三年ではなく五年です」

「増えちゃった!？ 僕、今何歳だよ!？」

「安心してくれ先輩、三時間くらいしか経ってないよ、全く二人ともおふざけが過ぎます」

「ありがとう奏音ちゃん、かなり焦った」

隣で寝ていた天使ちゃんが目を覚ます

「ふわあ、うーん」

「おはよう、悠」

やはりまだ恥ずかしいが、彼女がそう呼んで欲しいならするしかない。

悠は一瞬驚いた顔したが、すぐに笑顔になり僕に抱き着いてくる

「やっと、やっと呼んでくれたね……」

「うん、ちゃんと約束守ったでしょ？ 今までありがとう、これからは僕が君を、悠を守るから」

目から溢れ出す涙。

悠は泣いていた。

とびっきりの笑顔を浮かべ泣いていた。

そして

「うん」

エピソード

春休み最後の日

色々あったけど楽しかった春休みも今日で終わり。春休み初日からいきなり最終日に飛んでるって思う人もいるかもしれないが、時間があつたら話そうと思う。

少しあの子の話をする、悠の記憶はしっかり戻っていた。もちろん記憶をなくしていた時の記憶も残っている。「いくら記憶をなくしてたからって、ファン一号っていうのはひどいよね、ごめん」と謝られたが僕は全く気にしていなかった。「すっごい傷ついたんだよ！ 今度お昼ご飯でも一緒にしようよ」と言っておいた。

そんな経緯もあり、今日は悠に昼ご飯に誘われている。作ってくれるらしい、あのリミットブレイクスパゲッティを食べられると思うと、楽しみで仕方がない、それがなくても彼女とのお昼ご飯は楽しみなのだけだ。

チャイムを鳴らすとドアが開く

「あつ、空君！ いらっしやい」

家上がりリビングへ通されると

「おつ、せんぱーい」

「こんにちは、空輝さん」

ルーナと奏音ちゃんがいた

「なんでお前らがいるんだよっ！」

「だってここワタシの家だし」

「ごもつともな事を言う奏音ちゃん

「彼女の手作り昼ご飯を二人で食べるなんて、そんなステキイベントはこの私、ルーナ・ソネモントが阻止します、全力で阻止しますっ！」

「迷惑なサブキャラだなっ！」

「残念ながら私に攻略ルートはありません、残念でしたねキリッ」

キリッとした表情でキリッと言うルーナ

「なに自分でキリッって言っちゃってんだよ！」

「私はメインヒロインですから、ドヤツ！」

「だから何で声に出してんだよっ！　ちなみにメインヒロインはただ一人、悠だけだからなっ！」

「わわっ、ボクがメインヒロインだよっ！　でも攻略キャラが一人のゲームなんて売れないよね」

「大丈夫、僕が買いまくるからっ！」

ルーナはやれやれといった表情を浮かべ

「それは空輝さんが主人公の場合ですね。ちなみに私が主人公の物語では貴方は私が着替えているときに突然現れる変態キャラです！」

「うっ、あのときは悪かったよっ！」

「前にも言いましたね、大丈夫です。勘違いしてくださいよ？　って」

「悪かったって……」

数分後、スパゲッティーが出来たようで、悠がそれを運んでくる

「できたよー」

「それでは」

「……いただきます」

パスタをフォークに巻き、一口……。

例によって口の中に衝撃が走る。だがおかし、これはおかし。悠の方を向くと「どう？」といった表情を返された。僕は微笑んでそれに応える。

リミットブレイクスパゲッティーに何かが起こっていた、どうしたらあのスパゲッティーがこうなるのか、不思議でたまらない。散々勿体ぶつたが感想を言おう。

まずい……。

「どうかな？　うまくできたと思うんだけど」

僕の笑顔は苦笑へと変わる。

「うん……お、おいしいよ」

僕のその答えにルーナと奏音ちゃんはあり得ないと言った顔を
する。

「ねーさん、前作った時と今回、何か違うないか？」

「うん？ 作り方は全く一緒だよ、隠し味が使えなかっただけ」

「悠ちゃんは隠し味に何を入れてたんですか？」

悠さんは頬をかきながら苦笑い。

「ちょこつとクラフト使ってたりにして……」

「なるほど」

僕以外の二人は納得した様子。

「いやあ、今クラフト使つと空君が疲れちゃうからさ、本当に必要なときにしか使えないんだ」

「なるほどね、ごめんね悠、僕のために」

「いやいや、ところで実際どう？ まずい？ 正直に答えてよ」

僕は告げる、正直に

「……これ、まずいよ」

僕が前に目指すと言っていたオタとリア充のハイブリッド、今でもアニメは見るしラノベは読む。彼女ができたことで、女の子の下の名前を呼ぶのも恥ずかしくなくなってきた。これでハイブリッドは完成したと言ってもいいと思う。

でも、実際になってみて今思うこと。

それはハイブリッドなんてただ自分が日常の生活を、毎日同じような生活の繰り返しをどうにかしたかった言い訳だったんじゃないかなと思う。

あの頃、と言っても数週間前だけど、あの頃の僕はただ退屈な日々に変革を望んでいて、アニメやラノベの中には変革に満ち溢れていて、それに憧れていただけなんだ。

二次元の女の子はみんな可愛くて、どれもみんな僕の理想だった。そんな子たちと一緒に非日常を過ごせるそれはとつても魅力的だ、でもそれはこの世界で起きてることではない。生み出している人が

いる、作り話。

もちろんそれが悪いとは言わない、絶対に言わない。なぜならその話しに救われる人がいるからだ。落ち込んでいたときに勇気づけられたりすることもあるだろう。

結論として、ハイブリッド、それは一つの理想形だと思う。オタモリア充も一つの生き方で、間違えでもなければ爆発しろでもない。でも今は。悠という大切な存在ができた今は。

オタモリア充も関係なく、大切な人を守っていければそれでいいと思うんだ。

悠が、そう思わせてくれるんだ、ケンカをすることもあるだろう、それでも仲直りする自信はある。

なぜなら悠は世界にたった一人の、僕の彼女だから。

エピソード（後書き）

お疲れさまでした！ 一応一章、と言うか一巻的な感じで「ツッコミはある日突然に」はおしまいです。読んでくださりありがとうございます！
ございました！

今のところ考えているのは「ツッコミはある日突然に2」みたいな感じで続きを書こうと思います。

つまらないからやめとけ、とか言わないでくださいw 悲しいですw

ではまた二章で！ 一章の感想とかいただけると幸いです！ ありがとうございました！

プロローグ（前書き）

ここからは第二章、一巻と考えてくださってけっこうです！

プロローグ

春

それは出会いの季節。新たな学校や新たな友達。通う学校は変わらなくても、クラス替えくらいはあるだろう、皆新たな出会い、新たな環境に期待に胸膨らませ、ちよっぴりの不安とともに長い春休みを終える。

この少女、つねなまな月丘真奈も同じだった。つい先月中学校を卒業し、この春から高校デビューというわけだ。残念なことと同じ中学で彼女と同じ高校に行く友人はいない、だがそれがまた彼女の期待を大きくする要因の一つでもあった。自分を知る人のいない学校、そこで自分はどんな人間にもなることができる、そう信じているのだ。「えーと、ノートよーし、筆箱よーし、上履きよーし、心の準備は？ もちろんよーしっ！」

クリーム色のカーテンにきちんと整理された机。女の子らしい部屋の中で彼女は明日の入学式に一人心を踊らせていた。

「明日から私も高校生かあ、色々頑張るぞおー！」
真奈は弾む心を抑え、眠りに就いた。

同時刻、東雲家2階、空輝の部屋

窓を出来るだけ音を起さないように開ける、部屋の電気が消えてから約1時間、さすがにもう寝ただろう。距離は1メートル、飛べば早いのだが、それでは彼を起こしてしまう。この為だけに用意したはしごを使い、侵入成功。部屋を見回す、彼女の目的は金でも物でもない。

彼女の目的、それは空輝と共に寝る事だった。難無くベッドに侵入し目的を達成、彼の寝顔を見て頬笑みを浮かべ、彼女は幸福の中心に落ちた。

第1話 朝のひと時

朝、デバイスのアラームが鳴り目を覚ます。こう見えてもボクは寝起きがいいんだよ、自慢だね。

目の前には大好きな男の子、東雲空輝君の顔、ついでにいたずらしてしまいたくなる気持ちを抑える。今日はボクの通っている高校の入学式、ボクはつい先月転校してきたばかりだからほとんど新入生と変わらないと思う。デバイスのスヌーズ機能でもう一度アラームが鳴り、観念した空君はゆっくりと目を開ける。もちろん目の前にはボクの顔、つかの間の沈黙の後、空君の目が大きく開かれる。

「うわっ！ えっ！？ なんな何でここに悠がいるの！？」

ボクの記憶喪失事件以降空君はボクを「悠」と呼んでくれる、「悠さん」なんて他人行儀な呼び方より絶対こっちがいい、女心って複雑で難しいんだね、自分で言うのもなんだけど。

「長く説明するのと、短く説明するのどっちがいい？」

空君は少し考えて

「短くお願いします」

「うん、空君が大好きだからだよ」

「ッ」

ウィンクしながら答えると……、空君は白目を剥いて気絶してしまっていた、前にも似たような事があつたなあ。

えいつ！ と空君の頬を軽く叩く

「はっ、えっ！ 何で悠がここにいるの！？」

記憶が飛んでいた？ まさかボクじゃあるまいし。

「長い説明と短い説明どっちがいい？」

またも少し考えて

「長い説明をお願いします」

「空君がとっても好きだからだよ」

「短いのも長いのもほとんど大差ないじゃんっ！」

「あはは、すっかり覚えてるじゃん、じゃあまた後でね」

ボクは入ってきたときと同様にはしごを使い自分の家に帰る、いくら時間が早いとはいえ、いつまでも空君の家にいるわけにもいかない、遅刻しちゃうもん。

天野原家1階リビング

「お、ねーさんおはよー」

この金髪の可愛い女の子は、天野原奏音ボクの妹だ、何故姉妹で髪の色が違うかと言うと、父さんの髪が金色だからだと思う、ボクは母さんの髪の色を受け継いだというわけです。

奏音はサイドポニーにしていない、朝だからだろう。いつも思うんだけど、ホントに髪が綺麗、結んでいない金色の髪はサラサラしていて、窓から差し込む光を反射し神々しく輝いている。自分の髪に自信がないというわけではない、奏音とは同じシャンプー、リンスを使っているし、髪には気を使っている、でもジャンルが違う、黒髪対金髪では鬪えないのだ、それぞれにそれぞれの良さがある。

「うん、おはよー」

「悠、あんまり空輝君に迷惑かけちゃだめよ？」

まさかボクの所業が母さんにはばれていたとは

「な、何故それを知ってるの母さん？」

母さんは奏音の方を見る、すると奏音は舌を出して

「いやー、プリンには勝てなくて……」

「なるほどね、ならしかたがないや」

プリンの魔力は凄まじいからね、屈してしまうのは仕方ない

「ねーさん！ 今のところ空輝先輩だったら『プリンぐらいでバラすなよっ！ お前をバラバラにしてやろうかヒャッハー！』って突っ込んでくれたぞ」

「いやいや、空君はヒャッハーとか言わないからさ」

「早く朝ごはん食べて着替えて来なさいよ、待ち合わせしてるんでしょっ？」

そうだった、こんなところでゆっくりしている暇はなかった

ボクは朝食のラーメンをさつさと食べ終えて身支度を整え自分の部屋へと戻った。

ティエラの高校の制服に着替える、サンストニフオン国立学院はなかなか心の広い学校で、親の同意が得られれば、ティエラの高校にも通うことができたりする。

パジャマを脱いだところでカーテンが開いていた事を思い出し、閉めようと窓の方を向くと 空君が目を真ん丸にして立っていた。

……状況整理はじめます。

時間はだいたい7時ちょっと前、ボクは自分の部屋でお着替え中、上半身は下着（可愛いのみ）のみ。窓、カーテン共にフルオープン、隣の家ではボクの好きな人がこつちを見て固まっている。明らかに無意味だと思う質問を試みよう

「あの、空君……見た？」

……つかの間の沈黙

「きゃー！ー！ー！！」

空君は悲鳴（？）をあげカーテンを閉めてしまった。

下着を見られるというハプニングはあったけど着替えは終了。ボクから言わせて貰うと、下着を見られるなんて些細な事だと思う、さすがに生を見られちゃうのは恥ずかしいけどね。だって中を隠す為に穿いてる物を見られていちいち恥ずかしがってたら、外なんて歩けないじゃないですか。いやいや、見せてって言われても見せないよ？ さすがにそれはないし、そんなことを言う人もいないと思う、そう信じたいな。

「さてと、そろそろ行きますか」

玄関で靴を履いていると奏音に声をかけられた。

「ねーさん、先輩には内緒だぞ？」

「うん、大丈夫。じゃあ行ってきました」

「いつてらー」

家を出ると既に空君が待っていた

「あ、ごめん空君待った？」

すると急に空君が頭を下げる

「ごめんなさいっ!」

「えっ!?!」

後から来たのはボクなのに、なぜか空君に謝られた

「なんで空君が謝るのさ、ボクが遅れたのに」

「いや、さつき、その、覗いちゃったから」

「あれは空君は悪くないよ、ボクのミスです、ごめんね」

「僕としてはむしろありがたかったんだけど……」

「え? 今なんて?」

よく聞き取れなかった。

「いや、なんでもない! そろそろ行かないと遅刻しちゃっよ!」

「うん? そうだね、じゃあ今日も1日がんばろー!」

「おー!」

ボクが拳を突き上げると空君もそれに続いてくれる。

空君がいてくれればどんな事でも頑張れる気がする、すっごい頼りになるんだから

第1話 朝のひと時（後書き）

この後は悠に代わり、空輝がお送りします。

第2話 事故はある日突然に

最寄駅に着き、改札を出ると春の爽やかな風が頬をなでる
学校へと続く桜並木、風が吹くたびに花びらが舞い、太陽の光り
を受けて輝いている。

道を歩く生徒の中には真新しい制服に身を包み、どこか緊張した
ような面持ちをした生徒もいる、おそらく新入生だろう、僕も2年
前はそうだった、友達ができるか、かなり不安だったが、同じ中学
校の真野もいたおかげでなんとかなった。

「うわあ、桜が綺麗だね！」

悠が顔を輝かせて言う

「なに言ってるの悠？」

僕の否定の言葉に悠は「え、綺麗じゃない？」と首を傾げる
僕は一呼吸置きキリツとした表情で言う

「こんな桜より、君の笑顔の方が比べ物にならないほど綺麗だよ、
キリツ」

バカみたいな口説き文句に悠の顔が薔薇のように赤くなる

「あああ朝っぱらから何いっちゃってるのかな空君！ あれ？ 今
ルーナちゃんのマネした？」

最初はわたわたしていたが、途中で気付かれた、以前ルーナが語
尾にキリツとかドヤツって付けていたのを使わせてもらった、とい
うかつい言っちゃった

「えっ東雲君と悠ちゃんってその、付き合ってたりするの……？」
いきなり後ろからかけられた声に胸を突かれる。バツッと振り向
くと、そこには黒髪をツインテールに結んだ可愛いらしい女の子、
藤永理沙さんがいた。いてしまった……

「あ、理沙ちゃん、おはよー」

「うん、おはよー。じゃなくてさ、付き合ってるの？」

まずい、今僕たちが付き合っている事がばれるとそのうち真野に

も伝わるだろう、そうなるよ……考えたくない。

「うん、付き合ってるよ」

……言ってしまった。悠は普通に答えてしまった

僕は考える。コンピューターの処理能力でさえ追い付かないようなスピードでこの場をどう切り抜けるかを考える。

まずは『うん、付き合ってるよ』に焦点を当てる

「違うんだ藤永さん、今は、『運尽き合ってるよ』って意味なんだ！」

「東雲君無理矢理すぎ、ていうか、何それ、二人とも運ないの？」

くつダメか！ なら次の手だ！

「考えてみてよ藤永さん、僕みたいなのがこんな可愛いゆつ、天野原さんと付き合えるわけ」

「空君はすっごいかっこいいよ」

悠は僕の右腕に抱き着きながら言った。

……詰んだ、もうダメだ。ここからではどんな言い回しをしたところで隠すのは不可能だ、万事休すとはこのことか……。

僕が諦め、肩を落とした瞬間、それは起こった。

背中に衝撃が走り僕の身体が宙を舞った。重力に逆らいながら空を目指す、志し半ば、地面に引き戻される。無様に地面に落下するが……、着地時の衝撃がほとんどない。

「空君大丈夫!？」

悠の手首が光っている、クラフトを使ったようだ。目には涙を浮かべ、かなり焦っている様子だ。

「うん、ありがと大丈夫 うッ」

100メートルを全力で走った時のような疲労感が僕の体を襲う。これが力の代償というわけか……。

後ろを向くと自転車と女の子が転がっていた。女の子は起き上がり、僕の方を向くと

「ごめんなさい！ 大丈夫ですか!? 桜があまりにもきれいで、上をみてたら……」

腰のあたりまで伸びた黒いストレートの髪、鈴を張ったような目をしていて整った顔立ちだ、かわいらしいという言葉がぴったりな小さな女の子。制服は新品だろう、つまり新入生だ。

「うん、僕は大丈夫、君は？」

「私は月風真奈と言います、女子高生歴約7時間です！」

「うん、まあ。うちの高校の新入生ってことね、僕が言いたかったのは君は大丈夫？ ってことなんだけど」

「あつ、すみません、私は大丈夫です！ ついでに言うと、自転車も元気です！」

「ねえ！ 自転車乗ってるのによそ見してちゃだめでしょ！ ボクがいなかったら大事故だったんだよ！」

珍しく悠が本気で怒っている、初めて見るかもしれない、悠の怒っている顔。

「ごめんなさい……」

「ま、まあ僕は大丈夫だしこの子も反省してるみたいだしさ、許してあげようよ」

悠は腑に落ちないといった様子だが「まあ、空君がそういうなら」と引き下がってくれた。

「ところでお兄さん、このお姉さんが言った『ボクがいなかったら』とはどういう意味ですか？ お姉さん何もしてなかったですよ？」

「僕の名前は東雲空輝、彼女は天野原悠、こっちは藤永理沙さん。みんな3年生だよ」

「ふわっ！ なるほど、分かりましたところで天野原先輩が言ったことの意味は？」

「え、えーと……」

僕が言い淀んでいると

「そんなことどうでもいいでしょ！ 言っただって分からないんだから、言わなくても同じじゃない！」

悠が勢いに任せて言い放った。

「すみません……」

「あー、そろそろ行かないと遅刻しちゃうよ？」

藤永さんが時計をみながら言う。

「とりあえず、学校行こうか」

気まずい空気のまま、僕達は学校へと歩いた。

第3話 入学式と始業式それとクラス替え

忘れていた、すっかり忘れていた。今日は3年生になって初の登校日、これが何を意味するか。そうクラス替えだ。学生にとってこれほど大切なものはないだろう、割り当てられたクラスによって、その1年がどのようなものになるかが決まってしまうと言っても過言ではない。3年生にもなっただけで知り合いのいないクラスに割り当てられてでもみる？ 周りでは今までの2年間でグループが形成されている、僕みたいな人間にはその輪の中に入る度胸もなければ力もない、そんなことは不可能だ。つまり、お願いだから悠と同じクラスにしてください！ 僕は神様に願う、神がいないのなら悪魔に、悪魔がいないのなら……天使に？ もうどうでもいい誰でもいいから叶えてくれ！

下駄箱に張り出されている新しいクラスの書かれた紙、この紙が死刑宣告書になるか天国行きの手ケットになるかは運次第、いざ！ おそろおそろのぞくと早速1組の一番最初に天野原悠の文字、悠は1組だ。当の本人は余裕の面持ち、まあ彼女はどのクラスに入っても人気者になれるだろうな、だが僕は違う、便所飯なんて死んでもいやだ！ 視線を下げていくと……『東雲空輝』という文字を見つけた。

ここまで自分の名前を見て嬉しかったことはない、何と表現すればいい？ 歓天喜地、欣喜雀躍、狂喜乱舞、どんな言葉を用いても今の僕の気持は表せない、だから一言でいっちゃおう、ありがとう！「やったよ悠！ 同じクラスだ！ やったよお！ ヒャッハー！」「あ、ヒャッハーって言ったね、奏音もなかなか空君を分かっているようだ」

「悠ちゃん、東雲君、私も1組だ！ 今年1年よろしくね！」

「うん、よろしく！」

「ところで悠、……嬉しくない？」

「うっん、すごい嬉しいんだけど、例えば必ず成功するゲームをした結果成功したら嬉しい?」

「うん? ……あ、なるほど」

つまり悠がクラフトを使ってクラスを同じにしたらしい、天使が叶えてくれた!

名簿をよく見ると、真野や吉野までいた。ふと気付く、名前順で書かれている名簿の最後に『転校生』と書かれていた、どんな子が転校してくるのかな、楽しみだ。

「月凧さんは何組だった?」

「はい、私も1組でした! もちろん1組といっても1年生なので先輩方と同じではありません」

「そりゃそーだ」

月凧さんは何故かもしもじしながら僕を見上げる。

「あの、東雲先輩? よろしければ私のことは真奈って呼んで下さい!」

「うん、わかった。よろしくね真奈ちゃん」

「はい!」

階段を上がり3階へ行く、真奈ちゃんは1年生なので2階で別れた。教室に入り席に着く、偶然席は悠の隣だ。

すると悠が僕の机の前に来て「ごめん」と謝りだした。

「なんで謝るの? 悠のおかげで自転車に轢かれても無傷だし、むしろありがとうだよ?」

「うっん、違うの。クラスを同じにするのはたいして難しくないからそこまで疲れてないと思うの」

「うん、確かに疲れてない、いつやったの?」

「昨日の夜にちよちよつとね」

「じゃあなんで謝るの?」

「さつき空君が轢かれて、ボクもう何が何だか分からなくなっちゃて、ちゃんとクラフトは使えたと思うんだけど、すごい疲れたでしよっ?」

「う、うん。結構疲れた、でもこうなることは僕が選んだわけだし……」
「ボクがそうさせちゃったんだよ、無理しすぎちゃって、記憶失くして……、そのせいで力の対価を空君に払わせちゃって……。自分が悪いのに、そのことを真奈ちゃんに八つ当たりしちゃった……」
悠の目からは涙がこぼれおちる、周りからは東雲の奴、女の子泣かしてるぞ的な目で見られているかもしれないが、そんなことはどうでもいいや。

「ボク、最低だ……」

その言葉に僕は憤りを覚えた。

「違うでしょ！」

机を叩き、いきなり叫び出した僕にクラス中の目が集まるが気にしない、それどころじゃない。

「悠は悪くないじゃないか！ 君がそんなに思い詰めていたのに、それに気付けなかった僕が悪い、本当にごめん」

嗚咽が漏れる、本格的に泣き始めてしまった。

「うっ、空君……ボク……」

僕は席を立ち、悠を抱き寄せ頭を撫でる

「ごめんね、これからは何でも言っつてよ、『悠』って呼んで欲しいっていうのもデバイスが教えてくれたんだ、言っつてくれないと分からないこともあるしさ、ね？」

「うん……」

悠が泣きやむまで数分を要した、その後の僕への視線はお察しの通りだ……。

ま、まあ仕方ないだろ、うん。なんつても言う方がいい！

新しい担任の教師が入ってきた。すらつとした体形で身長は高い、20代後半といったところだろう、外見は若く見える男の先生だ。

「はい、席について。今日からこのクラスの担任になったト部ト部です、下の名前は生徒手帳で調べてくれ、1年間よろしく！」

パチパチと拍手が起こる。

「みんなも気になっていたとは思うが、新学期初日から転校生が来た。じゃあ入ってきて」

教室のドアがスライドし、女の子が入ってきた。雪を欺くように白い肌、少しつりあがった眼に瞳はサファイアのようによく透き通っている、艶やかでさらっとした白銀の髪はツィサイドアップにしている、ただでさえ視線を集める外見に加えて彼女は胸もそれなりにあった。

教室から漏れる感嘆の声、その中僕は一人、固まっていた。何故だ、何故お前がここにいる。

「じゃあ自己紹介してくれるかな？」

「ハイ、ワターシハ、ルーナ・ソネモント言イマース。ミナサン、仲ヨクシテクダサイ、キリツ」

クラスからは「すげえ美人」だの「外人さんだ」だの聞こえてくる。

「おいルーナ！ お前なんで片言なんだよ！ 普通に話せるでしょ！？」

「空輝さん、やめてください、私はこの1年外人さんキャラで通すんですから」

「今そのキャラ自分で崩したよね！？」

「ナニ言ツテル、アナタ、ワタシ日本語ワカリマセーン！」
しれつと言うルーナ、もう駄目だこいつ。

「もう遅いからねっ！」

「みなさん聞いてください、この方、東雲空輝さんは私の着替えを」

「やめるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ホントにそれはまずい、新学期早々クラス全体を、下手すれば学校を敵にまわすことになる。

「なんだ東雲、ソネモントとは知り合いなのか？」

先生は名簿で僕の名前を確認しながら聞いてくる。これでクラスのみんなに名前を覚えてもらえたことだろう、悪い意味で

「……いえ初対面です」

「何言ってるんですか、私と空輝さんの仲じゃないですか、男のツンデレは需要ないですよ？」

なぜか顔を赤らめながら言うルーナ

「なんで照れてんだよっ！」

「空輝いー！！！」

今まで黙っていた真野が爆発した

「サプライっ！」

「供給がどうしたんですか？」

「空、お前あとで体育館裏来いよ、楽しいことしようぜ」

真野がいろんな意味で恐ろしい事をいい始めた

「まあ、とりあえずソネモーントは名前順1番最後だから、あそこに座ってくれ」

先生は窓側の列の1番後ろの席を指差した

「分かりました」

ルーナは「それではみなさん、全く日本語が分からない私ですが、よろしくお願いします」と、流暢な日本語で言い、クラスの盛大な拍手を受けて席に着いた。

「よし、体育館に移動するから廊下に列べ」

今日は2、3年生は始業式なので授業はない。校長の長話を耐えれば帰れるのだ。

移動中、真野とその他から飛んでくる質問を「放課後に答えるから」と受け流し、ルーナの嘘をことごとく否定し、悠の本当の事だけど今言つと色々まずい事を口止めし、へとへとになりながら体育館に着いた。だが闘いはまだ終わらない。その後たくさん生徒が集まり、かなり暑い体育館で、貧血を起こし倒れてしまう人が出るくらい長い校長の話しを聞き終え、クラスに戻ってきた。

「みんなお疲れ様、明日からは普通に授業あるからな、教科書忘れるなよ。じゃあ解散」

手短に終えられた卜部先生の話しに「さようならー」とクラス全員が挨拶したところで僕は走り出す。

ミツシヨンスターだ！

運よく僕は廊下側2列目、ここからなら1番早く教室から出られる
「ちよつと空君!？」

悠の驚いた表情に「後でメールする」と吐き捨て廊下に出る

「ちよつ、空！ 待て！」

後ろからは真野が鬼の形相で追いかけてくる、捕まったときの事を想像すると背筋が凍る。

全力で走る、向かうは下駄箱、とりあえず学校を出よう

階段手前の角に差し掛かると、人が歩いて来ていた、まずい、止まれない！

「きゃっ！」

僕はどうすることも出来ず、衝突してしまった。

だがおかしい、走っていた僕が突き飛ばされ、相手は尻もち程度。

「いててて、ごめんなさいっ！ 大丈夫ですか!？」

「あれ、東雲先輩」

相手は真奈ちゃんだった。

「今度は私が轢かれちゃいましたね」

真奈ちゃんは笑いながら言う

「そんなことより大丈夫!？」

「当たり前だろ、ワタシを甘くみるな先輩」

角から姿を現した少女。黄金色に輝く髪をサラッと流し腰に手をあて、威張っている。普段のサイドポニーでは分からない神々しさを放っていて、少しいつもと違う雰囲気だ。

「か、奏音ちゃん!？」

「あれ、東雲先輩、奏音ちゃんのこと知ってるんですか？」

不思議そうに首を傾げる真奈ちゃん

「ああ、真奈ちゃん、先輩の家はワタシの家の隣なんだ、お隣りさ
んだな！ よく遊びに行く」

「待て待て待て！ なんで君がここにいる？ しかもうちの高校の制服なんて着ちゃって」

奏音ちゃんは、ダサイとはいかないまでもそこまで可愛くはない紺色のブレザー、つまりうちの高校の制服を着ていた。悠のときも思ったけど、素材がいいと、どんな服を着ても似合う。

「ご挨拶だな先輩、ワタシは新生だぞ？ ホントに先輩を先輩と呼ぶ事になるとはな、びつくりだ」

うんうんと頷く奏音ちゃん

「はっ！？ サンス」

途中で口を塞がれる。奏音ちゃんは僕の耳元で「この高校では内緒なんだ、言わないでくれ」と囁いた。

「入学式は終わったの？」

「うん、帰ろうと思って、ねーさん達を探しに来たんだ」

「なるほどね」

「ところで先輩、後ろに立ってる赤鬼さんはどなたかな？」

奏音ちゃんに言われ、振り向くと、そこには赤鬼さん、もとい真野が腕を組んで立っていた。

「よ、よお真野。偶然だね」

「ああ、空。ホントに偶然だな」

そこで僕の脳は記憶するのをやめてしまった……。

第4話 仲直りはある日突然に

僕は夢の中で酷い目に遭っていた。

身体はスーパールールよろしく上下左右に跳ね回り、終いには窓ガラスをぶち破り、校庭へとダイブ。外へと投げ出された僕は重力に引っ張られ、木の枝を折りまくり、地面に落下した。これはあくまで夢の中の話しなので、実際何が起きたかは分からない。あれだね、重力にはモテる僕だ、引っ張られるくらいに。

そして「空君！ 空君！」と呼ばれ、目を覚ましたところが今ここ、保健室のベッドであることは間違いない。

「なにになに？ 僕は今重力にモテモテだったんだけど」
僕が冗談を言うのと悠は頬を少し膨らませ

「真野君には困ったものだね、奏音がいなかったら空君大怪我だよ？」

「まあ、いつものことだし慣れたよ」

「おいおい、先輩を助けるこっちの身にもなってくれ。かなり疲れるんだ」

悠の隣に立っていた奏音ちゃんが呆れるように言う

「あれ？ 奏音ちゃん何にもしてなかったですよ、助けるってどういう事ですか？」

二人の後ろからひよこつと頭を出し、不思議そうに尋ねる真奈ちゃん、奏音ちゃんが困ったように悠の方を見る、すると悠は同じようにこっちを見た。僕にどうしろと……

「あー、まあそれは置いてさ、悠が真奈ちゃんに言いたい事があるんだって、聞いてあげて」

ビクツつとする悠

「置いとかれちゃいましたっ！？ まあいいです。と、ところでなんでしょう、天野原先輩……」

真奈ちゃんの中で悠は怖い人と位置付けられてしまったのか、少

し不安そうな顔で尋ねる。悠はもじもじしながら口を開いた

「その……、さっきは怒ってごめんなさいっ！ 最近ちょっと、よくない事があって、八つ当たりしちゃった……」

真奈ちゃんは鳩がバズーカ砲を喰らったような顔をして口を開けている

「先輩、それ鳩死んじやうから、羽一枚残らず消し飛ぶから」

「なんのことだ奏音ちゃん？」

「もし許してくれるなら、名前で呼んで欲しいな……」

「は、はいっ！ もちろんです！ よそ見をしていたのは私ですし、怒られて当然なのに、ちょっと怖い人だとか思ってた、こちらこそごめんなさいですっ！ これからはよろしくお願いします悠先輩！」

「うん！」

二人は固い握手をした。

「ところでルーナは？」

僕は彼女がいないことに気が付き尋ねる

「あれ？ さっきまで一緒にいたんだけどなあ？ どこ行ったんだろ」

すると僕の寝ていたベッドの布団が盛り上がり

「呼びましたか？」

僕と同じベッドで寝ていた……。

「なんでお前が寝てるんだよっ!？」

「眠いからです、憧れるじゃないですか、授業サボって保健室のベッドで寝る、青春の1ページですね。というわけで、ドッキリだいせーこーう！」

「なななダメだよルーナちゃん！ なんで空君と一緒に寝てるんだよ！ それはボクの役回りだよ！」

「いいじゃんたまには。私も甘えたい年頃なの」

「バカなことを言うなあ！ それに今は授業中じゃないからサボってることにはならないからな！」

「うわー！ 綺麗な人です！ 美人さんです！」

真奈ちゃんが指をさしてきゃーきゃー騒ぎ始めた

「この人を指差して騒いでる子は誰ですか、空輝さん」

「1年生の月凧真奈ちゃんだよ」

「はい！ 真奈です！ よろしくお願ひします！ 東雲先輩、このおとぎの国のお姫様みたいに可愛くて、美しい方はどなたですか？」
「褒めすぎだからね、確かに綺麗だけど。彼女はルーナ・ソネモントさん、留学つてことにしといて、あと僕を介して自己紹介するのやめていただきたいんだけど……」

「よろしくお願ひします！ ルーナ先輩！ ところで留学にしといて、とはどういうことでしょう？」

「まあまあ真奈ちゃん、細かいことは気にしない、気にしたらそこであなたは死にます、キリッ」

ルーナはにつこりと笑いながら恐ろしいことを言いだした。

「わ、わかりました！ これっぽっちも気にしないので、死にたくないです！ 私はまだ女子高生歴10時間くらいです、まだ死ぬには早すぎます！」

「安心しなよ、死なないから」

「マジですか！？ これほどまで綺麗な方が言うとなんだかホントに死ぬ気がします！」

「安心してください真奈ちゃん、空輝さんが死にます」

「えっ！？」

僕と真奈ちゃんの声が重なった。

「ルーナちゃん！ 空君は死なないよ！ ボクが護るんだから！」

「冗談だよ悠ちゃん、気にしない気にしない」

「あの、とりあえずさ。帰ろうよ……」

僕達は学校を後にする、あれ？ 真野はどこに行ったんだろう…

…？

第5話 下校風景 くあの頃はまだ期待に胸を膨らましてたなあく

帰り道、ふと気になったことを訊いてみる。

「真奈ちゃんと奏音ちゃんはいっつ仲良くなったの？」

「えーと、私の回想シーンに突入してもいいならお話します」

「うん、じゃあいつてみようか」

「はいっ！」

朝っぱらから人を轢いてしまい、私の高校生活は波乱の幕開けでした。犯罪の香りがします！

東雲先輩達と別れた後、私は教室の扉の前で、どう入るべきか悶々と考えていました。

「パターン1、元気よく、おはよー！ ってのはどうかな？ でもそれじゃ、なんだあいつって思われちゃうかも……」

これは却下です

「パターン2、無言で入る。ああ、これじゃあ暗い子だと思われちゃう……」

これも却下です

「よしっ、普通に入ろう、普通に普通に！」

私は意を決し、扉に手をかけスライドさせ一歩踏み出しました。

この一歩は小さな一歩ですが、私にとってはとても大きな一歩です！ですがそこで問題は発生したのです、してしまっただけです。私は床の出っ張りに足を引っ搔け……転びました。

クラスの子からの視線に真っ赤になりながらそそくさと席に着き、心の中で「やってしまった、やってしまった」と連呼しながら担任の先生が来るのを待っていました。

私が教室に入った時間は比較的遅かったので、すぐに先生は来ませんでした。

チャイムが鳴り先生が出席簿を見ながら言います

「入学おめでとう、えーと、月風の隣の席の天野原はまだ来てないのか？」

「ままだではないでしょうか!？」

私はストレートのくせにテンパリながら答えました

そのときです

ガラツつと扉が開き

「その結婚待ったあー!!」

彼女は綺麗な黄金色の髪をなびかせ、変なことを叫びながら颯爽と教室に入って来たのです

「天野原、遅刻だぞ？」

「何を言っているんだ？ 失礼、何を言ってるんですか先生、ボケましたか？」

「天野原……後で職員室に」

「行きません」

先生は「なんだこいつは？」というような顔をしていました

「そもそも私は遅刻していません」

「いやいや、おもいつきりしちゃってるから、チャイム鳴っちゃってるから」

「それは学校とか先生の時計を基準にしたからです、私の時計はまだ6時30分です」

「それが本当だったらお前どれだけ早く来るつもりだったんだよ！」

先生は自分の先生という立場も忘れて、突っ込んでます、いいのでしょうか？

「なんならもう一度チャイム鳴らしましょうか？」

「出来るもんならやってみろ、鳴ったら遅刻はなかったことにしてやる」

すると金髪さんは指をパチンと鳴らしました、その瞬間

『キーンコーンカーンコーン』

チャイムがなったのです、私は、いえ、クラス全員驚いたと思います。

「というわけで、遅刻はなしでお願いしますね」

何事もなかったかのように、私の隣の席に座る金髪さん、私は初対面ということも忘れて話しかけていました

「あ、あの、Nice to meet you!」

「うん、ワタシは日本語話せるからね、ていうか発音いいね」

「Oh! I'm sorryつてええっ!? 金髪さんといったら英語ですよ!? こんなこともあるうかと、今まで英語頑張ってきたのに!」

「それは申し訳ないね、ワタシは天野原奏音、日本人(?)だよ」

「今、日本人の発音が少しおかしかった気がしましたよ? わかりましたっ! 異世界の方ですね!」

「えっ!? どうして!?!」

「だってこんなに可愛い人がこの世界にいるはずがありません、ばればれですよっ!」

奏音ちゃんは何でか、少し落ち着いたように言いました

「君もすごい可愛いじゃないか、名前は何て言うの? よかったらワタシの高校初めてのお友達に……」

その言葉に私は、なんと言えばいいでしょう? 飛び上がりました! とにかく嬉しかったのです

「はいっ! もちろんですよっ! 私は月風真奈っていいいます、よろしくですよ!」

「うん、よろしくね真奈ちゃん」

このあと入学式を終え、奏音ちゃんが「ねーさん達を回収しに行こう」と言うので3年生のフロアを歩いていたら、東雲先輩が法定速度を無視して突っ込んできたんです。

「以上、回想終了です」

「なるほど、なかなか楽しそうな高校生活初日だね」

「はい! これからが楽しみで仕方ありません! 期待でこの小さな胸も大きくなるかもしれませんが、いえおっきくなつて欲しいですよ!」

「あの、ところで奏音。遅刻したの？」

お姉さんモードの悠が奏音ちゃんに言うと、まずいといった表情で「な、なんだねーさん。話し聞いてなかったのか？書類上は遅刻になっていないから、遅刻はしていないぞ……」

悠は奏音ちゃんの耳元で「そんなホイホイクラフト使っちゃ駄目でしょ」と小さい声で言う

真奈ちゃんはきよとした表情だ

「わかった、次からは気をつけ……ます！」

「そういえば悠先輩と奏音ちゃんが姉妹だったなんて驚きです！髪の色とか全然違うのに」

「父さんが金髪で母さんが黒髪なんだ、だからねーさんは母さんの髪でワタシは父さんの髪を受け継いだのさ！」

「ちなみに私の場合、父も母も銀髪です。どっちから受け継いだのでしょうか？」

「どっちもじゃない？」

ルーナの質問に悠が普通に答える。僕の「どっちでもいいじゃん！」というツツコミは間に合わなかった……

「え、悠ちゃん。今のは私的にはボケたつもりだったんだけど……」

「ルーナ先輩！他人に分かってもらえないボケはその時点でボケではなく、ただの戯言ですよ！」

ルーナは地面に手をつき「真奈ちゃん、さりげなくひどいこと言うんだね……」と落ち込んでいた。僕も気をつけよう。

「そういえば奏音、なんで今日はいつもみたいに、髪をサイドポニーにしないの？」

僕も気になっていた事を悠が訊いてくれた、奏音ちゃんはなんでか、髪を結ばず流している

「ん？ ああ、イエメンだよ」

「なんで1990年5月、イエメン＝アラブ共和国とイエメン民主人民共和国とが統合してできた、アラビア半島南西端の国の名前がでてくるんですかっ！？それを言うならイケメンです！」

「いやいや、真奈ちゃん。それも違うでしょ、それを言うならイメージエンでしょ。ていうか、博学だね……」

「はい、私はどんなボケに対しても突っ込めるように、かなり勉強しましたから」

「勉強する理由が少し残念だな……」

「そんなことはありませんっ！ おかげでみなさんと同じ高校に入ることができました！」

「待て待て、うちの学校そんな頭良くないから！」

すっかり蚊帳の外だった奏音ちゃんが一步前に出て振り返り、こちらを向く。

「話を戻すと、うん、ホントにちょっととしたイメージエンジだよ、高校生になったからな！ どう？ 可愛い？」

「可愛いんじゃない？ いてっ」

何者かにふくらはぎを蹴られた、隣の悠は少しご機嫌斜めに見える。

「どうしたの悠？」

「なんでもないもん！」

むすつとそっぽを向く悠。「か、可愛い！」と心の中で叫んだ僕だった。

駅に着き、真奈ちゃんと別れ電車に乗る。

「ところでルーナ、お前の家どこだよ？ 悠の家に居候か？」

「まあ、そんなところですよ」

ルーナは意味ありげな笑みを浮かべた。この後、僕はこの「意味」を知ることになるのだが……、それはずいぶんと後の事になる。

第6話 妹萌え、それは幻想、のはずだった……

家の前で悠と奏音ちゃんとルーナと別れ「ただいま」と家に入る。家にはだれもいないようで、とても静かだ。美佳は地元の高校に決めたので、入学式を終え僕より早く帰っているはずだが……。まあ、あいつのことだ、さっそくできたお友達と遊びにでも行ったのだろう。

2階に上がり自分の部屋の扉を開けると、そこには、ここにいるはずのない人物がいた。

「おかえりお兄ちゃん！ 待ってたよお、お昼まだだよね、私が作るからゆっくりしててね！」

扉を開けるなり、僕のベッドから跳ね起き、甘々な声を出して駆け寄ってきた人物。誰だと思う？ ヒントを言っていこう、銀髪をツーサイド。『ピンポン！』はい僕、答えてください。

「る、ルーナ!？」

せいかーいってそんな自問自答はどうでもいい。

「なあにお兄ちゃん？ あ、何食べたい？ ラーメン？ スパゲツティー？ 蕎麦？ 冷麺？ それとも、わ・た・し？」

こいつのボケにどこから突っ込んでいかわからない、僕の自慢のメインコンピュータ（脳）でも処理が間に合わず、もう何が何やら。

「な、な、なんでお前がここにいるんだよ！ さっき別れたばかりだろ!? ていうか何だよお兄ちゃんって!？」

「うん、早くお兄ちゃんに会いたくて飛んできちゃった!」

窓を見ると開いていた、文字通り飛んできたみたい……。

「さっきまで普通だったよな、この一瞬で何があっただよ!？」

「何言ってるのお兄ちゃん？」

「お前が何言ってるんだよ!？」

僕の腹部に手を回し、抱きつくもんだから、その。見事な双丘が

……。
「お前の兄になつた覚えはない！」

衝撃を受けたような顔をするルーナ、目に涙を浮かべ

「え……ひ、酷いよ……」

僕もいい加減わけがわからなくなってきた、この反応から察するに、ボケではないと見える。とりあえず泣かすのはよくない、色々よくないので、謝ろう。

「わ、悪かつた悪かつた、とにかく泣かないでっ！」

ルーナは依然僕の腹に抱きついたまま上目遣いで

「お兄ちゃんって呼んでいい？」

前にも言ったことがある気がするのだが、実際に妹がいる兄にとつて、『妹萌え』なんてものは幻想でしかない。以前真野が学校で「妹っていいよなあ、お兄ちゃん、なんて呼ばれてみたいよなあ」なんて言つてたが、僕はその言葉に「妹なんてうるさいだけだぞ、そんなに可愛いものじゃないからな、残念だけど」と返したのを覚えてるが。その、ごめんなさい！ 義妹ならいいかもしれぬ！ 僕の「妹」に対しての考え方が変わった瞬間だった。

「う、うんまあいいから、とりあえず離れてくれないかな？ その……当たつてるんだけど」

ルーナは自分の胸部を見て

「見たいの？ お兄ちゃんになら見せてあげるよ？ なんなら触らせてだつて」

「やめろお！ やめろお！ やめろお！ 助けて！ だれか、誰でもいいから助けて！ 僕は悠が大好きなんだあ！」

僕がずいぶんと恥ずかしいことを叫んだ瞬間、窓からの来訪者。

「そそそ空君！ どうしたの！？ ずいぶんと嬉しいような恥ずかしいようなことを叫んで、でもやっぱり嬉しいかなあ、つてあれ？ ルーナちゃん、ここにいたの？」

「誰ですか貴女は？」

「え、何言つてるのルーナちゃん？ 悠だよ、天野原悠。みんなの

アイドル悠ちゃんだよ?」

「そんな人は知りません、自分でアイドルだなんてずいぶんと図々しいですね」

悠の冗談に真面目に答えるルーナ、悠は目尻に涙を浮かべている
「ゆ、悠! ほら、君は僕だけのアイドルだから、他人には理解出来ないんだよ!」

「冗談だったに……、ルーナちゃん酷い……」

僕の言葉は届かなかったようだ……

「それよりお兄ちゃん、何食べたい?」

「じゃあラーメンでお願いします……」

「うん分かった! お兄ちゃんのために私頑張って作るから楽しみに待っててね!」

そう言っつてルーナは1階に降りて行った

「あの、悠、大丈夫?」

「……………」

ダメだこの子、早く何とかしてあげないと……

「僕のアイドル悠ちゃんに悲しんでる顔は似合わないよ、ほら、いつもみたいに笑って僕に元気を分けてよ!」

悠の表情に段々と輝きが戻ってゆき

「うん、そうだね、ありがとう!」

悠が元気になったところで、本題に入る。

「ルーナはどうしてあんな風になったの?」

「うーん、ボクにも分からないよ、さつき家帰った時は普通だったと思うんだけど……、ボクはすぐに、その、トイレに行っちゃって」

「ってことは、その間に何かあったと考えられるね」

「奏音が何か知ってるかも」

そう言っつとポケットからケータイを取り出し、電話を始めた。

「家隣なんだから、ちよつと呼べば」

「なーにーねーさん。ご用がある方は発信音の後に奏音様お願いします、私の話を聞いてくださいって言っつてください」

僕が言い終わる前に奏音ちゃんが窓から入って来た。

「ピー」

「奏音様お願いです、ボクの話しを聞いてください」
「なんとも律義な姉妹だ……」

「よおし、聞いてしんぜよう、なんだねーさん？」

「ルーナちゃんがおかしくなっちゃったんだけど、奏音何か知らない？」

「ギクツ！ ルーナ先輩がおかしいのはいつもの事じゃないか」
「奏で音ちゃんは目を逸らし口笛を吹き始めた」

「今ギクツって言ったよね？ 奏音ちゃん何か知ってるの？」

「いやいや、それはギリシャ・シヨックの略で、別にルーナ先輩がおかしくなった要因がワタシにあつて、それがバレそうになって発した言葉では決してないよ！」

「まんまと自白する奏音ちゃん」

「それで、どうしておかしくなったの？」

「なんのことかな……？」

「次はないよ？」

「僕が微笑んで言つと奏音ちゃんは」

「分かりましたっ！ 言います、ワタシがいけないんですっ！ ルーナ先輩のチーズケーキ食べちゃったから……」

「は？ ふざけてるの？ チーズケーキ食べられたくらいであんなにおかしくなるはずないでしょ？」

「いや、空君。食べ物、特にお菓子の力はバカにならないよ？」
「やたらと真面目に言つ悠。」

「そ、そうなの？」

「そうなんです！」

「じゃあチーズケーキが原因だとして、ルーナはどうしたら元に戻るの？」

「「わかんない」」

「どうするんだよ……、僕やだよ？ ルーナがあんなだと、色々」

困るんだけど……」

「ボクだって困るよお！」

「とりあえず、見に行こう。ワタシはまだルーナ先輩がどんなふうになったのか知らないんだ」

「そうだね」

1階に降りると、ルーナはスープを煮込み、麺を捏ねていた。

「ルーナお前、スープから作るのかよ!?」

「あ、お兄ちゃん！ 待っててね、もうちょっとかかるから」

水色のエプロンをつけたルーナはにこにこ笑いながら僕に手を振っている。

「空輝先輩、誰だあれは……、ワタシの知っているルーナ先輩はあんなんじゃないぞ……」

「だよ、僕の知ってるルーナもあんなじゃない、早く元に戻さない……」

僕達はリビングのテーブルに着く

「第1回ルーナ先輩はどうしたら戻るのが会議を始めたいと思いません、意見のある人は手を挙げてください」

「チーズケーキ食べちゃったのが原因ならチーズケーキ返せばいいんじゃないかな？」

「拳手制スルーありがとうねーさん、その案はワタシも考えたんだけど、望みは薄いと思う」

「何で？」

悠は首を傾げる。

「ワタシがチーズケーキを食べた時、本人に見られていたんだ、つまりルーナ先輩は目の前で好きなもの食べられてしまったというわけさ、しかも一口で……」

「お前一口で食ったのか!？」

「おいしかったぞ!」

「感想なんて求めていない!」

「何の話してるのにおにーちゃん?」

振り向くとルーナがラーメン屋顔負けの立派なラーメンを2つ持って立っていた。

「お待たせしましたあ、ルーナ特性醤油ラーメン召し上げれ」

ラーメンからは何とも表現し難い、いい香りが漂ってくる。

「ルーナ先輩、私も食べたい！」

「誰ですかあなたは、食べたかつたら3分お待ち下さい」

「カップラーメンですかっ!？」

「では、いただきます」

奇麗に突き通ったスープから程良い太さの麺を口に運ぶと僕のからだに衝撃が走った。

何だこのおいしさは、天と地がひっくり返るような、いやまだ足りない、太陽が爆発したようなおいしさだ……、自分で言うのもなんだけどそれってどんなおいしさだろう？

「どうしたの空君、なんで逆立ちしてるの？」

僕は知らないうちに逆立ちをしていた、ルーナ特性醤油ラーメン恐るべし……

「どお、おいしい？」

ルーナが不安そうに尋ねてくる

「なんというか、これがラーメンだったら、今まで食べたラーメンがホントにラーメンだったのが疑わしくなるくらい美味しいです……」

「よかったあ！ ああ、御褒美……くれる？」

少し頬を上気させ、上目遣いで言うルーナ

「御褒美……？」

「ほっぺにキスして欲しいな……」

「だめえー！ 絶対ダメだからねっ!」

僕がしどろもどろしていると、悠が立ちあがり叫んだ。

ルーナは怪訝そうな顔をして言う

「悠ちゃんとか言いましたか、貴女はお兄ちゃんの何なんですか？

私の邪魔をしないでください」

「ルーナちゃんこそなんなのさ！ ボクは空君の彼女だもん！ 空君はルーナちゃんのお兄さんじゃないでしょ？ なんでそんな呼び方してるのさ！」

「お兄ちゃん、この子が彼女って本当？」

「もちろん！ 悠は僕の彼女さんだよ！ ていうかルーナ、どのくらい記憶がないの？」

ルーナは目に涙を浮かべ「お兄ちゃんなんて大っきらい！ じゃない！」と言つて家から出て行つてしまった。わけがわからない……。「空君、ボクが何も言わなかったらキスしてたでしょ？ ボクにもしてくれたことないのに……」

僕は考える、確かにいつもとキャラが全然違うルーナは、正直……可愛い。でもその可愛いは愛ではない、僕の向けるべき愛は悠ただ一人だ。そんな大切なことを忘れていた、僕のせいでまた悠を傷つけてしまったかもしれない。謝ろう、少し恥ずかしい言葉になつてしまふかもしれないが……。

僕は悠の頬に軽くキスをして

「ごめんね大切なことを忘れてた、でも安心して、僕が大好きなのは悠一人だよ」

すると悠は真っ赤になり「ふわあ！？ わわわ、わかつてくれればいいんだよあ！」とわたわたしていた。

「ずいぶんとまあ、そんな恥ずかしいことを人前で……。見てるこっちが恥ずかしくなる」

奏音ちゃんがジト目でこちらを見ていた、この子の存在もすっかり忘れていた、気をつけねば！

第7話 マツハ111225 km/h なんだって

ルーナの残していったラーメンを食べ終え、奏音ちゃんが口を開いた。

「ごちそうさまでした。さてと本題に入るうか、第2回ルーナ先輩はどうしたら戻るのか会議を始めたいと思います」

「そうだね、さっきは途中で終わっちゃったから」

「えと、たしかどうしてチーズケーキ返すだけじゃ戻らないかってことだったよね、説明してくれる奏音？」

「うん、チーズケーキ返すだけじゃ何のショックも与えられないだろう？ ワタシが与えてしまったショックくらい、もしくはそれ以上のものを与えないとダメだと思う」

「なるほどね、それでどんなショックを与えればいいの？」

「わかんない……、記憶無くしておかしくなっちゃうくらいなショックなんて、どんなのだろう？ ていうかルーナ先輩どんだけチーズケーキ好きなんですか……」

「とりあえず、当分様子見つてことにしておく？」

僕が言うと、悠は少しふくれて

「ルーナちゃんが空君にベタベタするのやだなあ……」

奏音ちゃんは「そういわれてもなあ」と言いながら困ったような表情を浮かべている。

「安心してよ、僕が悠以外を好きになつたりなんてしないからさ、信じられない？」

「そ、空君のことは信じてるよっ！ でもさほら、なんとというか、女心って難しいんだよ……」

「じゃあ……、悠も泊まっていく？ どうせ家も隣だし」

「いいの!？」

悠の顔が一気に華やいだ

「もちろんいいよ、というか許可しなくても今日の朝とかうちにい

たよね？」

「えへへ、じゃあ色々持って来るね」

「あ、あの先輩！」

テールから身を乗り出し手を挙げる奏音ちゃん

「なにになにつ！？」

そしてもじもじしながら「ワタシもいいかな？」と上目遣いで尋ねてくる。

「ぼ、僕はかまわないけど……、美佳と一緒に寝てくれる？僕はソファで寝るから。ルーナと悠が僕のベッド使っていていいからさ」

「それじゃあ意味ないじゃん！」

悠の勢いに少し驚いた。

「いやいや僕にどうしろと？」

「ふふ、愚問だよ空君。一緒に寝ようよ！」

何度目になるかわからないが、何度でも言おう。僕に女の子と一緒に寝るなんて度胸はこれっぽっちもない、皆無だ。もし僕の生活がラノベとか漫画とかになるとしたら、それを読んでもくれる読者さんからは「お前、何回も寝てるじゃないか」とか「嫌なら俺と代われ」とか言われる気がするが、残念ながらこれは漫画でもラノベでもない、したがってそんな感想はこないわけだ。

まあ、長々と余計なことを言ってしまったが結局のところ何が言いたいかと言うと、僕はまだ女の子と一緒に寝るなんてことはできません、チキン野郎なんです！でも昔に比べると恥ずかしいこともずいぶんと言えるようになったし、これは進歩なんじゃないかな？僕も成長したものだ。

「たしかに空君は成長したと思うけど、一緒に寝るくらいいいんじゃない？」

「えっ？僕何も言っていないよね？」

「うーん、なんとなくか空君の心の声が聞こえてきた」

えへへと笑う悠、可愛い……

「ありがとう！」

「ただ漏れじゃないか！」

「とりあえずだ先輩、ルーナ先輩はどこ行っただらろう？」

その時玄関の扉が開く音が聞こえた。

「ルーナ帰ってきたのかな？」

僕が玄関に見に行く

「あ、兄さんただいまー」

実の妹の美佳が真新しい制服に身を包み僕に帰宅時に言う挨拶を時速1225キロメートルのストレートで投げしてきた。僕はマツハで投げられた言葉を受け止めこちらマツハで投げ返す

「おかえり美佳さん、ところでその後ろの綺麗な銀髪が特徴的な女の子は誰かな？」

「なんか外人さん拾っちゃった」

「犬拾っちゃった、みたいなノリで何言っただよ!？」

美佳が苦笑していると後ろの銀髪外国人さんは

「お兄ちゃんただいまあー！」と抱きついて来た。

「ちよつと、ルーナやめろつて！」

美佳の戸惑いの表情を尻目にルーナはツーサイドアップをぴよこんぴよこんと跳ねさせている。どうなつてんだこいつの髪……。

「兄ちゃん、ドココト!？」

「カタコト!？」

リビングへと移動する

「あ、美佳ちゃんおかえりー、お邪魔してまーす」

僕がルーナと格闘しながらドアを開けると悠の声

「あ、悠さん。ところでこの人誰ですか？ 私が拾って来たんですけど、なんかにーさんと知り合いつぶくて」

「この子は高校の友達のルーナちゃんだよ、同じクラスなんだ」

「え、兄ちゃんまさか同級生に自分のこと『お兄ちゃん』なんて呼ばせてるの？」

そういつて驚愕の表情を浮かべる美佳

「そんなわけないだろ！ 僕はどんな変態さんだよ！」

「どんなって、言葉では表現できないくらいな変態さんだよ!」
「それはすごい変態さんだな!　っておい!　僕は変態じゃないからな!」

「ほう、じゃあなんで同級生が兄ちゃんのこと『お兄ちゃん』なんて呼んでるの?」

「なんでって、ルーナに訊いてくれよ……」

「えーと、ルーナさん?　なんで兄さんのこと『お兄ちゃん』なんて呼んでるの?」

「なんでって、そりやお兄ちゃんはお兄ちゃんだからです」

「いやいや、ルーナさんの兄ではなく、私の兄ですよこれは」

そう言っ僕を指さす美佳。

「おい、僕を物扱いするな」

「変態と物と、どっちがいいかしらね?」

「物でお願いしまーす!」

「美佳ちゃん、私を拾ってくれた事にはとても感謝していますが、私のお兄ちゃんには手は出させませんよ?　それとこれとは話が違いますので」

「いやいや、私は別に。兄ちゃんに手を出すとかあり得ないし」

きっぱりと言っ美佳。うん、正しい反応だ。

「そうなの?　ならいいですけど」

言いながらルーナはおもむろに僕の右手に抱きついてくる。

「ちよつと!　ルーナちゃん、だめだよ!」

すかさず悠も僕の左手に抱きつく。両手に華とはこのことか……。

「なになに、兄ちゃんモテモテじゃん、良かったね」

美佳がにやりと笑っ

「「よくない!」」

僕と悠の声がはもつた。

「ちよつと悠ちゃん、お兄ちゃんの手を離してください、お兄ちゃん私のです!」

「ななな何言っちやってるのかなルーナちゃん?　空君はボクの彼

氏さんだよ！ ルーナちゃんこそ手を離してよ！」

僕の腹のあたりで火花が散る、熱い熱い。

「あ、あの、激戦を繰り広げるところ悪いんだけど、ちょっといかなルーナ？」

「はい？ お兄ちゃんならちよつとと言わず、いつまでもいいよ！」

「えーと、一言で言うただね、君は記憶をなくしている！」

「えー、びっくりー！」

恐ろしく平坦な、つまり棒読みで言うルーナ、ちなみに顔は笑顔だ。

「これぼっちも信じてないでしょ！？」

「うんうん、お兄ちゃんのことには信じてるよ！」

「じゃあ、何その反応？」

「いや、だつてまあ。いきなり記憶失くしてるって言われてもねえ、ほら」

そついいながら苦笑するルーナ

「じゃあ、質問。ルーナの故郷は何がきれい？」

「雪、だね」

「僕と君が初めて出会ったのは？」

「私が寮の部屋で着替えてたら、お兄ちゃんがいきなり襲ってきたのが初めての出会いでした」

「うん、そうだけど、襲つてないからね！」

「あのときは驚きました、そのあと……」

「そのあと！？ 兄さんナニしたの！？」

「何もしてないから！ そういう言い方やめてくれる！？」

美佳の疑いの視線が僕に浴びせられる、今日の天気は美佳の視線だ……、わけわかないな。

「あ、はいはい。ルーナちゃんが通ってる学校の名前は？」

「サンストニフォン国立学院です。もういいです、今更ですが自己紹介始めますね。私はルーナ・ソネモント、17歳です、誕生日

は11月5日でいい子の日です。好きなものはチーズケーキとお兄ちゃん。嫌いなものはそれ以外です。趣味はお兄ちゃんで、特技はお兄ちゃんです。出身はフィンデマークで、今は留学でサンストニフォンに来ていましたが、なんでかテイエラにいます、あれ？ なんででしょう？」

「しつかり記憶喪失しちゃってんじゃないかよ！ ていうか、何その趣味と特技、わけわかんないよ！？」

「なんで私はテイエラにいるんだろう？」

「ボクが、テイエラの高校に行くってなった時、ルーナちゃん3年生になつたら私もそうするって言うてこうなつたんだよ？」

「そんな記憶はありあませんね……」

「よし、記憶喪失が確認されたところで、治しにかかるうか！」

ずっと黙っていた奏音ちゃんがようやく口を開くが「いえ、間に合ってますので」と、却下されてしまった。

「間に合っていないじゃないですか先輩！ 記憶取り戻しましょうよ

！ ワタシが原因なんです、戻させて下さいよ！」

「いや、いいです。このままで十分楽しいですから」

「ていうか、奏音。ルーナちゃん元に戻す方法わかったの？」

「え……、いやだつてほら。本人の意思をですね、ねーさん？」

「ああ、なるほど、たしかに本人の意思は大切だよな」

「このままじゃ埒が明かないので、様子見つてことでもいいかでしょう？ 自分で言うのもなんですけどね、キリッ」

ルーナの言うことは確かなので、とりあえず様子見と言うことでみんな納得した、先が思いやられる……。

第8話 『宿題』の前につけてはいけない言葉

さてと、悠たちが泊まることは問題ないだろう、初めてじゃないし、母だつて許してくれるはず、問題なのはルーナのことだ。いきなり母に「妹ができました」なんて言つたらなんて言われるだろう……、考えたくない。いや待てよ、よく考えたらルーナは妹じゃないし……

「なあ美佳、ルーナのこと母になんて言おう？」

ソファーにねっころがりながら雑誌を読んでいる美佳に相談する。悠たちは「お泊まりセット持って来るね」と言つて出ていった。そんなセットが用意されているとは僕も驚きだ。

「僕にもやつと妹ができました！ とかどう？」

「いやいや、既にいるし」

「どこにつ！？」

「お前僕の妹じゃなかったのか！？」

「なに言ってるの弟のくせに、生意気ね」

「お姉ちゃん！？ ていうか立場逆転！？」

「これからお姉様と呼びなさい」

「いやだよ！ 本題に戻そうよお姉ちゃん！」

「あ、お姉様つて呼ぶのが嫌だつたんだ……」

「姉さんにはわからないとは思うが、姉がいないと姉に憧れるものなんだよ」

「正直に話すしかないんじゃない？」

何食わぬ顔で話を戻す美佳。

「うわひつでえ、何も言わずに話戻しやがった！」

「まあ言い方は考えなよ？ 私もフォローはするけど」

「よろしく……お願いします」

玄関の扉が開く音が聞こえ、リビングに人が入って来た。

「あら美佳、帰ってたの、高校どうだった？」

「おかえり母さん、楽しかったよ」

「それはよかったわ」

そう言ってキッチンへ向かおうとする母

「待て母！ 僕には何もなしかよ！？」

「あら、いたの空輝？」

しれっと言う母

「空気がよっ！？」

「冗談よ冗談。それで、何か用？」

「えーと、今日悠たちが泊まることになってるんだけどいいよね？」

「わかったわ、美味しいもの作るから期待してなさい」

母はこういうことに関して心が広くて助かる。よし、いざ本題へ！

「母よー！」

「何？」

「ありがとう！」

母は僕のいきなりの感謝の言葉に、面喰っている

「いやいや、違うでしょ！？ お礼は大切だけど、言わなきゃいけない事は他にあるでしょ！」

「母！」

「だからなによ？」

「東雲空輝17歳！ 妹ができました！」

さあどうくる母、かかって来い！

「そう、よかったわね」

「そう、よかったわね」

そういつて母は買い物へと出掛けて行ってしまった。

「あ、あれ？」

母の予想外の反応に、僕は立ち尽くしていた。

「兄さんちよつとストレートすぎない？ 信じてないんじゃないかな？」

「な？」

「どうだろっね……」

『ピンポン』とチャイムが鳴る、悠たちが帰ってきたようだ。玄関のドアを開けると悠たちは私服に着替え、大きめのバッグを持つ

て立っていた。僕が「おかえり」と言おうとすると

「おにいちゃん！ ただいま！ ずっと会えなくてさみしかったよあ」と、ルーナが僕の腹に抱きついてきた。

「ちよっ！ ルーナ、ずつとって、たかが5分や10分だろうが！」

「お兄ちゃんとの1分は、私にとっての1世紀なの！」

「5分ってことは……5世紀！？ 500年！？ 国が滅ぶよ！？」

「お兄ちゃんに会えないストレスで私が滅ぼしたんだよ？」

「怖っ！？ なにそれ怖い！」

「何言ってるのお兄ちゃん？ 私は可愛いよ？」

そこで悠のストツプが入る。

「はい、そこまで。あんまり空君にベタベタしないでルーナちゃん、ボクもこの星を破壊したくはないんだよ」

「あら？ 今さりげなく凄いことを言わなかったかこの彼女さん？」

「ゆゆゆ悠さん？ 何を言ってるらっしやるのでしょう？」

「くしゃみ一つで大陸を吹き飛ばしてしまうボクが、その気になればこの地球なんて……」

「ねーさんも先輩たちも、ドアを開けたまま危ない冗談話すのやめないか？ 変な子たちだと思われるぞ？ ワタシに」

奏音ちゃんの言うことも多少は理にかなっているので、リビングへと場所を移す。

「あ、悠さん達おかえりなさい」

「ただいまー」

まるで自宅に帰ってきたかのようになくつろぎかただ……

「ところで私の学校は明日もあるけど、兄ちゃんたちは休みなの？」

「いや、普通に定時登校だけど、なんで？」

「いや、だって泊るって言うたら普通休みの前日かなあってね、宿題とかないの？」

「……………」

今こいつなんて言った？ ナンテイッタ？ 今僕の妹はなんといいましたか？ なんといいましたか、僕の妹は？ 宿題だと……、

宿題、それはホームワーク。僕は宿題を学校ではやらない、何故ならそれは家でやるものだから。ていうか、そんなことはどうでもいい、宿題……忘れてた。しかもただの宿題ではない、『宿題』の前についてはいけない言葉が付いてしまっている。そう、『春休の』だ。この一単語により宿題の量が何倍にも膨れ上がる、なんて恐ろしい言葉なんだ……。

「宿題！ 僕宿題やってない！」

「いやいや兄さん、宿題一つでそんな騒がなくても」

「なめるなよ美佳、ただの宿題じゃない、春休の宿題だ！」

「え、それってまずいんじゃない？」

「ちなみに僕はあまり頭がよろしくない、やばいぞ」

僕は階段を駆け上がり、自分の部屋へと転がりこんだ。

科目は現代文、数学、英語の三科目、量は……、プリント6枚。

ただいまの時刻、午後2時。一瞬で宿題の残量を確認する、このくらいならなんとか……、する！ してみせる！

僕はドアに鍵をかけ、机へと向かった。だが、始めて5分、重大なことに気が付いた。

「あれ？ わからない……？ 微分、積分、いい気分」

歌ってる場合か！ 最初に手をつけた教科が悪かったのかもしれない、数学のプリントを投げ捨て英語のプリントを引っ張り出す。

「仮定法？ もし僕の頭がもつとよかつたらなあ……。っておい！ 悲しいこと言うくらい分からないじゃないか！」

仕方ない、現代文だ！ これなら日本語だし何とかなるだろう！
「舞姫！？ えーと、ちくしょう鷗外さん！ なんで古語で書いた

！？ 現代語で書いてくれ！ でも貴方のエリスさんへの愛はよく伝わりました……」

ダメだ。僕にこのプリント達を終わらせることはできない……。

僕が途方に暮れていると、ドアが叩かれる。

「空君？ コーヒー淹れてきたけど、一緒に飲まない？」

うつ、悠様……。僕はドアを開ける

「どう、進んでる？ って空君なんで泣いてるの!？」

「あのね、全然分からないんだ。ぐすん、日本語が書いてないんだよ……」

悠を部屋に入れ、折りたたみ式のテーブルを出した。

「うーん、そんなに難しくなかったと思ったけどなあ……」

「え、悠もしかして終わってるの？」

「たしか6枚のプリントだったよね、おっきめの」

「うん」

「記憶戻って家帰ってきて、えーと、3日くらいで終わったよ？」

「悠って頭いいの？ ていうか、いいよね……」

「そんなことはないけど……、教えてあげようか!」

「マジで!?! お願いします!!」

こうして僕の宿題は順調に進むと思われた、誰もが(と言っても僕と悠だけが)明日までに終わると信じて疑わなかった。だが、ドラマのように、順調に進むわけがないのだった。

「微分はXの乗数を一つ下げて、下げる前の数を係数にかければいいんだけど、これはわかるよね？」

僕の顔のすぐ隣に悠の顔がある、いかんいかん集中せねば……。

「うん、それはわかるよ」

悠とともに数学のプリントを始めて約1時間、彼女の教え方は驚くほど分かりやすく、数学のできない僕が、まるでできているかのような錯覚を覚えるほどだ。2枚あったプリントのうち、1枚は終わった。これならいける!

『ズドウララララララララ!』とマシンガンのごときスピードで部屋のドアが叩かれる。

「なになに!?!」

ドアが開き「お兄ちゃん!」と、ルーナが入ってきた。しまった、鍵を閉めるのを忘れていた。

「なんだよルーナ、今宿題してるんだけど……」

「お母さんが話があるから、お兄ちゃんを呼んで来てって」

「なっ!?!」

すっかり忘れていた、母にまだちゃんと説明していなかった。リビングへと降りると、母がにっこりとほほ笑んでいた。お、恐ろしい!

「ありがとうルーナちゃん。空輝、ちょっと座りなさい」

前半と後半で声のトーンが違う。僕は言われるがまま母の対面に座る、ルーナは僕の隣の席に腰を下ろした。

「空輝、『ルーナ』という名は聞いたわ。それで、この子とはいったいどういう関係でいらっしやるのでしょうか?」

なぜ敬語なのでしょうお母様……

「え、えーと。クラスメイ」

「私はお兄ちゃんの妹です!」

言い終わる前にルーナが爆弾を投下した

「空輝、それなんてプレイなの?」

「違うんだ母! 色々あつてルーナは記憶がこんがらがって……」

「私ははつきりしてるよお兄ちゃん?」

「あんた外人さん連れ込んで……、そんな子に育てた覚えはないわ!」

「僕だつてそんなことする子に育てられた覚えはないよ! ルーナはただのクラスメイトで」

「クラスメイトだけど妹です!」

「ああややこしい! ちよつとルーナは黙っててくれるかなあ!?!」

「はい……」と、しゅんとするルーナ、少し強く言いすぎたかもしれない、わずかに反省。

「とりあえずだ、ルーナは外国(?)からの留学生で……、ちよつと色々問題あるけどうちに泊めてあげてくれないかな?」

「それは一向に構わないのだけど、あんた悠ちゃんという彼女がいるんだから、あんまり羽目を外すんじゃないわよ?」

「そんなことは分かつてる! 当たり前だろ、僕は悠が大好きだからな!」

僕が言うと同時に悠がリビングに入ってきた。それを聞いた悠は「ふわっ!？」 どうしてそんな話になってるのかな?」と顔を赤くしている。

「まあ、それならいいわ。よろしくねルーナちゃん、困ったことがあつたら何でも言つてね」

しゅんとしていたルーナは一変、にっこりと笑い「はい!」と答えた。とりあえず紹介が終わったところで、僕と悠は部屋へと戻る。「……………、何でついてくるルーナ! 僕は宿題をせねばならん!」
さも当然のようについてくるルーナが口を開く

「私も勉強教えられるもん!」

「ボクで間にあつてるから大丈夫だよ!」

「うう……………、静かにしてるからお兄ちゃんの部屋にいさせてっ!」
それから約1時間、数学は終わった。この間ルーナはずっと僕のベッドの上でごろごろしていた。

「ふう、終わった……………」

僕がそう言うとルーナは「終わったの!? 遊ば!」と、跳ね起きた。

「いや、まだ英語と現代文が残ってる。悠先生、次は英語をお願いします!」

すると悠先生は目をそらし

「じ、実はボク英語と現代文は苦手だっりして……………」

「え!?! 3日で終わったんじゃないの?」

「ルーナちゃんと一緒にやったんだよ、ルーナちゃん数学は壊滅的だけど、英語は凄いできるから……………、さっきは勢いでボクだけで足りてるって言っちゃったけど……………。ちなみに数学と英語で1日、現代文は2日かかりました」

「そうなんだ……………」

「英語ですか? 私の出番だね! キリッ」

「うう、仕方ない。じゃあルーナちゃん、バトンタッチ」

悠はルーナとハイタッチをし、僕のベッドに転がった。僕のベッ

ドはさながら講師の控え室だった。いいにおいとかが付けなくてくれよ？ 眠れなくなっちゃうから……、いや、安眠しすぎて二度と起きないかもしれない……、それはそれでいいかもしれない。

「えーと、仮定法ですね。If it were not for his bad temper, he would be a nice person. 訳すと、『不機嫌でなければ、彼はいい人なのだが』となりますね、これは『If it were not for A』で『もしAがなければ』の慣用句化した仮定法過去の表現だね、覚えないとです！」

「うそ、すげえ……」

ルーナは自称外国人なだけあつてか（本当は異世界人なのだけだ）、そのきれいな声で紡がれる英語の発音は驚くほどよかった。

教え方も素晴らしく、約1時間半で英語は終わり、これまでで6枚あつたプリントのうち、残りは2枚、現代文のみとなっていた。なんだか少し頭が良くなった気がする！

「お疲れ様お兄ちゃん！」と言いながら、ルーナは僕の頬にキスをすると、ガタンとベッドから悠が落ちた。大丈夫かな？

「ちょよ！？ 何をやるルーナ！」

「えへへえ、私にもして？」

悠の方を見ると体育座りをしてこちらにジト目を向けていた。どこかで読んだことのある吸血鬼さんのようだ……。

「ごめんなルーナ、キスは本当に好きな人にしかしちゃいけないんだ、だからお前もそんな簡単にするもんじゃないぞ？ でもこれなら」

僕は「教えてくれてありがとう」と言いながら、ルーナの頭をなでてやる。

するとルーナは嬉しそうに目を細め「本当に好きなんだもん……」とつぶやいていた。

「ところでルーナ、現代文できる？」

ルーナは「ワタシニホンゴワカリマセーン」と首を横にふる。ああ、

そんな設定あつたなあ……。

悠の方を見ると、頬を膨らまし、少しご機嫌斜めなようだ。そういえば悠にはお礼をしていなかったな。

ベッドで膨れている悠の隣に腰をおろし「悠もありがとう」と言いながら頬にキスをすると、悠はボンツ！と赤くなり「ふわあぁ」と倒れてしまった。

こうして頼みの綱を失った僕なわけだが、どうしよう、僕の現代文……。

僕が1人現代文のプリントと格闘していると、突然窓が開き、1人の少女が飛び込んできた。彼女は金色に輝く髪をなびかせながら、綺麗に着地する。僕がよく知る少女、もちろん奏音ちゃんだ。

「せんぱーい、ドアのカギ閉めないでくれよ、こっちから入らなくちゃいけないじゃないか」

そういいながら腰に手を当て、僕を指差す。

「いやいや、そもそも窓は入り口じゃないからね、ノックしてくれれば……」

「入れてくれたのか？」

「うーん、入れなかつたかも……」

「ですよ。あと、ルーナ先輩とねーさんを自分の部屋に入れて鍵なんか閉めてたら、なんか監禁しているみたいだな！」

「おい！ 僕は変態じゃないから！ そんなことしないからね！？ 勉強を教えてもらってたんだよ、高校生になつたばかりの奏音ちゃんには分からないような問題だけどね」

奏音ちゃんにはやりと笑い、机の上に重ねてあつたプリントをペラペラとめくり

「なるほど、ティエラの高校3年生の宿題はこの程度か」

奏音ちゃんはまるでこの程度の問題なら簡単にできるとも言うかのような物言いだつた。

「まさかとは思うけど、できるの？」

「逆に聞くけど、できないの？」

「えーと、悠とルーナに教えてもらってできるようになった、かな」「ぷぷっ」と口に手を当てる奏音ちゃん

「!?!? 今笑ったか!?!? 笑ったよな!?!?」

「こんなのワタシが小学生のころにはできていたぞ、と言っても6年生だからほとんど中学生だけだ」

「マジで!?!? そこまでいうなら証拠を見せてみるよ!?!?」

僕が言っていると、奏音ちゃんはプリントの問題の方を手に取り、僕に僕が悠と一緒に解いた解答用紙を渡す。

「えーと、じゃあ上から答え言っていくから、間違ってたら先輩の方が間違ってると思ってね。まあ、ねーさんと一緒にやったならあつてるだろうけど」

そう言っただけで、式も書かずに解答をスラスラと言っただけで、奏音ちゃん。

「うそだろ……、なんで? どんな技を使ったの!?!?」

結果は僕の反応を見てくれれば分かるだろうが、全問正解だった。「まあ、この程度ならできますとも。ねーさんも多分ワタシほどではないにしても、結構早くできたと思うぞ? 教えていたから時間がかかったんだろうね」

「なるほど、奏音ちゃんは英語とか、現代文とかもできるの?」

「できるよ、一応天才って呼ばれてるくらいだし、この前の入試は満点だった」

「うちの高校の!?!? 僕がギリギリで受かったようなテストなのに!?!?」

確かに悠の一件で、彼女が天才と呼ばれていることは知っていたが、これほどまでとは……、彼女に対する見方を少し改める必要があるかもしれない……。

あ、てことは僕の現代文何とかなるかもしれない!

「奏音ちゃん! 現代文教えて!」

「やだ」

見事な即答だった、鏡に光を当てて、まぶしいと感じるまでの早さ並みだった。ってことは光速！？ 光速答！？ あまりの即答に、新たな言葉を生み出してしまった。即答についてでここまで語る事ができるのは、僕をおいて他にいないだろう。

「なんで!？」

「えーと、ごめんなさい、言い直そう。答えは分かるけど、答えしかわからない。つまりですね、答え合わせはできるけど、教えることはできないかな？」

「うーん、どゆこと？」

「1 + 1の答えは？」

「2? 田?」

「2であってるよ……、それに田だとイコールが必要でしょ、できても王だよ……、ていうかそんなのはどうでもいいの。2の4乗は?」

「言われてみればたしかにそうだ……。王か……」

「えーと……、16?」

「遅いな先輩……、つまりですね、そんな感じで答えを覚えていていうか、頭の中では分かっているんだけど、人に教えられないというか。さすがの先輩でも2の4乗くらいは覚えてると思ったんだけど……」

「ごめん……、とりあえず教えられないってことだね」

「うん、それに他の教科教えてもらったんだから、1教科くらい自分の力でやった方がいいんじゃないかな？」

「そ、そうですね!」

「なんで敬語……?」

「お兄ちゃん、私も一緒に頑張るよ!」とルーナがポケットから『よくわかる日本語』初級編』という本を出しながら言った。

現代文は僕1人で頑張ろう。そう思った瞬間だった。

第8話 『宿題』の前につけてはいけない言葉 (後書き)

受験前の更新はおそらく最後です、次の更新はもしかしたら12月とかになるかもです、よろしくです！

第9話 もやしってけっこう栄養価高いんだよ

時刻は午後6時。悠とルーナと奏音ちゃんに、僕の部屋からご退場していただき、僕が1人で現代文の宿題と格闘して既に1時間が経とうとしていた。

「なんだこの話、主人公酷過ぎる……」

古典の文法書を片手に読み進めた舞姫がやつとのことで読み終わり、あまりにひどい終わり方に僕のテンションは下がりに下がり、ブラジルに届こうとしていた。

「ま、まあ内容はだいたい理解できたし、後は問題解くだけか……」
問題文を読んでいると、静かな部屋にノックの音が響く

「空くん、お夕飯出来たから降りて来てー」

ドアの向こうから悠の声、僕はプリントを置き悠と一緒に1階へと向かう。

「えへへ、今日はボクも手伝ったんだよ？」

「なら……楽しみだ！」

記憶喪失事件の前までは心底楽しみだったであろうが、今の彼女にクラフトを使うことはできない。正確にはできるのだが、僕への配慮ということで必要最低限のときにしか使わないらしい。つまり味には期待できない。嬉しいような嬉しくないような……。でもまあ、味は別として、彼女の作った夕食と言うのは何とも夢のような話しなので、楽しみであることに間違いはない。

リビングに入ると、鍋の乗ったテーブルを囲むように奏音ちゃん、ルーナ、美佳がそれぞれ座っている。

「お、今日は鍋ですか」

「うん！ 野菜とか切ったんだよ！」

切るだけなら味は心配なさそうだ。普段椅子は4つだが、今回は人が多いので6脚となっている。50パーセント増量だ。

各自席に着き、「いただきます」のあいさつとともに食べ始めた。

「空君何食べたい？ 取ってあげるよ！」

隣の席の悠が僕に訊いてくる、それに負けじとルーナも立ち上がる
「お兄ちゃんのは私に取ります！ 悠ちゃんは自分が食べることに
専念してください！」

今まで勉強していた僕は、いい具合にお腹が減っているの、さ
つさと食べてしまいたい。自分で豆腐を取ろうとすると、伸ばした
腕を悠とルーナに左右から掴まれる。

「空君は取らないでね！ ボクがよそつてあげるから！」

「お兄ちゃんはゆっくりしてて！ 私がとるから！」

「あら空輝、モテモテね。爆発しなさい」

「え！？ 母よ、今なんて言った！？」

「空気なら空気らしく酸素と化合して爆発しなさいって言ったのよ。
リア充爆発しろ！」

「母！？ なんで！？ ていうか僕は空気じゃない！ 空輝だ！
自分で付けた名前でしょうに！ それになんですか？ 酸素と化合
して爆発って、水素じゃん！ なんて奏音ちゃんみたいなこと言う
のさ！？」

実の母に予想だにしないことを言われ、僕はどつというリアクシヨ
ンを取っていいかわからない。

「いや兄さん、もつと他に突っ込むべきところが……」

「ん？ そうだよ、なんだよリア充爆発しろって、どこでそんな言
葉を知ったのさ！？」

「ニュースよ、今日も何人が爆発したらしいわ。安心して外も歩け
ない、嫌なご時世だわ」

「そんなわけないよね！？ リア充がいちいち爆発してたら地球滅
んじやうからね！？」

「空君！ そんなことより何食べたいの？」

「お兄ちゃん。はい、あーんして！」

ルーナは僕に豆腐を押しつけて来る、外人という設定なのに箸は
きっちり使えている。器用な奴だ。

「ああ！？ ルーナちゃんずるいよ！ はい空君、あーんして！」
「ちよ、やめれ！ 熱い熱いああー！！」

両サイドからの豆腐攻め（熱々の）にさすがの僕も怒った。

「いい加減にせいやあ！ 熱いから！ 自分で食べられるから！
むしる僕が取ってあげるから！」

「ごめんなさい」

しゅんとしてしまった2人に、適当によそった器を渡すと笑顔に戻り、やっと落ち着いて食事が始まった。

「空君、お豆腐取って」

「はい」

「お兄ちゃん、お肉下さい」

「はい」

「先輩、ワタシは肉団子下さい」

「はい」

「兄さん、もやし」

「はい」

「兄さん、もやしっ子」

「はい……、はい！？ 美佳、今なんて？」

「空輝、白菜とって」

「はいっておい！ なんで僕が全部取らなきゃならん！？ 全然食べられてないんですけど！」

「じゃあ、はい、あーん」

悠が僕に肉を食べさせてくれた。

「次は私の番だよ、んー」

ルーナは目をつむりながらもやしを口に挟んでいる。その薄桃色の綺麗な唇に挟まれたもやしは喜んでいるようで、他のもやしからの嫉妬の炎で炭となることだろう。さらにそれをポツキーゲームよろしく食べた僕は、灰すら残らないだろう、跡形もなく消滅する。というわけで、僕には食べられない。だがルーナは依然としてキスでも迫るかのように唇を突き出してくる。

「んー、んー」

「え、ちよつと、僕にそんな勇氣は……」

「そ、そうだよ！ ルーナちゃん、なんて大胆な！ チキンでヘタしな空君にそんなの食べられるはずないじゃないか！ ボクもさすがにそれは思い浮かばなかったよ！ なかなかやるね！」

「いや、まあそうだけどね！ 他人に言われるとけっこうくるものがあるよ！」

自分の彼女にチキンでヘタレとか言われるって、どんなプレイだよ……。

「なら仕方ありません、あーん」

ルーナは口を諦め、箸でもやしを食べさせてくれた、もちろん鍋からとった新しいもやしだ。

「ごちそうさまでした」

食器を片し、宿題の続きをするため、部屋に戻ろうとすると、母に声をかけられた。

「空輝、お風呂どうするの？ 順番は好きにきなさい、お好きなように……ね」

「なんだ母よ、その意味深な言い方は……？ ツまさか！」

僕は気付いてしまった。今この家には家族の他に3人ほど女の子がいる。とびつきりの美少女達だ。そして風呂の順番。意味はわかるだろうか？ そう。男なら湯を汚さない為にも、最後に入るのがマナーってものだろう、しかしそれはそれでいけない気がするのだ。最後、つまり女の子たちが入った後の湯に浸かる、何とも変態的だ。なんだこの葛藤は、風呂に入る順番だけでこんなに悩むものなのか！？

「ど、どうしたんだ先輩？ 瞬きもしないで唸って」

どうやら僕は瞬きすら忘れて考えていたらしい、奏音ちゃんに声をかけられた。

「ん、いやだつてほら風呂の順番どうしようかなって……、男としては最後に入るのがマナーってものだろうけど、それはそれで変態

チツクだし……」

僕が言つとルーナが手を挙げ

「先も後もダメなら一緒に入ればいいじゃない!!」

「ッ!? その手があつたか! ってバカ! そんなことできるわけないだろう! 無理無理、たしかに家の風呂は大きめではあるが、5人も入れない!」

僕の言葉に驚愕の表情を浮かべる美佳。

「そこ!? お風呂の大きさの問題なの!? 兄ちゃん私たちに入る気? 嘘でしょ!?!」

「もももちろん冗談だとも!」

「ボクは構わないよ? ていうか、一緒に入ろうよ!」

「ワタシはノーコメントで……」

「盛り上がっているところ悪いけども、ごめんみんな、今お風呂見えてきたら、見事に水が張つてあつたの。銭湯でも行つてくる?」

「母よ、そんな歳のドジっ子は重要ないぞ……、イテっ」

ドジっ子な母に本当の事を言つたら叩かれた。さて、冷水が入つた風呂には入れない、今からまた入れ直してもいいが、母の事だからそんな勿体ない事はしないだろう。だがこれで順番の問題は解決だ。そうか、銭湯なら男女別だし、問題ない!

「銭湯……行こうか?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8077v/>

ツッコミはある日突然に

2011年10月30日21時17分発行